

◆私たちは、2017年8月27日から9月2日に、北京と成都を訪問した。私は中国を訪れるのは今回が初めてであり、おまけに中国語の学習歴もなかったため、今回の訪中は非常に楽しみである反面、不安がとても大きかった。

訪中前、私は中国や中国人について「発展が著しい隣国」、「毛沢東」、「爆買い」などという、非常にぼんやりとしたイメージしか持っていなかった。私には中国人の友人がいるため、「中国」や「中国人」に対して極端に嫌なイメージがあったというわけではない。しかし、日本とは政治体制も、経済の状況も、文化も違う国であるためか、隣国であるのに「よく知らない国」だということとは常々感じていた。おまけによく日本のメディアでも取り上げられている環境問題や食の安全性の問題などに加え、両国の間に深い溝を構成している歴史問題などの存在もある。だからこそ私は、自分が直接訪れて自分の目で「中国」を見なければいけないと考えた。

実際訪れてみると、中国はとても活気のある素敵な国だった。朝の大通りをシェアリング自転車で通勤する人々、昼時に賑わう街中の軽食屋、夜の繁華街を歩く若いカップルとカメラを持った観光客。朝から晩まで街を眺めていても飽きることはない。日本人だと名乗ったことで危険な目にあうことは少なくとも今回の訪中ではなかったし、出された食事は（少し辛すぎることは稀にあったが）どれも美味しかった。また、私達も訪問した万里の長城、紫禁城、都江堰など、長い歴史を有する中国には多くの世界遺産があり、どれも美しく雄大なものだった。そして、中国の文化は建築物だけでなく、芸術や演劇にも残されており、私達はその中の一つである変面も鑑賞することができた。

このような伝統を大切にしている一方で、最新技術を駆使したサービスや研究も印象的だった。北京大学や西南交通大学では、学生たちがロボット開発や新型の交通手段の研究に熱心に励んでおり、同じ学生として非常に尊敬できる。また、街中ではQRコードが至るところにあり、現金なしの決済やシェアリング・エコノミーにも使われている。特に、街中に溢れているシェアリング自転車が、スマートフォン決済で利用できるというのは非常に先進的で驚きだった。

また、交流してくれた中国の大学生たちは、日本の大学生と同様に、いい意味で「普通の若者」であり、非常に友好的だった。スマートフォンを使いこなし、友人と写真を撮るのが好きで、時に大学の試験勉強に追われている。恋愛ドラマやアクション映画も大好きで、可愛い女優やカッコいい俳優の話で盛り上がる。中には日本の芸能人が好きだという学生もいた。

日本人は、メディアなどのせいで中国について誤解している点が多いと思う。当たり前だが中国では、全ての人々が反日デモに参加しているわけでもないし、全ての人々が日本人を悪く思っているわけでもない。むしろ経済面や文化面ではお互いに歩み寄り、共にアジアの発展に協力することを望んでいる人々が大勢いる。そのため、中国や中国人について嫌悪感をもつ日本人が多いという現状は、非常に残念なことだと思う。私達は、そのような現状を打破して、未来に向けた新たな協力の道を模索しなければならない。

私はこれからの日中友好のために、今回の訪中を通して学んだ、中国の素晴らしさ、そして、日本と中国がお互いに協力して未来を作っていくべきだということを、これから発信し続けたい

と思う。私たちの世代がお互いを理解し合い、そして仲を深めることが、最終的には国と国との友好に繋がるのではないだろうか。最後に、私たち日中友好大学生訪中団を歓迎して下さった全ての団体、人々に感謝の意を表したい。谢谢！

◆日中関係に関するニュースはメディアで連日報道される中、訪中前は中国に対して、正直良い印象を抱いていなかった。私自身大学入学以降、世界数十カ国を訪れたが、中国を訪れたことは一度もなかった。なぜ中国をはじめとする日本の近隣のアジア諸国を訪れないのかと聞かれることもよくあったが、中国は近い国であるが故に、テレビやインターネットなどのメディアを通じて、否が応でも耳にする機会が多く、知ろうと思えばいつでも知れる、いわば中国のことについて知ったつもりになっていたからである。

今回、訪中団として中国を初めて訪れ、現地の学生らと交流する機会を得ることは、中国を直接肌で感じられる良い経験になると思い、参加することに決めた。第二外国語として中国語を専攻していなかった私は、訪中前の中国に関する知識は、領土問題、北京を始めとする都市部の大気汚染、人口過剰による春節時などの大移動、地域間の経済格差などマイナス的な側面を有したものが多く、少なくとも中国に対して良い印象はなかった。人に関しても、政治的な障壁の存在からか日本人と中国人との間に壁があるように感じていた。また中国人と交流する機会も数える程しかなく、彼らの生活習慣や文化について知る機会は無いに等しかった。その為、今回の中国滞在中、北京大学の学生をはじめとする中国の人々との交流の機会を通じ、彼らの人懐っこさに驚愕した自分がいた。北京大学を訪れた際、人数の関係上、他大のグループに一人混じり、大学内見学をしていた私はグループの最後尾を一人歩いていた。すると一人の学生が苦手な英語と日本語を交えて、私に話しかけて来た。翻訳機を使い、必死に言いたいことを伝えようとしてくる姿を見て、日本人と交流しようとする彼のひたむきさを感じた。その後、彼の友人数人も交わり、互いの自己紹介を早々に終えた後、腕を組みながら歩こうとしたり、少しでも姿を見つけると駆け寄ってくる姿などを目前にし、訪中前に抱いていた中国人のイメージが薄れた感覚がした。

短い時間ではあったが彼らとの交流中、前向きに交流し、親睦を深めようとする中国人を目前にし、中国を新たな側面を見たような感じがした。だが交流した中国人学生の大半が、日本人と交流したのは初めてのことであり、日本についてもあまりよく知らないという。また大学で日本語を専攻している学生でも、日本を訪れたことのある学生はほとんどおらず、日本のイメージもテレビやインターネットを通じ、形成されたものであり、我々と同じような状況であることがわかった。互いに互いのことを知る手段は相互間交流ではなく、メディアなどの媒体というのが現状であると知った。今回の Face to Face の交流はメディアなどの間接的媒体を通さない分、互いに寄り添いながら、互いの理解を深めることが出来た。

英語が話せる学生或いは日本語を学ぶなど、日本に対し関心のある学生とは今回、交流を通じ、親睦を深めることができたが、中国語しか話さない学生とはあまり話すことができなかった。日

本では第二外国語として、中国語は非常に人気であるが、今回交流した学生数人に中国国内における言語学習事情を聞いたところ、英語以外ではタイ語が人気であると話し、日本語と答えた人はいなかった。日本語、中国語という言語を通じて、互いの国を知る機会が増えれば、学生間の交流及び相互理解も円滑に行えるのではないかと感じた。

1週間という期間の中で、様々な場所で中国人と接する中で、中国人の気さくな一面を垣間見たり、近いようで互いの国についてよく理解できていないなどといった側面も見た。近いようで近くない、互いを理解しているようで理解できていない、そのような現状が残っていると感じさせられた。日中関係の改善を担っていく若者、そして訪中した学生の立場として、言葉の壁を超え、相互理解をより深めていけるような場が今後増えることを期待したい。自国の外の世界を接することで、新たな価値観が生まれる可能性もある。国境を越えた交流の場はまだ少ないが故に相互理解する場も限られていると感じている。今回の訪中団での経験、そして訪中期間で出会った人脈を活かし、より一層交流の輪を広げ、相互理解を深めていきたいと思った。百聞は一見に如かず、である。現地を訪れ、人との交流を通じ初めて分かることもある。今回の訪中でも日々見るものが新鮮なものであった。国境を越えた繋がり大切さを改めて感じた1週間であった。

◆今回の訪中が私にとっては初めての海外でした。今回の訪中で私の中国への偏見というか、ニュースやインターネットなどのメディアで知り得た知識のみに基づいたイメージは大きく変わりました。今まで、中国は(というよりも海外は)日本よりも治安が悪く、水も料理も美味しくないようなイメージがありました。しかし、実際に行ってみて気づいたこと、感じたことがいくつかありました。

まず一番に、これは出発前からわかっていたのですが、LINE、Instagram、TwitterなどのSNSや、Googleのサービスが使えないことに驚きました。中国の学生はもともとそうだったので特に不自由には感じないとのことでしたが、僕には少し不便でした。北京を案内してくださったバスガイドさんはそのようなことをしないと統治できないのが恥ずかしいとおっしゃっていました。私は中国の広大な土地と莫大な人口を考えると分からなくもないですが、現代のグローバルな社会を考えるとあまり意味をなさないように思いました。さらに言えば、北京大学を見学してみて学生とお話しをして、日本よりも国際性を感じました。色々な国の方々がいて、色々な文化が入り混じっておりとても刺激的でした。学生たちの環境も、設備もとても素晴らしく、私は海外の大学院に進学したいと考えているのですが、北京大学の大学院にとっても興味を持ちました。

そのほかにも、故宮や市街の建造物の至る所から中国の広大さを感じました。日本とは全くスケールが違うものばかりで、とても驚きました。東京ドームレベルの建物がいくつもあり、どれも細かなデザイン(北京オリンピックの鳥の巣のような)で、一日中建物を見学していても飽きないほどでした。

そして何より感じたのは、人々の暖かさです。中国と日本では国家間の問題は全くないとはい切れないかもしれませんが、国民同士、個人個人ではとても素敵な人ばかりでした。私は夜ホテルに到着してから中国の街並みを観光していたのですが、シェアサイクルの納入の方々と出会い自転車をタダで貸していただけたり、タクシーでは片言の中国語と英語と漢字で伝えて翻訳アプリを使い一緒になって目的地を探してくれたりと本当にストレンジャーな僕等にもとても親切な方々ばかりでした。観光していく中で気付いたのは交通整理についてです。おそらく人口も多く、北京近郊などに住んでいる富裕層が多いのか高級車ばかりでした。それなのにもかかわらず、みんなビュンビュン飛ばすし、無理やり割り込むし、危険な部分を多く感じました。バスガイドさんのお話で、免許証がお金で買うことができるとおっしゃっていたのはとても驚きました。人口も多いのでもっと交通において法整備をすべきだと感じました。

初めて中国へ行ってみて、今までの中国へのイメージが大きく変わりました。中華料理はどれも美味しかったし、もっと中国について知りたいと思いました。次に中国に行くときにはもう少し中国語と中国の歴史について学んでから行きたいです。

◆ 4時間のフライトを終え、降り立った北京の空気は、雨のせいもあってか澄み渡っており、意外な驚きをもって私達を迎えた。

中国、と言われて何をイメージするだろうか。パンダや中華料理、国土の広大さや人口の多さを挙げる人もいるかもしれない。同時に、大気汚染や日中間に横たわる政治的な問題を思い浮かべる人も少なくないだろう。当の私はと言えば、中国人と日本人の間に生まれた多くの友人達や、大学で出会った温厚な中国人の先生方の印象が強かったため、「中国人」という「人」に対する印象は悪くなかった。しかし、TVで見たPM2.5によって黄色く染まった北京の空のインパクトは、やはり根強かったようだ。地上に降り立ち、飛行機の中から着用していたマスクを恐る恐る取る。大きく息を吸い込んで、ようやく中国に着いたことを実感したのだった。

初めて訪れた中国は、私にとって驚きの連続だった。その一つが交通についてだ。ホテルに向かう為に乗り込んだバスが、高速を降りて一般道を走っていると、どこからか「ガサッ」「ドカッ」といった異音が聞こえてくる。賑やかだったバスの中が俄かに静まり返ると、ガイドさんの明るい声が響き渡った。「道路のわきに植えている木の枝がバスに当たっているんですよ！」なるほど。日本では街路樹の剪定作業をよく見かけるが、やはりこうも国土が広いとそれもままならないのだろう。先程教わったばかりの「大陸気質」という言葉が脳裏をかすめた。その後も、遠慮のないクラクションや、スリルを伴う道路の横断（信号があるのに！）、渋滞を起こすことも厭わない豪快なUターンを度々目撃し、改めて交通マナーの重要性を強く噛みしめて、日本へ帰国した人も多かったことだろう。

一方で、中国の大学生の勤勉さと向学心の強さにも驚かされた。日本語を専門に学ぶ学生達は、自在に日本語を操り、こちらの話す拙い中国語にも笑顔で応えてくれた。好きだという日本の陰

陽師を題材としたゲームの画面を見せながら、「陰陽師は実在したのか」「妖とは何か」という日本人でも答えに窮すような質問には、思わず食事の手を止めてしばし考え込む羽目にもなった。また、日本では大学を卒業したら企業へ就職するという考えが一般的だが、自身のアイデアを基に起業を志す若者も多く見かけられた。彼ら、彼女らは、大きな目的をもって大学に進学しており、その為、「学び」への真剣さ、貪欲さについては、日本の学生とは一線を画すように感じた。

今回、北京に4日、成都に3日間滞在して、中国という国のおおらかさや良い意味での雑多さには驚かされたが、「人」に関しては、明るく聡明な人達、という印象が変わることはなかった。しかし、日本で中国人留学生と話すのとは違う、ホームである中国で、素顔に近い彼らを見ることが出来たのは大変得難い経験だったように思う。真面目けどユーモアがあって、炭酸飲料とお酒が好きで、辛いものには減法強い、そんな「私たち」に会えた。だんだんと小さくなってゆく、まばゆいまでの光の粒を飛行機の窓から見つめながら、国と国を越えて手を取り合える日はきっとすぐそこにあると確信した。

◆私は今回の訪中をきっかけに、中国4000年の歴史が誇る潜在的なパワーを肌で感じる事ができました。

そもそも私が今回の訪中団に応募した理由は中国の歴史、特に秦の始皇帝の時代に関心を持ったことがきっかけでした。実際に万里の長城の一部ではありますが観光に行きそのスケールの大きさを目の当たりにし、感動しました。歴史の中で、規模の大きなモノを創り上げることは、時の支配者の権力を示すものであり、当時の圧倒的な国力を見せつけられました。万里の長城を創り上げるのにどれだけの領土と労働力が必要かを考えると、とても日本ではありえない建造物であると思知らされました。秦が中国統一をした時、日本では縄文・弥生時代であり、統一されるのはずっと先のことであることを考えても、当時の発展度の差は計り知れないものであったと考えます。

しかし、現在の二国間の政治経済の状況を考えると、当時のような大幅な差はありません。一概には言えませんが、立場は逆転したと考える日本人も多いのではないかと考えます。私もどちらかといえば、その一人でした。確かに急速な経済成長を遂げ、世界中から注目されましたが、その成長は停滞していると考えていました。しかし、今回の訪中を機に、この考えはおごりだったのではないかと考えるようになりました。

なぜなら、万里の長城を創り上げた強大なパワーは過去の遺産ではなく、現代まで受け継がれてきたと感じたからです。

私が今回の訪中団に参加して最も衝撃的だったことは、観光地や大学のスケールの大きさです。日本やヨーロッパ諸国をはじめとする多くの先進国は、国土面積がそこまで大きくありません。それに比べて中国は、広大な国土面積と世界一の人口を誇るゆえに、圧倒的に成長スピードが速いことがわかりました。

例えば、今回私たちは北京大学と西南交通大学を訪問しましたが、中国全土から集まった優秀な学生たちが潤沢な環境で勉学に励んでいました。彼らと実際に交流する中で、日本の学生よりも学ぶ意欲が強く、将来に向ける向上心の強さに驚きました。

国際関係の中での国の力というのは単なる軍事力であったり、現在の経済的な力だけでは測ることができないと考えます。中国は、将来的な成長が見込めるという意味で、強大な国力を持ち合わせていると考え、恐ろしくも感じました。

確かに、政治学科で政治や国際関係について学んできた身としては、国の経済成長は内政と外政の両方が密接に関係しているため、広大な土地と人口を持っているというだけで、経済成長が見込めるという単純な考え方はできないということは分かっています。しかし、土地と人口という資源を保有しているというだけでも、十分大きな恐れるべき要素を持ち合わせているのではないかとこのことを今回の訪中団を通して学びました。だからこそ、日中の友好関係を築いていく必要があると強く感じました。

今回交流した中国の学生は、日本語学科の学生が多数であったこともあり、私たち日本の学生に対して、非常に好意的に接してもらいました。そのため日本に対して一般的にどのような認知がされているのかは図ることができませんでしたが、日本語学科がいくつかの大学に存在するというだけでも、そして、一定数の学生が日本語を専攻しているというだけでも、好意を持っている学生がいるということがわかり、日中関係の将来に期待が持てるのではないかと考えます。

私はせっかく今回このような貴重な体験をさせてもらえたからには、周りの人に実際に見たものを誇張せずに伝えることで、誤った考えを持っている人に対して、働きかけることができると考えます。

◆まず私が初めて中国を訪れ、現地の大学生と交流して気づいた点として以下の三点が挙げられる。最も強く印象に残ったこととである一点目は、「中国は愛国精神がとても強い」ということである。具体例としては、Twitter や Facebook、インスタグラムなど、世界的に有名なアプリをシャットダウンして使えない代わりに、その機能に似た中国版のアプリを使用し普及していることや、公用語である英語があまり通じない場合があったことなどを通して、そのように実感した。次に二点目として、「中国の文化や風習であるからこそ出来るビジネスがある」とことである。シェアリングが生まれ栄えている背景には、無法地帯であり、資金があるからこそできる、という中国特有の文化がある、ということを知った。日本は規制があり規則に厳しいため、そのような文化は生まれそうに無いですが、自転車に乗りたいたときに気軽に乗れ、降りたい所で乗り捨てができるため、とても便利である、と感じた。最後に三点目として、「中国の学生は勉強熱心である」ということである。日本語学科の学生と実際に交流してみて、日本語勉強歴がそこまで長くないにもかかわらず、ほとんどの学生が日本語を流暢に話していたことから、そのように感じた。この姿勢は、尊敬し見習うべきであると思う。

次に、訪中前と訪中後の中国に対する気持ち・考えの変化について考察する。訪中前私は、中国に対しては期待と不安を抱いていた。不安に関しては、黄砂やPM2.5などの大気汚染による、空気や環境が日本よりも汚いのではないかと、というマイナスイメージを抱いていたことである。一方で期待としては、近年中国は土地開発が目覚ましいため、日本よりも高層ビルや目を引く建築物が多いのではないかと、という点や、世界最多の人口を誇る中国とはどのような国であるのかを身をもって体感したいという点である。実際に訪中してみると、確かに空気は日本より汚く、トイレもペーパーが無いことや鍵がかからないことが当たり前のようにあり、日本の綺麗さを恋しく思ったが、やはり人口が大きいためだけあって建物の高さや道路の広さなど、あらゆる点において全てLサイズであり、夜にはそのような建物や道路にカラフルなライトが多く、とても夜景が綺麗であると感じた。あとは、上記で述べたように、中国は愛国精神がとても強いということを知った。

次に、隣国隣人として今度どのように中国と付き合いしていくべきか、については、北京大学の学生と交流した際に感じたことがある。彼は日本人であるが親の仕事の都合で幼い頃から中国に住んでいた。小学校や中学校で歴史の勉強で、日本と中国の戦争の話の際などには、中国の学生から「あいつは日本人だから」という風に軽蔑された目で見られたり、居づらいと感じたことがあったそうだ。こうなってしまうのは、やはり戦争の際に敵同士であった以上、どうしようもないことかもしれないが、そういった過去の過ちから偏見を持つべきではないと考えた。また、今回の訪中で、中国の愛国精神の強さを思い知ったので、そのような文化を知り、受け入れた上で、話をするのが大切であるように感じた。

最後に、この七日間が自分の人生に与えた影響として、私たちは日中友好団体である、という自負を度々感じていたため、日本と中国はとても友好的であるという風に思えた。このように友好関係を実感できる交流をすることはとても大事であると考えた。よって他国との交流をますます増やし、友好関係を実感しながら築いていきたい。さらに今回は中国の学生はもちろんだが、日本の他大学の学生と交流できたため、様々な刺激をもらえ、新しいコミュニティを広げられたため、視野を広げることが出来ました。今回の濃い七日間の訪中で出来た新たな人脈を、今後も大切にしていきたい。

◆訪中前は、良くも悪くも中国に対しての知識や思い入れはなかった。中国に関して知っていることといえば、中学・高校で習う世界史レベルの知識、そしてテレビニュースやネットニュースで流れてくる情報くらいのものであった。中国への思いもあくまで「隣国」という意識だけだった。大学での所属が英語英米文化学科ということもあり、中国をはじめとするアジア圏に関する知識は恥ずかしながら乏しいものでもあったと思う。

今回、私が日中友好大学生訪中団に応募した理由は、昨年オーストラリアへの留学を終えて、自分が「アジア人」であることを考えるきっかけがあったからである。また、今年3月からの就

職活動を終えて、いかなる企業や職種に就職しようともアジア圏、とりわけ中国との取引や業務に少なからず関わっていくであろうこと、日本経済において中国は切っても切り離せない国の一つであることを改めて感じた。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるように、ひとりの社会人として働く前に、「隣国」中国を一度自分の目で見てみたいと思い、今回訪中団に応募する経緯となった。

初めての訪中を終えた正直な感想を述べれば、中国はまだまだ発展途中の国であるという印象が残った。GDP がアメリカに次いで第 2 位であることや、北朝鮮の核保有問題に関してアメリカと同等の発言力を有していることなど、私の中の中国像は発展途上国の一国というよりも、先進国に近い中国のイメージが強かった。しかしながらそのイメージはあくまで北京の中心部、なおかつ一部の層に限られているのではないかと思った。その一方で、発展途上国ならではのエネルギーを強く感じたのも確かである。「中国を発展させるぞ！」という勢いを国全体から感じられるような気がした。特に創業公社や北京大学、西南交通大学で出会った同年代の若者たちからは「中国を良くしたい」という思いを強く感じた。中国がもつ勢い、エネルギー、食欲さというものは、我々日本人が見習うべきもののような気がした。

また、同年代の学生との交流会や晚餐会を通して、インターネットや SNS に関する現実問題、生の声を聞いたのは良い経験だったと思う。ある女子学生は「使いたいけど使えない、だから使えるようにしたい」と言っていた。これも「中国を良くしたい」という思いにつながっているのだと感じた。中国人学生は能動的で、問題意識の高い学生が多いように感じた。中国で育った日本人学生の話も興味深かった。彼は日本で生まれ、5 才のときに中国に移住したそうだ。日本人として見る、中国人として見る「日本」「中国」の話や視点は興味深かった。

今回訪中を終えて、まずは行って良かったと思う。テレビやニュースで知ることだけではなく、実際に自分の目、耳、鼻、五感を通して中国を感じられることができてよかった。一方で私たちが今回訪れた北京、成都是中国のほんの一部でしかなく、そして日中友好大学生訪中団として訪れている以上、中国の良い部分に焦点が当てられていたと思う。まだまだ私が知らない中国のほうが多く、もう一度自分の足で中国を訪れてみたいと思った。日本と中国は双方にとって大事な取引国、隣国であるにも関わらず多くの問題を抱えている。「隣国」としてどのように付き合いしていくべきか、日本人として、社会人として社会に出ていく身として、考えていくことが必要だと思った。そのためにも、まずは中国、日中関係に関する正しい知識、情報を学んでいく必要があると、今回の訪中を通して感じた。また、今回学生との交流を通して、中国の学生、若者は自国への問題意識を強く抱えていくと感じた。彼らのような人々がこれから中国をもっともっと成長、発展させていくのだろうと感じた。これからも変化し続ける中国を、隣国として見ていけることを楽しみにしている。また、そんな中国に負けず劣らず、東京オリンピック 2020 を契機に、一人の日本人として、一人の若者として、日本の成長に貢献したいと思った。

◆私がこの7日間で知ることが出来たのは中国という大きな国のほんの一部に過ぎない。だが、一部しか知ることが出来なかったからこそ、今後さらに中国という国への理解を深めたいという気持ちが強まった。

私は不思議に思っていたことがあった。なぜ日本人の多くは日本と中国との相違点に寛容にならないのか。例えば生活様式や政治、人間性において日本とアメリカとの相違点を受け入れることは容易なことである。それどころか違うことが当たり前の認識としてあり、共通点に驚くことも多い。しかし同じ海外なのにそれが中国となるとそうはいかないらしい。どうも自国のパラダイムに当てはめようとして当然うまくいかず、「どうして日本は～なのに中国は～なんだ。」「これだから中国は。」など勝手に中国に対しマイナスの感情を抱くのだ。この疑問について今回の訪中で自分なりの解釈を生み出した。まず、日本と中国は非常に共通点が多い。地理的に近い、漢字を使用する国家である、ということはもちろんだ。それだけでなく経てきた歴史は違えど、今の国際社会で優位な位置に台頭したいとする動きや、そのための政策も一部共通点があると感じた。このように共通点が多いからこそ相違点が違和感として感じられてしまうのではないか。親しみがほかの海外の国に比べて深いからこそちょっとした動きに敏感になってしまうのではないか。日本と中国の関係は決して良いとは言えない(らしい)が、互いの相手国に対する興味関心を対立ではなく理解の方向に向ければ、遠く離れた国家よりも良好な関係が築けるのではないかと感じた。

その良好な関係を築くために我々若い世代が何をすべきなのか。今回の訪中の大きなテーマであるこの問題について私なりに考えたことがあった。今回の訪中では非常にありがたいことに多くの中国の学生と交流する機会があった。北京大学の学生、西南交通大学の学生、北京にてボランティアとして参加してくれた日本語学科の学生。彼らは皆日本の大学生とは比べものにならないほど勉強熱心で、より上を目指すために努力をしていることが分かった。訪中前から、中国の受験戦争や就職事情についてはある程度理解していたつもりでいたが、正直これほどとは思っていなかった。学生と交流していて印象的だったことがある。私が、中国の学生は勉強熱心で感心する、日本の学生はこんなに勉強してなくて恥ずかしい、と言ったところ、「自分たちは政府の政策の言う通りにしているに過ぎない、確かに一生懸命勉強してよかったと思うことはあるが、それは決して自分の意志ではない。自分の意志で習い事や部活動、アルバイトに取り組む日本の学生のような生活が心底羨ましい。」という政府の政策に従うしかない自分たちを卑下するような返事が返ってきた。今まで、日本に中国政府の政策についてのニュースが入ってくることはあっても、それに対して中国国民が、また同年代の学生がどのように感じているかなど知る余地がなかった。もしかしたら中国側の学生も同じようなことを感じていたかもしれない。実際に交流しなければわからないことだった。この類の発見は7日間多くの場面であり、この訪中の一番の財産となった。この7日間の経験が、これまで自分が経験してきた国際交流と決定的に違ったのは、ステレオタイプの、「伝統的」な互いの国について見聞きするのではなく、互いの国の「今」について見聞きし、知ることができたということである。私が今回の訪中で日中友好のために大

学生がしなければならないと思ったこと、それは自分の目、自分の耳で中国に触れることだ。そうしないとわからないことがあり、誤解に気づかない。すべての人が実際に中国を訪れることがかなわなくても、私たちのように訪中を経験し、実際の中国に触れた人間が率先して日中友好を促進していくべきである。相違点を対立に向けるのではなく理解につなげることで、それが我々の世代の務めであると感じた。

◆私は今回、自分が学んできた中国語で現地の方と話してみたい、中国の文化や習慣に触れて自分の目で中国の実情を把握したいと思い、訪中団に参加致しました。中国に行く前は、中国人に対してあまり良いイメージを持っていませんでした。なぜなら日本の観光スポットで列に並ばなかったり、電車の中で大声で話したりしている中国人を見かけるが多かったからです。しかし中国を訪れ、自分が今まで知っているとと思っていた中国人はほんの一部だったと感じました。交流会などで会話をしてみると中国の学生はみんな優しく、ユーモアがあり、日本の大学の友人と似ている性格の子が多いと感じました。また中国というと PM2.5 などの大気汚染のイメージが強くありましたが、現地では観光客も含めマスクをしている人はおらず、空気もそれほどよどんでおらず、大変驚きました。また訪中する前にネットで中国のトイレ事情について調べたところ、公共のトイレに紙は一切ないので持参するようにと書いてありました。しかし今、中国ではトイレ革命が起きており、すべてのトイレにトイレットペーパーを設置する取り組みをしているということで、ほとんどのトイレに、紙がついていました。このネットの情報は 1,2 年前くらいの情報でしたので、ほんの少しの間に変化を起し、それが広まっていくスピードの速さに驚きました。またシェアバイクの導入や排気ガス規制のために、ナンバープレートの番号ごとに車の使用に制限をかけるなど、すぐに新しいことを取り入れる勢いの強さを感じました。日本は何か制度を導入する際には多くの規制があり、実際に施行されるまでに多くの課題がありますが、中国はとりあえずやってみて、何か問題が起きたら後から規制していくといったシステムであると感じました。

今後中国との親交を深めていく必要があることは、たいていの日本人は理解していると思います。しかし日本と中国の考え方のギャップや、お互いの既成の悪いイメージのせいでなかなか親交がはかどらないのが現実だと思います。お互いの親交を深めるために、まずはお互いの国を歩き来し、現地の人と触れてみる、観光場所では必ずマナーを守る、感じたことを SNS などを用いて発信していくことが必要だと思います。またこのような行動を両国が協力して、奨励するような制度を構築する必要があると感じました。

今回の 7 日間で中国の学生は、本当に熱心に学業に取り組んでいると感じました。日本の大学生というと社会に出る前の最後の長期休みのようなイメージがありますが、中国の学生は大学に入る前はもちろん、入った後も勉強を続けていると聞き、日本の中だけ見てはいけなと感じました。学生という時間がある期間を利用して、学校の勉強だけでなく、語学や歴史、文化に

ついて学び、様々な場所を訪れ幅広い視野を持った人になれるよう努力していく必要があると感じました。また今回交流を持った、日本や中国の学生との繋がりも大切にしていきたいと感じました。最後になりますが、今回このような貴重な体験をさせてくださった日中友好協会の皆様、本当にありがとうございました。

◆学習院大学では今回の枠組みは非常に人気が高く、一次の書類選考というステップを経てなお、二次の面接時で6倍という高い倍率を誇っていた。そのため、選考に通過したとの電話を受けたときは、かなりうれしかった。まるで大学に受かった時や就活で内定を頂いた時のようだった。またそれだけに責任は大きく、選ばれたからには人一倍、十二分に中国を堪能してこようと心した。結果として、中国に到着後は集団行動の日程はすべてこなしたうえで、滞在中2日目から最後の夜までレンタル自転車を練り、夜中3時まで街にくり出し、睡眠は毎日2時間という有様だった。それゆえに今回団員の誰よりも中国を長く、深く楽しんだ自負がある。こんな突飛もないハードスケジュールに付き合ってくれた同じ学習院大学の後輩である威徳には頭が上がらない。

こんな満喫している私ではあるが、中国語は全く話せず、至近の海外は昨年ドイツに行ったのみであった。しかし中国からはスマートフォンをはじめと様々なものを輸入していた経験があり、年々メキメキと上がっていく製品の水準を見て、中国の成長・発展にはかなりの期待があった。それ以外にも中国の一带一路の政策やインフラ整備などに強い関心があり、そうした記事に目を通す度、中国という国はもはや完璧に日本を抜きさったとさえ考えていた。その反面、大気汚染や治安の点で漠然とした不安はやはりあった。もっとも、結論から言えば、それらの心配は最終日までに完璧になくなるのだが。

北京に到着した際、天気はあいにくの小雨でややムツとした空気だったのを覚えている。バスまでの移動で幾人かの団員が、既に空気が汚いことを訴えていたが、鈍感な私は案外平気だった。埃っぽく常に下水臭い池袋駅で長い間勤務しているからであろうか。結果として今回の訪中では全く空気の問題はなかった。ただ現地の学生の話では、肺病になる人も多いと、一体いつの時代かと思うような話も耳にした。

私がこの訪中で最も期待し、大きく裏切られたのは食事だった。私だけでなく多くの人がそうだったようだ。滞在したホテルも良く、一番心配だったトイレもある一定以上の水準で、快適な住環境であっただけにこのショックは大きかった。また連れて行って頂いた数々のお店は見るからに高級店であったにも関わらず、供される料理は口に合わないものが多かった。残念なことに多量の食べ残しが出ており、もったいない思いでいっぱいだった。皮肉にもおそらく多くの人が今回の訪中で一番美味しかったのは北京大学での学食だったと答えるのではないか。

まだまだ街並みやレンタルサイクルのことなど、中国での万物に自分なりの気づきがあり、書きたいことはたくさんあるのだが、今回はさておき、少し真面目な話をしたい。今回の訪中で私が考えざるを得なかったのは格差と豊かさ、そして自由についてである。

中国で目の当たりにしたのはその強大な格差である。我々のホテルは大変綺麗で、一流大学たる北京大学での式典は大層すばらしいものだった。街中に走る車は黒塗りの高級車ばかりで、王府井あたりの高級ショッピングモールやホテルは我々では手も足も出ないような世界だった。しかしながらその反面で北京駅に行くところごみが散乱し、あまり格好の綺麗でない人も多く、街中は露店に毛の生えたような商店が主体で、道の脇を見れば安価な電動自転車で移動する普通の人民も多い。成都では幾分かましかったが、北京でのあった天地のような差は、うまく言葉では言い表せないが、見ればすぐ察することができるのではないだろうか。また国全体で見た際に内陸部との差も無視できないだろう。

また中国の大学生との交流の中で、彼らにはこだわりがないとも感じた。選択肢の少なさや上から与えられたもので満足しているような印象である。最も日本でもこうした傾向はないとは言えないが、それ以上である。中国は研究や技術開発の面では目まぐるしく、全世界の脅威とさえいえるような破竹の勢いである。しかしながら、文化的、生活レベルの豊かさが全く伴っていない。そして何分、自由とは言い難い。こうした部分にまだまだ日本との差があると感じた。この急成長を次の段階に移すのであれば、発展のために人民に自由を授けるべきであるし、人民もまた自由を求めるべきである。

これから中国がより先進的で豊かな国になるための課題は山積みである。しかしながらこうした問題をひとつひとつ改善していくことでさらに魅力的な国となることは間違いない。その強大な潜在力を生かし、まだ見ぬ独自の世界を生み出してほしいと期待するばかりである。

◆訪中する前、私は中国に対して特段悪い印象は抱いていませんでした。もともと大学では中国哲学を専攻していたので中国へ行くことは大いに興味があり、また専攻分野の先生からも中国特有の雑多さは耳にしていました。世間で噂されるところの中国人はマナーが悪いという風評も中国はそういう国だと、一種の諦観としてとらえていました。

実際に訪中してみて期待を大きく裏切られることはありませんでしたが、自分の中国、ひいては外国の文化、社会に対する見方が変化しました。たとえば交通ですが、中国では人が多く密集しており、道を譲るということをしません。また道路交通法も日本とは異なっており、自動車がひっきりなしに飛び交います。その様子はたしかに日本人から見ればマナーが悪いと映るかもしれませんが、しかしそれはあくまで日本人の価値観、日本の法律で計っただけで、中国にとっては軽蔑されるような悪事は犯していません。もちろん危険なことは正し、他国の見習うべき点は見習うべきですが、一概に中国人はマナーが悪いと批判して彼らの道徳性まで否定するのは筋違いでしょう。しかしこのことは日本国内で編集された中国の映像を見ただけではわかりません。実際に見て、歩いて感じたことです。頻繁になるクラクションや減速せずに曲がってくる二輪車は、日本と比較すれば異様な光景に見えるかもしれませんが、道行く中国人の顔を見るとそこに道を急いでいるような焦りの顔はほとんどありません。彼らにとってはこの交通状態が当たり前

なのです。だから日本と比べて批判することもそうではありますが、訪中する前の私のように変にへりくだった心構えでいることも不要であると感じました。ただ当たり前のこととして受け入れればよいのです。

次に訪中を終えて感じたことは、国際交流に求められる力とは何かということです。訪中前に専攻分野の先生からは、外国語だけ話せても学術的な蓄積や人格の形成がなければ意味がないと言われました。コミュニケーションツールとしての外国語が話せることと、社会で活躍できることは異なるというのが私の先生の教えであり、私自身その考えには賛同していました。言葉が話せることよりも話したいことがあるかが重要であると考えていたので、英語、中国語が話せないディスアドバンテージは何とかなるだろうと訪中前は高をくくっていました。しかし、実際に中国へ訪れてみると言葉の壁は自分の想像より遥かに大きいもので、大学生と交流するときも店で何か注文するときも、伝えたい言葉が浮かんでくるのに英語でも中国語でも伝えることができない、自らの語学力のないことを痛感しました。やはり言葉というものはコミュニケーションの下地、基盤ですからそれができないと何も始まりません。しかし、また前述のとおり話せるだけで考えることをしなければ、それは道具を使えるだけで何かを生み出すことができないことと同じです。どれか一つのことに固執することを戒め、臨機応変に対処することを貴ぶのが孔孟の説く中庸の教えです。現在の日本では英語をはじめとして、外国語を話せる人材を優遇する傾向が特に就職活動の場が多いですが、やはりただ話せるだけでは意味がありません。他国の文化への興味や理解と、そして自国の文化の知識や誇りとが深くあってこそ交わったときに強い摩擦を生み、互いの中に新たな気づきが芽生えるのだと思います。自分の特性というものは他者との比較の中で客観的にその立ち位置を知ることになります。他国のものを見て、「日本ではどうだったか」と急に自国のことが気になります。この気づき、疑問は自国のことをよく知らねば生まれてきません。故にまず日本人として自国の文化、歴史に精通する必要があるでしょう。“国際化”、“グローバル化”とって何でも外国（特に欧米）に合わせるのは愚です。自分の文化的素養が日本国に属しているのならば、日本人としてものを見なければ創造性のない、いわば似非外国人で終わってしまうでしょう。

最後になりましたが、この度破格の金額で我々大学生に二度と経験できないような貴重な経験をさせていただき、本当に感謝の念に堪えません。公益社団法人日本中国友好協会の皆様をはじめ、受入先の北京市人民対外友好協会、現地でお会いしたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。

◆私はこの日中友好大学生訪中団に参加して多くの刺激を受けた。中国の混沌として、活気のある街並みは、日本には無い景色であり、また豪勢な料理の数々にはとても驚き、訪れた全ての歴史的建造物に感銘を受けた。中国企業の勢いを知り、地域創造のプランも教わった。初めての海外である自分にとって、全てが新鮮で興味深いものだった。しかし、この訪中が終った今、最も印象に残るのは中国人大学生や他大学生との交流で感じた事にあると思う。

私は様々な場面で中国の学生や、他大学の人との差を感じた。差というのは、例えば単純な語学力や物を見るとき視点の深さである。

北京大学の散策では、ガイドの方はとても流暢な日本語で話してくださった。さらに彼女は英語も当然できる様で、語学力の違いを感じた。自分には簡単な英語の能力しかなく、相手が英語でしかコミュニケーションをとれない場面では、完全な聞き手側となってしまう、とても悔しい思いをした。他大学の、英語圏に語学留学をした方の、留学先での努力や、中国の学生の日本への留学での苦労話を聞いて、彼らの熱量を知り、本当に尊敬した。今まで自分が求めるもののために、彼らほど勉強したことがない自分にとって、本当にいい刺激だった。もっと共通言語の英語を勉強するのはもちろん、中国現地の人たちは中国語しか話すことができない人も多く、コミュニケーションがとれずに残念な思いをしたので、中国語も話せるようになりたい。中国語をもっと勉強して、次中国に行くときには中国語でたくさんの人と楽しいお喋りや、生産性のある話もしたい。そのために日頃の中国語の勉強だけでなく、留学生との交流なども積極的にしていきたい。

また夜の自由時間もとても有意義だった。現地の人と交流できるのはこの時間だけだったので、貴重な体験だったし、他の号車の人と関われるのも大きかった。買い物や値段交渉も楽しめたとし、今の中国について、成都を歩きながら他大学の人と意見交換も、いい時間だった。意見交換をした彼らにとって私がいい影響を与えたかはわからないが、自分は本当にいい影響を受けたと思う。

特に印象深いのは成都についての分析である。私たちは、成都是少し背伸びをし過ぎているのではないかという話をした。成都企画館では人口千六百万人にも関わらず、収容は六千万人であること知り、グローバルセンターではアジア一大きい建築物であるが、外側を一周したとき、空きスペースもいくつかあるところが見られた。大きな建物が並ぶ街の裏には行政が空回りしている面も垣間見えたと思う。夜街を歩いていたときに彼は、私にとって華やかにしか見えない成都の街の見方を変えてくれた。住む人にとってマンションについているライトは眩しいだけであるし、活気あるように見せるためだけのものだろうという趣旨のこと語ってくれた。同じ一年生なのにとっても思慮が深くて、本当に尊敬した。それと同時に自分もそうなりたいたったので、色んなもの見方ができるように、様々なメディアを使って情報収集をすることから始めてみたい。

今回の訪中でとても新鮮な経験ができたし、他の学生たちの意識の高さは自分の目標になった。バスガイドの高月さんは、漢字の文化があるだけで私たちが手をつなぐ理由になるとおっしゃってくれた。その言葉は、今回の訪中の意味を総括した言葉であったと思う。私たちは、お互いの国が歩み寄れるための懸け橋になるべきだ。そのためには、この熱量を下げず、これからの大学生活での中国語の勉強はもちろん、英語も学び、さらに経済学部としてたくさんを学びたいと思う。

今回このような素晴らしい企画に参加させていただき、本当にありがとうございました。必ず今後に生かしていきたいと思います。

◆今回の日中友好大学生訪中団に参加させていただく前までは、中国についての印象はお世辞にも良いものとは言えなかった。テレビや新聞などのメディアで、日中の政治的関係が思わしくないことや、中国人の非常識なマナー違反など、偏った側面ばかりが過熱報道されてきたためである。これらは実際に中国に行ったことのない日本人や、中国人と接したことのない日本人にまで偏見を埋めつけることとなった。私もその例外ではない。しかし今回の訪中を終えて、私の中の中国に対する考えが一変した。メディアで報道されているような抗日の中国人はごく一部であり、今回の訪中ではむしろ中国人は皆、親日家なのではないかと思うほど、親切で気さくであった。マナーに関しても、中国人だから悪いわけではない。マナーが悪い人もいれば、良い人もいる。これは中国に限ったことでなく、日本や他国も一緒に、ごく普通のことではないだろうか。中国で現地の学生や通訳の方、地域の方と出会うたびにこのような思いが強くなっていき、同時に私の中の中国に対する偏見が徐々に薄れていくのを感じた。

私たちは隣国隣人として、中国とどのように付き合っていくべきだろうか。その答えは「個」であり「人」であるのではないかと考えるようになった。というのも、先に述べたように日本人はある偏った側面を見聞きするだけで、そのすべてを知ったように思え、自分が知る世界がすべてであると思いがちである。これらの考えは「個」ではなく、「国」として報道されている中国しか知らないためであると考え。このような考えを、打ち砕いていき、真実を見てもらうことが必要なのではないだろうか強く感じた。そのためには、まず中国人に対する偏見を捨てることが重要である。日本のメディアの影響で、中国という国に対する見方を変えることが難しくても、徐々にゆっくりと中国人について深く知っていけばいくほど、日本と中国双方にとってより良い関係を築いていけるのではないかと考える。また、これら達成するためには、日本人に中国人のことを、中国人に日本人のことをより深く知ってもらう必要があると考える。今回の訪中で、昔の日中の関係を気にしている者は日本人にも中国人にも一人もいないことを感じたので、メディアや教科書で見る日本人や中国人だけではなく生の「人」を見て、感じて、関係を築いていくことがこれからの若者に必要なことではないかと考えた。

たった1週間では中国のすべてを知ることはできない。そのことは今回の訪中で痛感した。しかし中国の学生と友人になるたび、彼ら彼女らを深く知るたびに日本人が抱いている中国人に対する偏見を少しでも取り除きたい、そしてこのような貴重な経験をさせて頂いた私たちこそが率先して行動を起こすべきではないかと、そう思うようになった。これらの気持ちを忘れずに、これからの人生ではこの経験を日本のためになるように還元していきたいと思う。

◆私は、今回訪中をするまでは、正直、決して中国に対して良いイメージは持っていませんでした。その理由として、まず、日本で報道されるPM2.5を始めとする大気汚染のニュースや、中国が反日国であるという事をほのめかすようなニュースを聞いていたからです。また、小耳に挟んだ話でもあまり中国に対して良い話は聞いていなかったもので、不安もたくさんありました。恐ら

く、自分の周りの人もそういった感情が少なからずあったと思います。中国人に対してもあまり良い印象はなく、ニュースなどの影響もあってか、気性の荒いような話し方をするような国民性があると思っていました。

しかし、今回の訪中を経て、その考えがどれだけ浅はかだったのかを身をもって知ることが出来ました。中国という国や、中国人に対する考え方が良い意味で大きく変えることが出来た、有意義な七日間だったと思っています。

上記のような中国に対しての印象の変化があったのは、いくつかスケジュールをこなしていく過程にありました。実際に行った順番とは異なりますが、まずは北京創業公社でのことです。ここは、中国のベンチャー企業を収容しているような施設でした。大きな発展を続けている中国の基盤、始まりが見られたようでした。また、北京大学の見学を経て、大学でも様々な研究が進められていることが分かり、興味をそそられるような分野もいくつかありました。成都規画館では、現在の成都の街並みがよく分かる説明をされ、また、まだまだ中国が発展をし続けるのが見受けられるような映像も見ました。

そして、なんと言っても今回の日中友好大学生訪中団において、一番大きな刺激を受け、多くのものを得ることが出来たと感じるのが人との関わりです。北京大学の学生を始め、中国の学生は皆、とても勉強熱心で、日本語がとても上手でした。私はこのことに大きな感銘を受けました。意識の高さの違いをまじまじと感じ、それと同時に、憧れの感情も抱き、私もこれから将来にむけ、意識の変革が必要だと思いました。私は、少なからず母国語以外の言語を話すのには躊躇や不安がありますが、彼らはそれを躊躇することなく行っており、見習うことが多いと思いました。それに、彼らは好奇心旺盛で、我々にも多くの質問を問いかけて来てくれました。

また、私が刺激を受けたのは、何も中国人からだけに限った話ではないです。日本から参加している他の大学生をみても、英語や中国語を話せることのできる人が多くいました。グローバル化が進むこの時代、やはり日本語だけでは通用しないことも多いことを身をもって実感し、考え方が変わりました。

初めにも言いましたが、今回訪中をすることで自分自身、中国への考え方がグーンと変わりました。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるように、やはり目で見ないと分からないことも多いと今回大いに感じました。中国、中国人と隣国隣人として、私は良好な関係を築いていくべきであると思います。そのためには、日本の良さを中国に、中国の良さを日本に伝える必要があると考えます。その時、やはり今回のような中国へ行った経験や、実際に中国人と交流をしたという事が活かせるのではないのでしょうか。我々訪中団は、こういった二ヶ国を繋ぐ架け橋のような存在になるべきだという考えが今回の訪中を経験することで芽生えました。そして、こういった日中交流の場がもっと増えれば今後の日中関係もより良い方向に進むのではないかと思います。

◆私の中国の印象は町が汚く、反日感情が強く、自分の主張ばかりする人が多い国でした。そう思っていたのは、マスメディア等のニュースだけによる先入観やあまり中国の方と話をしなかつたせいでもありました。そんな私が今回の日中訪中団に参加したきっかけは、私が取っていた「公共管理論」の講義を担当していらっしゃる富本教授に訪中団の募集があるとお話を聞いたからです。最初は手続きが遅れて参加できなかったのですが、キャンセルが出たので無事に参加できました。事前研修会や結団式で、自分の大学や他大学の学生と交流しつつ、改めて中国への関心そして中国人との交流に胸を躍らせました。

中国に到着して、1日目は万里の長城と企業の自立支援を行っている北京創業公社を参観することでした。万里の長城はとても大きく、そして歴史の偉大さを感じさせる立派な建築物でした。また北京創業公社は、ベンチャー企業の資金援助や大企業による買収を防ぐための仲立ちをしたりと、あまり日本では聞かないことをやっていたので、とても驚き、尊敬しました。

2日目は、北京大学で開かれた千人交流会に参加しました。たくさんの若者が集まり、それぞれの国の文化や素晴らしい演説を聞きました。また北京大学の学生と交流して自分の未熟さやまだまだ努力が足りないことを改めて実感しました。

3日目は、中国の世界遺産故宮を参観しました。このような貴重で、あまり触れることがなかった古い中国の歴史に触れることができました。またこの日は飛行機で成都に行く予定でしたが、大幅な遅延が起きました。しかし、この遅れた時間のおかげで、自分とは全然違う号車の人と話すことができたので、有意義な時間を送ることができました。

4日目はパンダ基地で、かわいいパンダやレッサーパンダを見ることができ非常に興奮しました。また成都規画館やグローバルセンターなど成都でしかみられないものをたくさんみることができました。夕食時の変面を鑑賞した時には、とても驚き、演劇した人に何度もタネを教えてくださいときてしまうほどでした。

5日目は、杜甫草堂や錦里など、昔ながらの中国を感じられる場所を散策しました。国語の教科書ぐらいでしか見たことがない、漢詩をまじかで見ると、感動的でつい見入ってしまいました。午後の西南交通大学の方と交流をする際、僕の名前が登録されていないので、驚きましたが、そのおかげで中国の可愛い子と話せたので、とても幸運だと思いました。

6日目は青少年活動センターで太極拳とお面づくりを体験しました。太極拳はとても筋肉痛になるし、お面はへんてこなものになりましたがとても楽しい時間を送りました。

昔から中国にはあまりいい印象がなく、経済や政治的にも不安定な中国に行くことがとても怖かった僕ですが、直接現地の人と触れ合いちょっと性格がきついですけど、優しい人たちがたくさんいる素晴らしい国だと思いました。この7日間は私がこれからの世界経済を勉強していく中で大きな刺激になりました。この経験を忘れずに日々励んでいきます。

◆はじめに、このたびはこのような機会を設けていただき、また参加させていただき、本当にありがとうございました。今回経験できたことは、とても刺激的であり、今後の活動においてのモチベーションがとても上がりました。

私がこの日中友好大学生訪中団に参加したきっかけは、ゼミの先生に紹介されたことでした。ゼミの先生が中国の方で、迷うならとりあえず参加してみればいいと言われ、七泊八日を一万円で行けるというリーズナブルさもあって、参加を決意しました。

今回の訪中が私にとって初海外であり、とても不安でした。さらに、昨今は少し落ち着きましたが、日中の関係はあまり良くなく、お互いの国がお互いのことを良く思っていないため、中国に行くと反日感情を持った中国の方ばかりだとどうしようと思っていました。実際に中国に行ってみて、今回はあまり現地の中国の方と接したわけではないが、その心配は杞憂にすぎませんでした。とても友好的であり、人見知りの私でもすぐに友達になれました。そして、中国の方とかかわって、彼ら、彼女らは、とても向上心があるということに驚かされました。今回訪問した北京大学と西南交通大学の学生は、大学で様々な研究をしており、国に貢献しようと高い志を持って、大学生活を送っていました。さらに、日本語を勉強している学生たちは、今回の交流の機会を無駄にしないようにと、われわれ日本人に積極的に話しかけ、なるべく日本語を使っていました。中国の学生は日々勉強を頑張っているため、自信をもって積極的に日本語で話しかけられるのだろうと思い、中国人は真面目な気質であることがわかりました。私の場合は、あまり向上心がなく、何か失敗してマイナスになるよりは、現状維持を目指していくべきというスタンスでいました。しかし、中国の学生を見て、もっと積極性を持ち、自分から行動していかなければならないと思わされました。

また、私がこの訪中団に参加したのは、「夢」も少し関係していました。先ほども述べましたが、日中関係はあまり良くありません。そして、同じ隣国である韓国とも、日本は良い関係を築けてはいません。高校生のころ、ニュースで日中、日韓の関係の不透明さが報じられるたびに、私はこの関係を良くしたいと思っていました。そして、私は外交官になって、中国や韓国などの隣国との関係を改善したいという夢を持つようになりました。しかし、国家公務員を多く輩出している大学を受験したが失敗し、この夢を諦めていました。諦めてからも、別の形で夢を実現したいと思っており、この訪中はその一歩となりました。今回のような、互いの国を敬い、近い年代の人同士で交流し、互いの国の言語で話をし、理解していくことができれば、関係改善は容易にできるはずです。

GDP ランキングが世界二位だけあって、中国はお金になることに対する嗅覚が鋭いと思いました。中国の街をバスで走っていて一番に目に入ったのは、所狭しに並ぶレンタル自転車でした。スマートフォンで電子マネーを用いて利用できるため、手軽さもあり多くの人が利用していました。このレンタル業が、電子マネーによる手軽さも相まって、中国ではとても盛んであるそうです。最近ではバスケットボールのレンタルも行っており、すごい目の付け所だと感心させられました。地域格差があると言われる中国ですが、これらのレンタルは比較的どこでもできるものな

ので、格差問題を改善することになるかもしれません。停滞している日本経済も中国のような新しい着眼点を見習っていくべきです。

今回の訪中は、本当に私にとって人生が変わるような経験をさせてもらいました。自分の経験値が上がり、中国について知ることができました。このような機会を私にあたえてくださり、本当にありがとうございました。今後の日中友好協会の行事にも参加してみたいと思います。

◆まず僕は中国に対してあまり良いイメージは持っていませんでした。ニュースで PM2.5 や大気汚染問題、尖閣諸島などの領土問題などマイナスのイメージしか聞くことがなく中国に旅行に行くなんてどうなの？という印象しかありませんでした。ただ経済や工業では日本よりも活発だと思っていました。この一周間、中国に滞在し自分の足で歩いて今まで自分が想像していたものとはかなりかけ離れている素晴らしい場所でなぜ今まで気づかなかったのかとても後悔しているほど素晴らしい場所でした。

北京ではまず都市の規模に驚きました。紫禁城を中心としその周りに街を形成していく形が今でも残っているところや、門からまっすぐ一直線に作られているのもとても興味深かったです。

2つ目は、交通量の多さでした。日本では見たことないくらい交通量の多さでナンバープレートによって通行できる日を決めているところは日本では考えられないことでした。他にもバイクなどの二輪車はほとんどが EV であったことや公共交通機関には電気を使ったものがほとんどであったところでした。電気モーターの効率はガソリンエンジンのそれと比べて約 3.5 倍もの差がありとても効率がよく率先して活用していくところは日本より進んでいるように感じました。

3つ目は町と自然が共存しているところでした。北京大学構内には近代建築のキャンパスの中に庭園があり普段自分が耳にする光景とは全く違いとてもリラックスできるような場所でした。

ほかにも交流した大学生もとてもフレンドリーですぐに打ち解けることができ楽しかったです。成都是とても歴史的な街並みが今でも多く残っており、とても興味深い街でした。都江堰や武侯祠など訪問しましたが、高層ビルの間に趣のある建物があり近代建築と歴史的建築を同時に見ることができる不思議な場所でした。

西南交通大学では鉄道の研究が主に盛んで鉄道が好きな自分にとってとても興味深い大学でした。僕は一度山口の笠戸と呼ばれる場所にある日立製作所の鉄道工場を見学したことがありますが、まさにそのような工場が西南交通大学にあり中国のリニアモーターカー技術や高速鉄道技術の開発の意気込みを目の当たりにし言葉が出ませんでした。

また、西南交通大学での交流では北京大学のときとは違い、より近い距離で中国の学生と交流することができました。交流の中で日本のアニメや邦楽が好きだという人が多くとてもびっくりしました。

ほかにも日本語が流暢な人が多く、エンジニアトピックスを話したりや中国語を教えてもらったりとても有意義な時間を過ごすことができました。

今回の一週間の訪中を通して日本との文化の違いを多く感じました。

色々なことを実際に五感を通して感じ隣国であるにも関わらずニュースでしか知らなかった中国がとても近くなりました。

中国は33の行政区からなっており今回の旅では二つの場所に訪れました。上海や香港などもっと面白い場所が残り31の都市にそれぞれあると思うのでまた訪れたいと思いました。

これからの工業は中国が中心になってくると思います。グローバルに活躍できるエンジニアになるためには英語のみだけではなく中国語も必要になると思います。実際に中国では英語が日本人よりも通じると思っていたのですが、中国語しか通じなかったのはとても驚きました。日本人はパッションで中国の学生に劣っていると感じ自分も負けないうらい色々なことに挑戦していきたいと思いました。

日本人の中には中国に対してあまり良い印象を持っている人があまり多くないかもしれません。今回の訪中で日本人と中国人はどちらも歴史をととても重んじるところが似ていると感じました。だからこそ仲良くできないところがあるのかもしれないかもしれません。これから僕は相手のことを理解する、つまり分かり合おうという気持ちで接していきたいと思います。ものづくりも使う人がほんとに欲しいものは何だろうということが分からなければいいものづくりはできないと思います。

日本人と中国人は必ずわかりあうことができると信じこれからの大学生活を有意義に過ごしたいと思います。

◆私は、今回の訪中団で中国を訪れるまで、はっきり言って中国に対する良い印象も悪い印象も持っていませんでした。ただ、隣の国、人口の多い国、急速な経済成長を遂げた国という誰でも持っているような知識しかありませんでした。しかし、このような知識は中国という「国」を見ているだけで中国人という「人」を見ていません。その国を知るには現地に行って人と接するのが一番なのです。

今回の訪中で驚いたことは、中国人の方は意外と日本人にフレンドリーだということです。近年、外交上の問題があるため険悪な空気になるのでは、と勝手に考えていました。実際はそんなことはなく万里の長城では日本人なのか、と聞かれ、そうです、と答えると笑顔で握手されたりしました。また、ホテル等ではスタッフの方はいつも丁寧に挨拶してくれて、街のお店でも日本人と分かるとジェスチャーで伝えてくれようとして中国人の温かさを感じました。このような経験は中国、中国人に対する私の中の気持ちを大きく変化させたと思います。中国人は日本人を毛嫌いするかもしれないと思っていたのですが、実は違い反対に好印象を抱いている人たちと触れ合い、中国人と日本人は仲良くなれると実感しました。さらに、急速な経済発展を遂げた知識では知っていても実際に訪れてみると思っていた発展以上のレベルでした。高層ビルが立ち並び、たくさんの車線があるにも関わらず混雑するほどの交通量、日本では考えられないほどの人の数、どれもが圧倒される光景でした。そんな隣国である中国、中国人と仲良くなるにはやはり交流が

一番の近道だと思います。外交上の問題はあるものの政治上の問題であって中国人、日本人同士の問題ではありません。お互いに歩み寄る気持ちさえあれば大丈夫です。しかし、日本人の中には中国人を嫌っているという人もいます。仲良くなる上で嫌悪感は大きな障害になりますが、人の気持ちをそう簡単に変えることはできません。そこで本当の中国の姿を知っている、知ることのできた私たち訪中団のメンバーが、中国はこういうところなんだという体験談や見たことを伝えることができれば少しは力になれると思います。また日本は隣国である中国との協力が不可欠だと思います。日本と中国、この二国の関係は良い影響でも悪い影響でもアジア全体に影響を与えるでしょう。そのため、二国は協力することを忘れずに二国だけではなくアジア全体のことを考え、歩み寄る努力が必要と考えます。国同士が仲良くなるには人同士が仲良くなくては駄目です。そのための第一歩として中国のことをみんなに知ってもらいたいです。

今回の訪中で私は中国に興味を持つことができました。行く前までは中国に行くということに気持ちは全く反応していませんでした。しかし、中国、中国人と接してからは七日間があつという間に過ぎてしまい最後には名残惜しいほどでした。また行きたいと思えるほどの七日間であり、また会いたいと思える人たちにも出会いました。中国にいた七日間は私の人生の中で大切な七日間です。

◆私の訪中前の中国に対する印象は、あまりいいものばかりではありませんでした。というのも、私が中国についての情報を得る機会としては、テレビやインターネットが主になってきますが、そこで報道されているのは、大気汚染のことであったり、激しい貧富の差、食品偽装、そういったマイナスなことばかりであったからだと思います。また中国人自体も、情には厚いが他人には無頓着で遠慮がない、というイメージを抱いていたことが事実です。実際中国に行くことは、人生初めて海外へ行くということもあってか環境的にも人との交際的にも大きな不安がありました。

そして中国での生活を終えた今、中国へ対する印象は大きく変わり、それと同時に日本を客観視できるようになり、“国際交流”の意味を、初めて実感できる機会となりました。

確かに7日間、外がどんよりとした空気の日もあれば、道路が整備されていない場所も多く見受けられ、過ごしやすいたとは言いきれない環境であったと感じます。しかしこれらは中国のこれから発展していく箇所であり、またこの課題を実際に自分の目で確かめることができたことはよい経験であったと思います。北京青年創業公社や北京大学、西南交通大学を見学した際には、新しい研究開発などに励む人々の姿と、その人々が思い描く中国の理想の未来を肌で感じ、中国へ対するイメージはそれらによってがらりと変えられました。

そして今回の訪中で特に変えられたことは、中国の人に対する印象です。先に述べたように中国人は情に厚いが他人に無頓着、遠慮がないということが私の訪中前の中国人に対するイメージですが、7日間を終えて感じることは、人の性格やその特徴は人種によっては固定されないということです。当たり前なことではありますが、私を含め特に目立った国際交流の経験がない人の

多くは、外国人に対して先入観をもっていることがほとんどだと思います。しかし北京大学、西南交通大学の学生と交流してみて、積極的に話しかけてくれた方もいれば、シャイな学生もいて、さらに仲良くなっていけば中国人特有の特徴ある性格が見えてくるのかもしれませんが、この国の人はこうだとか、そのような概念はどこにもないのだと思いました。このことが分かってから、中国を含めもっとたくさんの国の人と関わってみたい、交流がしたいと考えるようにもなりました。

この訪中で初めて日本を離れる機会となりましたが、帰国した今、私の生活のなかの当たり前は、当たり前ではなかったのだということを実感しました。それはマナーや環境の面で顕著に現れていました。これは日本人として誇れることであり、また全世界が同じマナー、環境ではないと、国際交流をしていくうえで理解しておかなければならないことでもありました。

決していい関係が続けているとはいえない中国と日本ですが、実際に中国や中国人に対して深い理解を持っている人はどのくらいなのでしょう？中国に行く前の私を含め、知らず知らずのうちに相手国に対して固定化された先入観を持つ人が多すぎることが事実だと実感しました。私の中国に対しての先入観が崩れたのは実際に中国人と交流したときなので、教育の一環として外国人と交流するということが取り入れられたらなあという考えも浮かびました。

この7日間、何度も考えを改めさせられる場面がありました。他国のことを一番理解できる方法は、その国に行くことやその国の人と直接交流することなのだと気づき、国際交流に興味も沸いています。テレビの報道やインターネットの記事でその国すべての印象を決定することは間違いだと気づきました。これから、今“何もわからない”状態の様々な国や人のことを、国際交流を通してたくさん知っていきたいと思います。

◆今回の訪中でこれからの大学生活が変わるほどの経験をすることが来た。日本の他大学の学生と交流することによって自分の語学の能力がまだまだであると知ることができた。また、他大学は留学や海外訪問など海外経験が豊富であり私の海外経験がまだまだ未熟であると理解することができた。それに伴いこれからの大学生活でより英語を勉強する必要があると感じた。今回は中国の学生が日本語を専攻しており日本語でコミュニケーションをとることができたが、一般的に英語が国際共通語であり私たちが交流を深めた学生たちが日本語を専攻していなかったら、交流を深めることはできなかつただろう。現在、世界の英語人口は17.5億人とされており英語を身に着けることによってコミュニケーションの幅が広がり日本語だけでは出会うことのできなかつた人々とも出会うことができるようになる。これは他大学との交流が少なく閉鎖的な環境の中で勉強をする山口大学では気が付くことができなかつたことである。

私は今回初めて中国に行ったのだが私が思っていた国とは違った。日本は偏った報道・放送によって日本に比べ野蛮であると印象操作している傾向にある。しかしそれは全く違った。日本と中国はルールが違うだけで文明は日本と同じ様に発展していた。ルールの違いは交通に大きく表

れていた。中国では常時右折を可能としていたがそのルールを私は知らず右折車を「危ない」と思ったが中国では当たり前のことである。このように互いの国の文化やルールを理解せずに自分の国の枠に当てはめることによって文化やルールの違いを受け入れることができなくなる。そのようにして国同士の相互嫌悪が生まれるのだと身をもって感じた。そのようなことをなくすためには、「百聞は一見に如かず」という言葉があるように本やインターネットなどの知識だけではなく、国を知るために行ってみてその国の空気を感じる事が大切なのだと感じた。日本人は島国であり周りを海に囲まれているということもあり国に行かずに情報だけで国がどのようなものなのか決めつけることが多い。私はそのような人々に「聞く」のではなく「行く」ことが大事なことでありこの体験を通して伝えたい。

中国の学生は勉学に対する向上心が高く、皆熱心であった。そして私たちととてもフランクに交流してくれた。やはり同じ年代というものは国や言語が違えど仲良くなることができるのだと身をもって体験することができた。仲の良い関係を続けることができれば将来ともにビジネスを起こすことができ、政治に関しても衝突を起こすことはないだろう。そしてこのような勉強熱心な若者が現在のような中国の経済発展の担い手になるのだろうと思った。これからの日本は、私たちのような若者が中国の若者のように向上心を持って学業に励み、これからの日本、そして世界を引っ張っていけるような国を作り、平和を作っていかなければいけないと感じた。

◆私が訪中団に行く前に中国に対して持っていたイメージは決していいものではありませんでした。PM2.5などで大気汚染が心配、反日感情を持つ方もいらっしゃるのではないかと、水などの衛生面で体調を崩さないかなど様々な不安がある中で今回の訪中団に参加しました。

中国の北京についてはじめに思ったことは私が山口県で暮らしているからかもしれませんが高層ビルが多く都会であるということでした。車線も5つもあるにもかかわらず車が混雑するほど走っているということ、ナンバープレートが抽選で当たらないともらえないこと、曜日によって走れる車のナンバーが決まっていることなど中国の車事情についてもはじめて知ることばかりでとても驚きました。二日目は世界遺産の万里の長城ではその長さに圧倒されました。歩いて渡り切るには1年半かかると聞いたただ驚くばかりでした。紀元前の人たちがこれを作ったのかと思うと壮大過ぎて想像もできませんでした。それから訪れた創業公社ではまず、起業の支援をしてくれる会社という日本では珍しい会社の形に感動しました。日本でもこのような起業支援があるといいと思いました。3日目の北京大学ではまず大学の広さ、充実した施設に圧倒されました。式典でも素晴らしい演奏で中国の文化に触れることができました。4日目の故宮博物院参観でもまずその広さに驚きました。中国は風水を重んじておりそれをもとに故宮が作られたということも中国らしいと思いました。北京での食事はとても優しい味わいのものが多く食べやすかったです。それから成都に移動しましたが、成都も北京に負けないくらいの都会であることに驚きました。5日目はパンダ基地に行きましたが初めて見る生のパンダに感動しました。とても大きい身

体で器用に木を登る姿を見ることができて新鮮でした。レッサーパンダもとてもかわいらしかったです。それから訪れた都江堰も吊り橋など新鮮なものばかりでした。成都規画館でも映像や模型で成都を見ることができ、とても感動しました。夕食のときに見た変面のパフォーマンスにはとても驚きました。お茶のパフォーマンスもスタイリッシュで中国には素晴らしい文化がたくさんあるのだなと思いました。5日目の錦里散策では古い町並みがとても素敵でした。西南交通大学での交流では施設のすばらしさに感動しました。学生さんたちも英語だけでなく日本語も勉強なさっていてすごいと思いました。成都での食事は日本の中華料理とは違った本格的な辛さの麻婆豆腐を食べることができました。顔から汗が止まらなくなるくらい辛かったけどやみつきになるおいしさでした。

今回の訪中を終えて考えたことはもっと日本人は中国について知るべきだということです。実際中国を訪れてみて大気汚染は気にならなかったし中国の人たちも優しい人ばかりでした。中国の学生たちもとても勉強熱心で日本語も上手でした。これらのことは日本で中国についてのニュースを見ているだけでは絶対に知りえないことです。中国の良いところをたくさん知ることができたのでこれからはその良さを日本人に伝えていくのが私の役割だと思います。これからの日中の友好に私たち大学生が貢献していくことで日中関係がより良いものになっていくと思います。これから中国の良さを広めていけるように努めていきたいです。

◆今回の訪中団の活動に参加して、中国に対する認識が大きく変化しました。参加する前はどちらかというとあまりよくない印象を持っていました。日本で放送されるニュースの情報をそのまま受け入れ、それが中国という国にもつイメージのすべてだったからです。しかし、まさに「百聞は一見に如かず」でした。

私が約一週間の活動のなかで最も驚いたことは中国の皆さんの親しみやすさです。まず、ガイドさんをはじめ、現地の大学生、売店やホテルの方々の親切な対応に非常に感動しました。特に印象に残っているのは、最終日の西南交通大学での交流会です。わたしは英語も中国語も自信がなく、通訳の方に頼って交流していました。しかしその日の交流会で隣に座っていたのは私と同じように英語も日本語もあいまいな中国人の学生でした。最初は会話が成り立たず沈黙状態が続きましたが、勇気を出してつたない英語や中国語に加えて身振り手振りで伝えた結果、相手の方もジェスチャーや簡単な中国語で答えてくれました。そのあとはお互いに自国語を教えあったり、写真を撮ったり、最終的には連絡先を交換して今でも翻訳アプリなどを活用して連絡を取っています。言葉の壁を越えた交流をすることができて、私にとってかけがえのない経験になりました。

次に印象に残っているのは、中国の交通についてです。あれだけの巨大な国土面積に加え、莫大な人口なので、道路や交通システムがどのようなになっているのか不思議に思っていました。実際の光景は私の想像をはるかに超えていて、バスの天井に植木が当たったり、車と自転車が道路で並走していたり、車も自転車も遠慮なくクラクションを押したりなど、日本ではあまり見られ

ない光景が広がっていました。また、北京では交通量が多すぎることから、曜日ごとにナンバープレートの最後の数字を使って規制を行うといった中国流のルールが存在していました。こういった情報もネットで仕入れることはできますが、実際に現地に行って現状を見たうえで知るのでは、感じるものが違うように思えました。

約一週間滞在して、中国のいいところはたくさん知ることができました。逆に、気になる点も多々あります。

1 つ目は、トイレ事情。日本ではきれいな施設にトイレトーパーが常備されているのが当たり前です。しかしこれは日本の中の当たり前であって、世界で見ると珍しいケースであることがわかりました。実際中国のトイレではトイレトーパーがないため、普段は手をふくものである紙がかわりだったことが多くて非常に驚きました。今後、世界中のトイレに革命を起こす企業があらわれてくれるのではないかと期待しています。

二つ目に、大気汚染。訪中前に一番心配していたのですが、空が灰色になっているとか極端なものではありませんでした。しかし、日に日にのどが痛くなり、帰国後も数日間継続していたのでまだまだ改善していくべき問題であると感じました。

今回、いかに自分の視野、または自分の持つ世界が狭いものであるか、また、自分から積極的に行動することの大切さ、あとは言語の必要性をあらためて実感しました。この素晴らしい活動に参加することができて本当に良かったです。訪中に協力してくださった皆様に感謝し、この経験を生かして今後も頑張っていきたいと思います。

◆訪中団のこの7日間を終えて最初に思ったことは、どうして日本では中国にマイナスイメージを持つ人が多いのだろう、ということです。私も初めて中国を訪れるまではこのたくさんの人の中の一人でした。

北京最終日の朝、友達3人で天安門広場に行くことになりました。前日に仲良くなった北京外国語大学の友達にバスでの行き方を教わって出発しました。バスの料金が片道一人2元ということは聞いていましたが、バスの中に両替機がないことは予想外でした。私たちはちょうどいい金額を持っておらず、結局3人分で10元払いました。バスの職員の方は英語が話せず、私たちも中国語が話せませんでした。帰りも同じように、職員の方にジェスチャーで3人分と伝えて10元を差し出しました。すると、行きとは違ってすぐに受け取ってもらえず、職員の方はなにか中国語で他の乗客に呼びかけ始めました。最初は、無視された、と思いました。この時まで私はなんとなく中国もいいところかも、と思っていたようで心の底では違ったのか、すぐひどい対応をされたと考えてしまったのです。しかしその考えはこの後一瞬で変わりました。職員の呼びかけを聞いた乗客の皆さんが財布の中をごそごと探り始めました。そして、1人の乗客の方が私たちの10元を両替してくれたのです。本当に驚きました。「謝謝!!!」としか言えない自分が情けないくらいでした。

交流した北京外国語大学や北京大学、西南交通大学の同年代の学生たちは皆一生懸命で、夢を持っていて、努力していて、そしてなにより日本のことを知りたいという姿勢を強く感じました。交流のあと、自分は準備が足りなかったと感じました。中国を知りたい、理解したいという気持ちをもっと強く持って訪れるべきだったと思いました。

7日間は、たった、が付くくらい短く、中国と日本がこれからどう付き合っていくべきか、というような大きな課題はとでもではありませんが私には思いつきません。しかし、訪中団として中国を訪れ、たくさんの歓迎を受け、貴重な経験をした私たちには、中国と日本の友好のために考え続ける義務があると思います。そして、一人一人が“日中友好大使”のような気持ちで、中国で経験したことや体感したことを周囲の人に伝えていくことが大事だと思います。訪中前の私のように中国に対してマイナスイメージを持っている人はたくさんいると思います。その人たちの意識を少しずつでも変えていきたいです。中国の街や人の元気さ、明るさ、優しさ、まじめさ、積極性、伝統、古きを大事にする心、体感したものすべてを伝えていけたらいいと思います。

自分の人生の中では存在感のある7日間となりました。周囲の人に中国を伝えることと合わせて、自分自身をもっと成長させたいという気持ちがわきました。中国の学生や、一緒に訪中した日本の他大学生にも刺激を受けたからです。英語や中国語を勉強したいというのはもちろん、自分がいま大学で取り組んでいることにもっと一生懸命になろうと思いました。中国の活発で伝統のある街の中にも埋もれてしまわない自分になりたいです。そうしてパワーアップした自分になって、今度は友人を連れて、また中国を訪れます。その時は私が中国の良さを伝える番。新たな“日中友好大使”の仲間を増やしていきたいです。

◆私は今回初めて日中友好大学生訪中団の団員として参加しました。また中国に行くのも初めてでした。この訪中団に参加したきっかけは大学の先生にその募集があることを教えてもらい、自己負担が1万円ということと実際に中国の学生と交流できるということととても魅力を感じ、行くことを決意しました。私は中国に行く前はあまり中国に良い印象を持ってなかったので不安7割楽しみ3割という気持ちで中国に行きました。

実際に中国（北京）について一瞬で感動に浸りました。日本から飛行機でたった三時間飛び立った地にはこんなにも違う世界があるのだなと。町を見ただけで今までいろいろあった不安が一瞬で楽しみに変わりました。この町をもっと知りたい！と思いました。北京2日目、万里の長城にいきました。秦の時代にこんなにも巨大な建造物を人力だけで作ったということに感動しました。次に北京青年創公社に行きました。ここでは台湾の企業のために部屋を貸し出していたり、起業がブームになっていることを知り、このようなことが中国の今の急激な経済発展に寄与していることがよくわかりました。北京3日目、北京大学で中国の学生と交流しました。ここで初めて私は外国人と友達を作ることができました。中国の学生はおおらかでとても話しやすく、日本のテレビの話題で盛り上がりたりしました。連絡先も交換することができました。そこに中国と

日本の壁はなかったです。北京4日目、故宮博物院にいきました。スケールの大きさにとても感動しました。本当に昔の人の知恵と技術がつまっていることが感じられました。故宮博物院は非常にここに残ったため日本に帰ってラストエンペラーという映画を見ました。(その映画に故宮博物院がでているため)

次に成都に行きました。成都1日目はパンダ基地、都江堰、成都規格館見学、環球中心見学をしました。都江堰はまたも昔の人の技術に感動させられました。この施設のおかげで灌漑がうまくいき、今の成都ができたといっても過言ではないと思います。また、環球中心を見学したときは中国なのに日本や韓国のもものが売ってあったりとても不思議な感じでした。成都2日目は武侯祠、錦里、杜甫草堂見学をしました。どれも教科書で勉強したことがあることを実際に見ることができたので大変勉強になりました。その後西南交通大学で学生と交流しました。ここでまた中国人の新しい友達を作ることができました。その交流した学生たちはみんな日本のことが大好きで、日本のこういうところが好き、ああいうところが好きというのをたくさん教えてくれて本当にうれしかったです。成都最終日は青少年宮へ行き少林寺拳法などを体験しました。

この七日間は私にとってとても重要な七日間となりました。私にとって中国に対するイメージが180度変わりました。中国に行く前は日本のテレビやネットなどの情報に惑わされ、中国に良いイメージは持ってなかったし、中国人はマナーが悪くみんな日本人のことが嫌いなのかと思っていました。これはある意味日本人が情報操作されているのだと思います。しかし、実際に中国に行ってみると中国の悪いイメージのところはほんの一部で、それを超えるすばらしいところもたくさんあるし、交流した学生たちはみんな日本のことを良く思ってくれているし、中国人がマナーが悪いと思うのはただの文化の違いであり悪気があるわけではないということもわかりました。まさに百聞は一見に如かずです。これからの日中友好を円滑にすすめるためにも、私たちが学んだ中国の良さを日本に広める必要があると思うし、実際に行ってみてわかったことがたくさんあったということも広めようとおもいます。私は今胸を張って中国が好きと言えます。こんなことが言えるとは中国に行く前は思ってもいませんでした。これからも機会があれば日中友好に携わりたいと思ったし、外国と積極的にかかわっていこうと思います。

◆この度2017年日中友好大学生訪中団の団員として中国を訪問して、私の中での中国という国へ対するイメージが大きく変化した。訪中前は中国といえば治安が悪く、アメリカや日本等といった先進国と比べるとあらゆる面でまだまだ発展途上な国であると思っていた。しかしながら、実際に訪中してみて、確かにまだまだ発展途上であると言わざるを得ない面も多々あったものの、先進国と同等もしくはそれ以上に発展している面も多数存在していることがわかった。私が一番驚いた点は北京と成都の街が予想以上に都市化が進んでいたことである。中国の広大な土地に巨大な建設物が隙間なく存在している光景は日本の東京の都市とはまた一味異なるものであった。中国には歴史的遺産も多数存在しているということを考えると、現在たまたま発展途上国という

立ち位置にあるだけで本来は世界でも中心的な立ち位置にあってもおかしくないほどに潜在能力のある国なのかもしれないと思った。また、中国の学生の意識の高さにも驚いた。今回の訪中で交流した学生はいずれも中国でも優秀な大学の生徒であったというのものもあるかもしれないが、英語も日本語もとても流暢であり、学ぶことに対して積極的であり、自分たちが中国の未来を担うのだというような意識を持っているように感じた。このような意識の高さは、日本の学生は見習わなければならないと思った。ビジネスの面に関しては、北京青年創業公社を訪れた際の、ベンチャー企業に関するものが印象に残っている。小回りの利くベンチャー企業が、これまでになかったような斬新な発想や技術を生み出しているのを見て、今後の中国の技術面及びビジネス面における可能性を感じた。中国という国は様々な潜在能力と優秀な将来の担い手を持つ可能性に満ちた国であるというのが今私の持つ認識である。しかしながらマイナス要素があることも無視できないと思った。一番に目についた点は、インフラの急速な発達に制度や整備が追い付いていないという点である。その最たる例が交通制度であるように思う。中国に着いて、中国人の交通マナーの悪さにはとても驚いた。あれだけの都市化を成し遂げている国で、交通制度があれほどルーズであるのはとても不思議であった。また、トイレの紙が流せないというのも驚いた。そのような側面に焦点を当てると、まだまだ発展途上だと言わざるを得ないと思った。逆にあの広大な都市に制度及び設備が追い付いて来れば、先進国のものを凌ぐほどの都市になりうる可能性があるといえる。中国がこれから更に力を持つことが間違いないというのは上に述べたことから明らかであり、日本と中国の関係をもっと親密にしていくことの重要性も増してきている。そのためには両国民がお互いを正しく理解していくことが必要である。そのような点で今回日中友好大学生訪中団に参加できたことは私にとってとてもよい機会になった。今回の訪中で、中国という国をもっと知りたいと思うようになったからである。そのためには彼らとコミュニケーションを取ることは必要不可欠であり、外国語を学ぶ意欲が湧いた。また、中国のみではなく他の国に対しても興味も持ってみようと思った。これからの大学生活では、今回の経験を機会に中国を含む諸外国について興味を持って行動し、そうして学んだことを活かせるような広い視野を持った大人になろうと思った。

◆私が中国に行ってよく見ておこうと思ったのは、中国の市民、つまり中国に暮らす人々である。当たり前であるが、国を作るのは人である。中国がなぜここまで発展できたのか、私はその答えが人々の中にあると考えた。

訪中以前の私の中国人のイメージは、「マナーがよくない」や「厚かましい」などのようにネガティブなものばかりだった。実際に行ってみた後の感想としては、そのイメージが偏ったものだったということがわかった。街の人々はみな親切に道を教えてくれ、一緒に活動や会話をした中国の学生は素晴らしい人物ばかりだった。

今回の訪中で、私が特に感じたのは、若い人の力強さだ。中国の大学生は日本の大学生よりも

勉強熱心だと感じた。北京第二外国語大学の日本語専攻の学生は、自分から日本語を専攻に選んだわけでは無いのに流暢に日本語で会話ができおり、教育レベルの高さや個人の意識の高さを感じた。北京大学の施設の紹介の際に見せて頂いた北京大学発のスタートアップの発明品はどれもレベルが高く、大学生で既にこんなことをしているのかと驚かされた。また、北京大学の施設にしても、北京青年創業公社の施設や仕組みにしても、若いやる気のある人やグループの取り組みをしっかりと支える体制ができているので、中国はこれからも発展していけるのではないかと感じさせられた。私は中国の人たちと直に触れ合うことで、中国の発展の原動力を垣間見ることができた気がする。

今回の訪中では、もちろん中国を知ることができ、中国人の友達ができただけでも良かったが、それに加えて日本人の他大学の友達と話ができただけでも、自分にとって有意義であった。日本の中心から離れた山口で過ごしていると、日本人としてのアイデンティティを意識する機会があまりないが、今回のように日本人の集団で他国を訪問すれば、自分達が日本人であるということを強く意識させられる。さらに中国の勢いや力強さを目の当たりにして、自分達日本の学生も負けていられないと、多くの学生が感じたと思う。日中友好や日中協力のように両国が力を合わせることは望ましい。だが馴れ合いや上辺だけの関係ではなく、お互いに切磋琢磨して競争していくことができれば、両国はこれからアジアだけでなく世界をリードできる存在になっていけるのではないかと感じた。

日中友好はアジアの中でも、世界の中でも大きな意味を持つ。現在日本と中国の関係は落ち着いているが、領土問題や北朝鮮への対応など簡単には解決しない問題も残っている。だが、お互いにいがみあっては、問題は前に進まない。様々な問題を平和的に解決し、その上で良い関係を築いていければ良いと強く思った。そして最後に考えたことは、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の足で歩いたから多くの情報や学びを得ることができたということだ。

今回このような貴重な体験に参加させていただき光栄でした。ありがとうございました。

◆僕にとって今回の訪中はとても貴重なものでした。なぜなら人生初海外だったからです。僕はもともと海外に行く気などありませんでした。治安などを考えれば日本から出る必要がないと思っていたからです。しかし、今回訪中の案内をいただいて、行くことを決めました。決めた理由は国内の違う大学の学生や外国に行くことにより自分の価値観を壊そうと思ったからです。

そして、訪中を終えて、実際に価値観が壊れたような気がします。まず、日本を出て飛行機の中で機内食を食べる時に中国の航空会社だったため、日本語が通じない状況になり、とても焦りを感じました。空港に着くと、周りでは中国語が飛び交っていることに驚きながらも外国に来たことを実感していました。中国に着いた次の日、万里の長城へ行きました。友人と一番上までいこうと上がっている途中で、中国、ヨーロッパやアフリカの方と触れ合うこともあり、今までにない経験をしました。その晩の交流夕食会では、中国の大学生といろいろな話をしました。中国

で、日本のアニメや漫画だけでなくドラマやバラエティ番組も人気のように日本の役者さんやアーティストも有名でびっくりしました。そのような影響もあつてか、とても親日なことにもびっくりしました。北京大学へ訪れた際も中国の学生さんと楽しく交流し、SNSの連絡先を交換することもありました。千人交流会では、両国パフォーマンスを披露しましたが、吹奏楽団によるコンサートの時は国境の隔たりなく会場全体が一体化したように感じました。故宮も日本にはない大きい建物で圧倒されました。夜に北京の街へ出かけたりしましたが、日本では考えられないような光景をみて驚きました。しかし、北京は高い建物が多く、山口に住んでいる自分としてはとても都会に感じました。徐々に中国にも慣れてきて、成都へ移動しました。成都是北京ほど高い建物が多くなくて、夜でも北京ほどうるさくなくて、とても住みやすそうでした。そんな成都で初めてパンダを見ました。丸くてかわいいイメージでしたが、思っていたより大きくて迫力がありました。でも、このパンダが日中友好の証と考えると何か愛着が湧きました。その夜、四川省の方を招いての夕食会がありました。そこで中国・四川省との思わぬ関係に心を打たれました。それは互いに自然災害が起きた際に何かしらの援助をしあっていることです。日本も自然災害が多い国ですが、中国・四川省も何年前に起きた地震と最近また地震が起きています。そんな両国が互いに支援を行っていたのです。そのことを知り、支援金を出さなかったこと後悔しました。事務局と一部の学生の支援金を四川の方に渡しました。すると、その方はとても感動されていてお礼をおっしゃっていました。僕はその姿を見て感動しました。

僕の家族もそうですが、日本人は中国に対して良いイメージを持っている人が少ないと思います。たしかにニュースなどで取り上げられるのは中国との問題ばかりです。しかし、現地に行くことで、このような知られない事実を知ることができました。僕はこのことを日本全国の人に知ってほしいと思いました。そして、領土問題など中国との問題をいち早く解決し、もっと友好を深めてほしいと思いました。

また、今回の訪中で本来なら出会うことのなかった東京の学生と仲良くなれて、とても良い思い出にもなりました。一期一会とは、このようなことだとわかりました。

今回のこの貴重な経験をいかし、これからの日本を支えていく一人として意識して、日々の生活を送っていこうと思います。

また、今回このような機会をくださった日中友好協会の皆さまには深くお礼申し上げます。

◆私は今回の訪中で初めて中国に足を踏み入れた。行く前の中国の印象は決して「良い」と言えるようなものではなかった。もちろん悪いイメージばかりというわけでもないが、やはりどうしてもニュースで取り上げられる「反日」というイメージがつきまといまう。また、PM2.5により空気が汚れていたり、道にゴミが落ちていたり、というマイナスイメージもあった。しかし私はあまり良いイメージではないからこそ今回の訪中を決断した。耳から入る情報だけで決めつけてはいけない、自分の目で見て自分の足で中国の地を踏みしめ、自分の五感で中国を感じた

上で中国について考えたいと思ったからである。

この訪中では北京と成都の悠久の歴史を感じつつ、一方で世界を引っ張っていく存在として様々な技術発展、またそれに伴う人材育成に努める中国の姿を見ることができた。私たちにとって中国の玄関となった北京空港では清潔な印象を受けた。万里の長城では普段味わうことのできない数千年の歴史を足で踏みしめ思いをはせることができた。教科書ではわからない一段一段の高さや上った後の眺めなどを体感した。故宮博物館では歴史が動いた場所に自分がいるというえも言われぬ興奮を覚えた。ほかにもパンダ基地参観、都江堰参観、変面鑑賞、杜甫草堂・武侯祠参観、錦里散策では中国の魅力をたっぷり味わうことができた。北京創業公社では日本ではまだ充実していない起業支援やそれにより発達した科学技術を知り、成都規画館では非常にリアルなCGを使った成都の説明を受け中国の発展を実感した。また、北京大学や西南交通大学での生徒との交流では彼らが質の高い学習活動を行っていることを知り良い刺激を受けた。そしてなにより彼らと話すことはとても楽しく、話している時には「中国と日本」という「国境」を意識することはなかった。彼らと話すときはあくまでお互いに一人の大学生であり、国同士のいざこざを抜きにしてファッションや恋愛、漫画などに興味を持ち大学生活を楽しんでいることは変わらない。私たちは良い友好関係を築けるに違いないと感じた。もちろん自分が目にした風景が中国のすべてではなく一部に過ぎないことはわかっているが、これにより行く前に強く印象付いていた「反日」というイメージはステレオタイプによるところも大きく、実際には友好的な人々も多くいるということを実感した。PM2.5についても中国滞在期間にPM2.5を意識して過ごすようなことはなかったし、歩道の至る所にはゴミ箱が設置してあり人々がポイ捨てをしない工夫がされているためポイ捨ても多くなかった。

このように自分の目で見た中国はニュースや教科書だけではわからなかったことがたくさんあり、この経験は自分にとって非常に価値のあるものになった。これからは「自分の目で確かめること」をもっと大切にして生きていきたいと思う。このような経験をさせていただいたことに心から感謝をしたい。

◆私は訪中前、中国人に対してあまりネガティブなイメージはありませんでした。その理由として、2年前私がフィリピンに語学留学に行ったとき寮生活で中国人と一緒にになりました。その時は、とても不安でしたが、実際に生活してみると向こうの方からいろいろと話しかけてくれたり、困っているときに助けてくれたりしてくれました。だから、中国人は親切だと思っていました。一方で、中国自体に対してはあまりいい印象を持っていませんでした。特に大気汚染の問題や社会主義体制であることです。

しかし、実際に訪中してみると、北京は雨のおかげかそんなに空気は悪くありませんでした。そして、一番驚いたことは車社会がかなり進んでいて、どこにいても渋滞していたことです。何年か前の中国のイメージは自転車がたくさんあるイメージでした。しかし、現地のガイドさん

が言うには、普段ならもっとすごく渋滞するらしいということです。北京では、万里の長城や故宮博物院といった世界遺産にいき、歴史について学ぶことができました。一方で、成都是空港を建設しているなどインフラ整備を進めていてまだまだ発展しようとしているとともに、緑や自然を大切にしようとしてる街で、非常に滞在しやすいところでした。成都では、パンダ基地や都江堰といった動物や自然とふれあったり、成都規画館では成都の歴史やこれからについて学ぶことができました。また、武侯そうや杜甫草堂など歴史にふれることもできました。大学では経済学を専攻している私にとっては、中国の経済について学ぶのにもよい機会になりました。中国ではシェア経済が流行っていることに驚きでした。特に成都が今後、どのように発展していくのかがとても気になりました。

北京大学や西南交通大学を訪れてまず驚いたことは、キャンパスが広がったことです。湖や塔があったことに驚き、公園のようでした。そこでは、その大学の中国人学生と交流しましたが、日本語学科の学生はとても日本語が上手でした。また、北京大学の経済学部の学生は英語が堪能で、自分も語学を頑張らないといけないと感じました。中国人学生は思っていた以上に親切でたくさんのお話を教えてくれました。西南交通大学では、鉄道整備の高度な技術力を見ることができました。その後は絞り染めの体験をして、文化に触れることができました。

今回の訪中を通して、本当に貴重な経験ができて行ってよかったと思いました。現地のガイドさんや北京や四川省の友好協会の方が訪中に対して大歓迎してたのはうれしく思いました。今年は日中国交正常化45周年という節目の年ではありますが、中国とは未だに領土問題などで日本とは厳しい状況にあるのが現状です。しかし、切っても切り離すことができない隣国とはこれから先も親密な関係としてつきあってはいかなければなりません。私はこれから先も中国とは仲良くやっていきたいと思っています。だから、将来この経験を活かして何らかの形で日中友好に携わっていきたいと考えています。

最後に、この7日間日中友好協会様をはじめとする多くの方々にごこのような貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。

◆今回、日中国交正常化45周年記念の日中友好大学生訪中団に参加することができ、とても良い経験をさせていただくことができました。

昨今のメディアでは、お互いの国に対して8割以上の方が悪いイメージを持っていると報道されているとききます。私が思うに、それは、ただお互いの国をあまり知らない人がそういう悪いイメージを持っているのだと考えます。しかし、私自身も中国のことは領土問題や空気汚染などのニュースなどで流れてくるどちらかという悪い印象の情報しか知らず、実際のことはよくわかっていませんでした。しかし、今回の訪中で実際に様々な人やものに触れることで、自分の中の中国に対するイメージががらりと変わりました。

まず現地の同年代の学生たちと交流した際に感じたことは、中国の若者は日本の文化（アニメ、

映画、ドラマ、歌、ゲーム) などのとても関心があることです。そういった日本文化の話をして
いるときは中国の学生たちはとても楽しそうに話すのを見て嬉しいなと感じた上、当たり前だと
思いますが、よくメディアが報道しているような反日感情は無いのだなと思いました。また、彼
らと話をしていると日本文化を私自身よりも知っていることや、インターネットを通じて常に日
本の情報をチェックしていると分かり驚きました。そして、日本語学科の学生でない一般の学生
の人でも、私が夜の街で道がわからなくなり道を尋ねた際、私たちが日本人だとわかると優しく
一生懸命に伝えようとしてくれ嬉しい思いをしました。中国人みんながそうではないと思いますが、
このように実際に触れあうことで中国に対するイメージが変わり、以前よりも良い印象を持
ち中国が好きになりました。

また、今回の訪中で中国の経済面でも驚かされました。学校の授業とかでは中国の経済成長を学
んでいたのですが、実際に北京の街を見るとそれがより実感することができました。なかでも、
北京大学内での様々な最先端な研究開発や創業公社での若者のベンチャー事業支援など、日本に
も負けていないのではないかとも思われました。まだまだ国内での経済格差はあるとは思いま
すが、経済成長の実態を少しでも見ることで、数字上だけでなくちゃんと経済発展して
いるのだなと感じました。そして現在、中国は一带一路政策など掲げていたりして、これからも
日本よりもどんどん成長していくのだなとも感じました。

今回の訪中でさまざまな素晴らしい体験させていただきましたが、この訪中後の過ごし方がさ
らに大事になってくると考えています。この訪中を機に中国語にもっと興味が出てきた上、中国
についての勉強をしてこれからも中国にもっといろんな形で関わっていききたいなとも感じました。
また、自分自身の中国語の語学力が上がれば、より多くの中国の同年代の学生たちともっと内容
のある交流もできるようになるのではないかと思いました。そして、中国の学生はとても勉強に対
する意欲が強く志がとても高いなと感じたので、こういった中国の学生とともに学んでいくこと
もきっと良い刺激となるので、大学生のうちに関わりたいなとも思いました。

最後に、中国の学生以外にも東京の大学に通う学生とも関わったのは良かったと思います。そ
ういった学生と1週間様々な活動やお話をして、私はたくさんの刺激をもらいました。そして今
後も、今回中国で交流した学生もですが、将来にわたりつながりを持っていけたら良いなと思っ
ています。

◆私が今回の訪中団に参加したいと私の父母に言ったとき、父母たちは「やめなさい」といった。
中国は空気が汚い、衛生面も不安、反日が多い、などの理由からだ。しかし私は、どうしても
自分の目で実際の中国を、中国の暮らしを見てみたいと思った。

私は大学の第二外国語で中国語を専攻している。なぜ私が中国語を専攻し、今回の訪中団への
参加を決意したかという、私の友人の言葉が心にとっても残っていたからだ。私の友人は中国に
1ヶ月ほどホームステイしたことがあった。そのホームステイで中国の良さや中国人の温かさに

触れ、中国をもっと知ってほしいとよく言っていた。友人にそういわれるまでの私は、ニュースや周りの大人たちの反中の意見に流され、中国にいいイメージを持っていなかった。しかし友人にそう言ってもらえたことで、自分の目で確かめようと思えたのだ。

実際に中国で過ごしてみて、最初の素直な感想は「汚くない」だった。空気も水も日本と大差なく感じた。また中国で出会った方々はほとんどの方が優しく、温かかった。たとえ言葉が通じなくても、英語で頑張って会話しようとしてくれたり、表情や身振り手振りでコミュニケーションを図ろうとしてくれたりした。ニュースでよく見る反日中国人の姿はなく、日本の文化や歴史に興味を持ち、好意を持っている人がほとんどだった。

私の初めての訪中は中国の良いところをたくさん見つけることができ、思い出深いものとなった。

帰国後、この訪中に参加することを決意したときに父母に言われたことを思い出した。思い返してみれば、父母が言ったことは的外れなことで、中国をメディアというフィルターを通じてしか見ていないからだと思った。そして、父母のように中国をフィルターを通じてしか見たことがない人たちに私ができることは、いつかの私が友人から中国の話聞いたように、私が体験したありのままの中国を語ることだと考えた。今回の訪中で私はありのままの中国の姿を自分の目で見る事ができたと感じている。そしてその体験をまだ見たことがない人に伝えるということが私にできる日中友好へのお手伝いではないのか、と感じた。

大学生の私にとって日中友好を促進させるということは大きすぎる課題であるし、できることは限られている。だが、「お手伝い」というくらい小さなことから始めたいと思った。その小さな行為が、誰かの中国のイメージが変わるきっかけになったり、中国を実際に訪問したいと思うきっかけになったりするのかもしれない。

私が友人から話を聞いて、今度は私が誰かに話す。そうやって少しずつでも、日中関係が良いものとなればよいと私は考える。

◆今回の訪中では、貴重な体験を数多くさせていただきました。まず、自分は、海外に行くこと自体が初めてでした。そのため、日本以外の国を自分の目で実際に見たこともなく、外国がどんなところなのかをよく知りませんでした。訪中前の中国への印象もメディアに強く影響されたものでした。僕は、訪中前は、中国にあまりいい印象を抱いておらず、大気汚染の問題であったり、害のある食べ物があったりなどといった部分にしか着目していませんでした。しかし、今回の訪中によって、少なからず中国への印象は変わっていきました。

飛行機に乗り、北京に着いて、ホテルへ行く途中、僕は、多くの高い建物に驚かされました。自分が、田舎人だからかもしれませんが、とても高いビルやマンションなどが多く立ち並ぶ光景は、見たことのないものだったのです。中国の発展を見たような気がしました。また、中国における交通事情にも驚かされました。常に鳴らされるクラクションや渋滞、車間すれすれの移動、

通行人を配慮しない進行などです。ナンバープレートごとに車に乗ってはいけない曜日があったり、ナンバープレートの抽選やオークションがあったりすることにも驚きました。中国には、交通における問題もあったのだなと知ることができました。

中国における観光では、有名なところを多く見ることができました。万里の長城や紫禁城、パンダ基地、都江堰などです。特に、万里の長城は、実際に上ることができてよかったです。階段が上へと続き、角度の急なところもあって、とても大変でした。少し進むだけでくたくたになるのに、これが何千キロも続くというのは、想像もできません。上からの景色はとてもよかったです。頂上からの景色も見てみたかったなと思いました。これらの観光で、中国の歴史や大きさを知ることができたと思います。

また、今回の訪中では、中国の学生の人たちと交流する機会がありました。交流夕食会では、実際に話す機会もありました。日本について話す、もしくは、中国について聞くことで、中国のことや中国の人柄について実際に知ることができたと思います。中国の学生さんは、日本語専攻だったためにとても日本語が上手でした。自分は、中国語も話せず、英語もあまりできなかったために少し申し訳なかったです。日本で、少しでも勉強してくればよかったなと思いました。また、中国の方は、とてもフレンドリーに話しかけてくれたために、とても積極的に交流することができ、楽しむことができました。壁というものには存在しなかったように思えます。違う国の人であっても、気兼ねなく親睦を深めることができるということを実感することができました。また、中国の人達によるパフォーマンスも素晴らしく、中国の文化面も知ることができました。

訪中前の、大気や食料の問題を拭い去ることはできてはいませんが、それ以上に中国の良い部分を実際に知ることができたと思います。実際の交流で、自分が訪中前に抱いていた、中国の人柄への不安はなくなり、距離のない付き合いができるのだということを思い知らされたように思います。隣国隣人として、言葉や文化の違いという壁はあるかもしれませんが、相手国の言語の普及を進めるとともに、老若男女における交流を両者行うことで、距離のない付き合いが実現すると思いました。今回の訪中は、自分の、中国の見方、はたまた他の外国の見方を大きく変えるものであったと確信します。少なからずあったであろう偏見や不安、壁はなくなったように思います。自分の人生における国際的な側面に良い影響を与える経験となりました。

◆今回の訪中にあたって多大なご支援をいただいた中国政府、日中友好協会の方々、日本・現地の関係者の方々、家族に心から感謝します。この先も日本と中国の友好のために、微力ながら貢献していきます。

僕が訪中団に応募したのは、メディアを介さずに自分の目で中国を見たかったからです。中国ほどメディアを通した報道(悪く言えば、印象操作)が頻繁にされる国は、ほかにあまりないように思います。今年になって、アメリカのドナルド・トランプ氏や、ミャンマーのアウンサン・スーチー氏の「フェイクニュース」という発言が有名になりましたが、誤解を恐れずに言うと、

僕もメディアの報道や報道の仕方に疑問を抱くようになっていました。特に中国に関しては、領土問題などの国家間のことから中国国内事情といった私たちに直接関係ないものまで、マイナスな報道で埋め尽くされているように感じます。これによって訪中以前の僕を含め、多くの日本人が中国に対して良い印象を持っていないと思います。この状況が僕は「食わず嫌い」に似ていると思います。「食わず嫌い」は、食べたことがなく、味もわからないのに嫌いだと決め込むことです。多くの日本人は中国に渡航したり、直接中国人と関わったりしたことがないにもかかわらず、好きではないと決め込んでいます。このことが両国の友好を阻む、もったいない要因の一つであると感じます。実際に中国を訪れてみると、ほとんどの人たちは良い人だとわかります。「ほとんど」なのは日本も同じで、感じの悪い人も必ずどこかにいます。人以外でも、メディアが伝える中国と異なる点はいくつもありました。このことから中国だけでなく、あらゆることについて「百聞は一見にしかず」ということを頭に留めておくべきだと感じました。

僕はいつも時間を有意義に使いたいと考えています。帰国すると、自分の日々の過ごし方で有意義だと思う過ごし方が変わっていることに気づきました。今まで重要だと思っていた事と、そうでなかった事への考え方に変化がおきました。中でも読書とコミュニケーションに対する考え方が変わりました。読書は今まで小説を読むことが多く、教養書はあまり読んでいませんでした。教養書は文字通り読む人の教養を高めます。現在は教養書を読んでおり、これからは教養書を多く読んでいくつもりです。コミュニケーションについては、能力があったほうが良いという漠然とした考えがあるだけでしたが、関東の大学生との交流を通して、自分がコミュニケーションの質・量ともに不足していることを強く感じました。また、それまでなかったコミュニケーションを図りたいという気持ちが芽生えてきた事実も、大きな意義があることだと感じています。

今回の訪中にあって僕は、英語でのコミュニケーションに不安はありませんでした。しかし実際にコミュニケーションを行おうとすると、発音が障がいになることがわかりました。コミュニケーションを図りたいという気持ちが後押しして、帰国してすぐ英会話教室に通い始め、ネイティブ講師を相手に磨いています。今回の訪中で得たことから、自分を進化させることができます。自分の成長には幸せを感じます。この機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

◆私は訪中を終えて、中華人民共和国という国が大好きになりました。訪中する前は、不安の気持ちが強く中国に対する私の勝手なイメージは、汚い、治安悪い、おなかを壊す、中国人は冷たいなどあまり良いものとは言えませんでした。しかし、日中友好大学生訪中団の目的であるように、実際に中国を訪れ、中国の大学生と交流し、中国の生活文化に直接触れることで、より客観的に中国を理解することができました。訪中し、中国に対する印象は劇的に変わり、私の大好きな国の一つとなりました。

千人交流会や歓迎会などを通して、中国の大学生と交流し、中国人の優しさに触れ、そしてと

ても勤勉で、刺激を受けました。日本語をととても流暢に話すことができ、同じ大学生として尊敬しました。私は千人交流会のAグループの日本学生代表を務め、代表挨拶をさせていただくことになっていたのですが、中国の大学生に通訳を依頼しました。私の挨拶には各大学の紹介もあり、日本語でも少し難しい言葉があるにもかかわらず、即座に的確な中国語に訳してくれました。挨拶の前、少し緊張していた私に、「大丈夫だよ～」と笑顔で声をかけてくれました。おかげで緊張がほぐれ、素晴らしい通訳のもと、無事に挨拶することができました。通訳はとても難しいことであるのに、それを如何にも簡単であるかのように熟す中国の大学生に大きな刺激を受けました。

また、同じ大学の友達と早朝に天安門広場に行ってバスを利用して帰る時、中国のバスは日本のバスのように両替機がなく、私たちは大きなお金しか持っていませんでした。仕方がないので余分なお金を払おうと困り果てていた時、乗務員が乗客に「両替できる人はいませんか」とアナウンスをして、乗客が皆財布を出して細かいお金があるか確かめてくれました。とても優しい乗務員と乗客のおかげで、私たちは余分なお金を払わずに済みました。まさに、中国人の優しさに直接触れた瞬間でした。実際に訪れなければ分からなかったことです。

このように実際に中国を訪れてみて、中国人の優しさに触れることで、中国に対する印象が百八十度変わりました。実際にこのような経験をした学生は少ないと思います。初めは少し中国に興味がある程度でしたが、この訪中団を通して中国のことをもっと知りたいと思いました。私は、もう一度中国を訪れたいと思い、今回の交流で仲良くなった中国人の大学生と中国旅行の約束を交わしました。このような今後の未来に繋がっていく友人ができて、とてもうれしく思います。

私は将来、社会科教員になりたいと思っています。近い未来、教壇に立ち、中国はどういった国なのか、そして中国人はとても優しく親切で、日本人が多く抱いているイメージと現実とははるかに違うのだと、中国の良さを伝えていきたいです。今回の日中友好大学生訪中団に参加し、実際に自分の目で客観的に中国を理解することができたからこそ、中国の魅力を伝えることができます。

今後の人生の糧となるような素晴らしい機会を与えてくださって、本当に感謝しています。今回の日中友好大学生訪中団が日本と中国の関係をより友好的なものとし、そして私も様々な形で日中友好に貢献していきたいと思っています。本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

◆私は訪中するまで中国に対してあまり良い印象を持っていませんでした。しかし、到着してからの近代的な施設や街並みを見てからというもの中国のイメージが覆されていきました。こんなに立派な建物ばかりとは思っていなかったし、空気も汚くて霞んでいるのかと思っていたので驚きでした。また私はとても印象に残った、現地の人との出来事があります。それは私がバスに乗った時のことですが、釣銭がもらえないとは知らず、大きいお金しか持っていませんでした。す

ると車掌さんが乗客に呼び掛けてくれて、一緒に乗っていた中国人のお客さんが両替をしてくれました。その場にいたお客さんみんなが自分の財布を確認してくれて、こんなに知らない日本人に親切にしてくれるのだと感動しました。このことは現地を訪れて初めて触れ合え、感じられる温かさであり、本当に参加して良かったと思った瞬間でした。

また恥ずかしながら今まで私は、中国がまるで日本の大都市東京のように発展しているとは思っていませんでした。経済成長が著しい国とはいえ、私の中ではまだ日本ほどではないと思っていました。まだ衛生面などで問題はありそうですが、日本を抜く大国になると思えば日本もまだまだ頑張らなければいけないなと思いました。また、今回は大都市を訪問したので今度は田舎の方にも行ってみたいなと思いました。中国で課題になっている貧富の格差に興味を湧きました。

現地の学生との交流からは、日本に大変興味を持っており、ドラマや映画などを私より見て知っていて驚きました。日本語も3年しか勉強していないと言っていたけれど、流ちょうに話せていて本当にすごいなと思いました。歓迎会などでは、中国の伝統文化を見ることができとても有意義な時間が過ごせました。特に「変面」は近くで目を凝らしてみても全然わからないのですばらしい秘芸だなと思いました。短い間でしたが一緒に話しながら過ごした時間はこれから人生で忘れられないものになると思います。連絡先を交換したのでこれからも連絡を取り合い、草の根のレベルから日中友好を支えていきたいです。

今回関わった人たちは日本に関心がある人だけでも、レストランの人や道で出会った人もフレンドリーであり笑顔で接してくれて、中国の反日感情はいったいどこにあるのだろうと思いました。メディアが作っているとも聞いたことがあるけれど、もしほんとうにそうなら悲しいことだと思います。ガイドさんの実体験で四川省の地震の取材をしているときに公安にしばらく囚われてしまったと聞きました。ニュースでは見たことがありましたが、真実を伝えようとしているのに圧力で制限をされることが本当にあるのだと知り驚愕でした。このように情報の偏りがあると中国には全くそうは思っていない人々もいるのに、中国人は反日感情を抱いているのだと日本人も思ってしまいお互いにいい印象を持てなくなってしまいます。何に対してもですが、日本の私たちもメディアの情報を鵜呑みにせず、今回のように自分の目で真の中国を見るなどすることが大切だと痛感しました。

私は旅行に行くことが好きですが、中国にはあまりいい印象がなかったため訪れようとはしませんでした。今回、日中友好訪中団に参加して中国に対する思いが180度変わったのでまた中国に行ったり、日本での中国に関わる活動に参加したりしたいと思います。千人交流大会や現地の学生との交流といったなかなかできない貴重な体験ができ本当に良い経験になりました。ありがとうございました。

◆今回の訪中を終えてまず思ったことは、本当に訪中団に参加することが出来て良かったということです。私はすごく人見知りで、大学生活は必要最低限の人としか関わらないようにしていま

した。しかし、ゼミの先生がそんな事ではいけないということで、夏休みの期間に自分の価値観を壊すような体験をしてこいという宿題を課しました。そこで先生が今回の訪中団の話を持って来てくれました。人見知り日本人でさえ苦手な私が、中国人しかもあまりイメージが良くない中国人と関わるなんて想像もつきませんでした。最初は絶対に行きたくないと思っていたのですが、なんだかんだあって嫌々行くことになりました。参加してみると驚くことがいくつもありました。まずは参加していた日本の他大学生の意識の違いに驚かされました。山口大学は応募した人は全員連れていってもらったのですが、他の大学は面接で参加者を決めていて、そこから意識が違ふと感じました。他には、一人で色々な国に行くことが好きという人がいたり、ついこの間まで留学していたという人がいたり、中国の大学生と関わる前に山口に住んでいると関われないような人たちと関わることですごく刺激を受けました。訪中前はやはり中国人に対するイメージはよくなかったですが、実際に関わってみて思ったことは中国人も日本人とあまり変わらないのだと思いました。私たち訪中団が中国に関心を持つと同じように中国の学生も日本に持っていたところは親近感が持てて嬉しかったです。今回関わった中国の学生は日本語を話せる人が多く、日本語が話せなくても英語を話すことが出来、日本の学生よりもレベルが大分高いと思いました。中国の大学生はみんな寮生活で、勉強のためにアルバイトをしている人はほとんどいないと聞いて勉学に対する意識の高さに驚かされました。しかし、今回関わった中国の大学生は日本に関心を持っている人たちだったので、日本に対してこういうところがよくないなどの意見を聞くことが出来なかったのが正直そこは残念だと思いました。だから、私は中国語を勉強してあまり日本のことをよく思っていない中国人といつか中国語で議論したいと思いました。この七日間は、自分の人生においてかけがえのない時間になりました。特に他の大学生と関わったことが自分にとってすごく大きくて、英語と中国語を本気で勉強しようと思うことが出来ました。そして、人見知り極力人と関わろうとしなかった私に新しい出会いが楽しいと久しぶりに思わせてくれたこの機会に本当に感謝したいです。今まで全く海外に行きたいと思ったことはなかったのですが、今回の訪中で他の国にも行ってみたいと思いました。でも、中国から帰ってきて日本以上の国はないと感じたのでしばらくは日本でゆっくりとしたいです。この七日間をどう活かすかがこれからは大事になってくると思うので、訪中団として恥ずかしくないようにこれからしっかり勉強していきたいと思ひます。

◆今回、私は昭和女子大学の4年生として日中友好大学生訪中団の一員となりました。大学一年の時から第二外国語として中国語を学び、上海で一年間留学していた私にとって、中国は元々馴染みの深い国でした。その上で今回の訪中に参加したのは、四川に行ってみたかったというのが最初の目的でした。中国は広大な土地を所有していて各地での文化が全く異なります。以前、一回だけ北京旅行をした時にも上海と異なる文化を持っていると感じていました。四川も中国のなかでは都市で、友人などから四川の話は聞いていたため、上海とも北京とも違った新しい文化を

知る事ができるのだろうという期待から参加を決意しました。

研修が始まったころ感じたのは、今回の活動は観光だけではないという事です。事前に大学側から中国の大学生との交流会を行うことや今回の訪中団は日本大学生の代表として責任をもって行動するようにと聞いてはいましたが、細かいスケジュールは知らされないままでした。北京空港に到着してようやくスケジュールを知らされ、そこで新しく感じるものがありました。今回の訪中団の目的は大学生に中国を身近に感じてもらってよく知ってもらおうという企画だと私はとらえていますが、その中でも三つの視点に分けて知ってもらおうと構成されているということです。一つ目は文化です。万里の長城や紫禁城、都江堰などを見ることで歴史を感じる事ができました。二つ目は思考と性格です。北京大学の学生、西南交通大学の学生と交流することで、現代の若者が日本に対してどのような興味をもって、彼らがどのような意識で大学に通っているのかを知る事ができました。三つ目は社会的な取り組みです。企業支援を行っている会社や都市開発施設、市民の生活向上に役立つ公共施設などを廻り、中華人民共和国という国家としてこれからより成長するために行っている努力を目の当たりにする事ができました。特に三つ目は留学中には学ぶことができない体験で、衝撃を感じるとともに中国の強大さを感じて隣国にいる日本人として恐ろしくも感じました。

今回他に大きく私個人に影響を与えたのが、他大学の学生との交流です。私の大学にも海外に行く企画はいくつかありますが、他大学と共に行くというものはほとんど無いように思われます。同じ大学の学生のみで行くと、考え方も同じで、生活の仕方も似ているところがあるため一つの物事に対して感じることはさほど変わりませんが、他大学の学生と生活を共にして、一つの物事に違った見解を見出す不思議さと面白さを知りました。それはプラス面でもマイナス面でも存在しました。言葉がほとんど通じなくてもどうにかして自分一人で意思疎通を行おうとする人もいれば、英語のみを話して、通じないたびに憤りを感じている人もいたのです。同じ訪中団に参加しようと思決意した学生のなかでもこのように違うものかと驚き、時に残念に感じていました。

中国の物の浸透力はずば抜けて高いと感じました。去年の北京旅行ではなかった自転車貸し出しのビジネスは、今年から始まって、今は中国の主要都市では普通に使われているものとなっています。これは中国の近年の経済成長の速さにもなっているのか、もともと中国人の気質として浸透しやすいのかはわかりませんが、中国の行動力の速さややる気は今回の訪中で一番影響を受けたことです。その上そのビジネスが北京大学の学生が発案したものだと聞いたときの驚きは大きいものでした。日本の学生には新しいことを始めてみようというやる気、日本社会に対しての関心、現状を変えてもっとより良いものにしたいという向上心が少ないように思えます。そのような学生たちが社会人となり、これからの日本を支えるのは、とても頼りないです。海外というと旅行や文化ばかりに目がきがち人が多いですが、もっと他国の変化に目を向け、何が起きているのかを知り、日本人として何ができるのかよく考えなければならぬと感じました。また、他国をもっとよく知る事ができるような学校環境も変わってほしいと考えました。

◆私は、この日中友好大学生訪中団に参加して、良かったと感じている。

出発する前は一週間という期間が長いように感じていたが、中国に到着してみると一週間はあっという間で、気づいたら帰国日になっていた。

訪中前の中国人の印象は、「爆買い中国人」の印象が強く、日本に来ても集団で固まって大声で中国語を話している光景を何回も見てきていたので、「なんとなく日本人よりも押しが強いのかな？」と感じていた。

しかし、実際に訪中をしてみると、押しが強いという少しマイナスな感情を持つことはあまりなかった。押しが強いというよりも「エネルギーにあふれている」という表現が正しいのではないだろうか。

雨の日に、知らない人がバスの中まで入ってきてカップを売りつけてきたのは日本では有り得ないことなので驚いたが、「中国ではこういうこともあるのか。こんな商売もあるんだな。」くらいでマイナスな感情は抱かず、中国人のパワフルさを感じた。

中国の大学生と交流をした時も、ディスカッションのテーマをいくつも提案してくれて、しかも英語という非常にレベルの高いものが用意されており、学生の方々の熱意を感じた。

北京大学という中国でも特に優秀な大学だからという理由もあるだろうが、日本の大学生よりも勉強に集中していると強く感じ、私たちも頑張らなければならないとやる気を与えてもらった。

北京に滞在中に日本語ボランティアをしてくれた北京第二外国語大学の方々も、私たちに積極的に日本語で話しかけてくださり、中国語がわからない私も楽しく中国の学生の方と話すことができて嬉しかった。学生の方々の積極的な姿勢に触れて、私もこの機会に仲良くなった中国人の方々と中国語で話したいと思ったので、中国語を勉強していきたい。

このような経験を通して、今までの中国人に対する印象は変わったとはっきり言える。副会長が何度もおっしゃっていたように、今の日本人は中国に対してよい印象を持っていない人が多数派なのだろうと、感じています。テレビニュースでも中国に対してフラットではない時もあるように感じます。

日本人は中国を含むアジアより、ヨーロッパに対する憧れや興味を持っているんだと、友人と話していて実感します。

ヨーロッパより隣国である中国の方が情報を得る機会が多いのに、この状況はおかしいし変えていかなければならないと思う。

将来就職したときに、仕事で関係をもつ外国は中国が最も多いし、今後も先進国として中国は成長していきだろう。

私はこの一週間を通して中国の印象は変わり、もっと中国について知りたいと感じた。この気持ちを近くにいる家族・友人に伝えることが、小さいが私にできることではないのだろうか。

今回、一緒に中国を訪れた大学生約100人も中国に対して興味を持ったと思うので、一人一人が思いを伝えれば、少しずつだが中国に興味を持つ人は増えるだろう。

私は今後大学の卒論などを通して、中国について学びを深めていきたいと考えている。
私のような人が今後増えていって欲しいので、中国についていつ聞かれても良いように、大学を卒業しても中国とかかわりを持っていきたい。

◆私は訪中前中国に対してマイナスなイメージがありました。日本で見ると中国人観光客のマナー問題や、中国製品に対する不信感が国全体に対するイメージを悪くしていたのだと思います。また、政治面でも中国と日本の関係はあまりいいとは言えません。日中の国交が正常化してから45年という長い月日がたっていますが、いまだに日中の友好関係がしっかりと築かれているという印象は受けません。また、出発前にお互いの国の印象が良くないと答える人が日本でも中国でも8割もいるというデータを見てからは、中国の人も私たちと同じように日本に対していいイメージを持ってないのではないだろうか、本当に友好的な関係を作っていけるのだろうかという不安もありました。

しかし、実際に中国を訪問し北京大学、西南交通大学の学生さんとお話してみると、ほとんどの学生さんは日本に対してマイナスのイメージではなくプラスのイメージを持っていることがわかりました。学生さんが日本に興味があるということは実際に中国に行って話をしてみないとわからなかった事だと思います。この事実を自分で聞くことができたのは今回の訪中団の大きな成果の一つだと思います。北京大学では日本と中国のアニメーションについて話すことができました。日本のアニメは中国でも放送がされているため人気があることや、中国のアニメを日本にも広げようと頑張っている会社があることなどそれまで知ることがなかった中国国内での日本のアニメ産業について知ることができました。あらためて、日本のアニメ産業が国境を越えて愛されていることを実感し、より多くの人に楽しんでもらえるように英語や中国語などでの字幕や各国のアニメーターの育成などより国際的な事業展開を行うことでアニメ産業は成長していくと考えました。

この7日間は私の人生にとっても大きな影響を与えました。まず、先入観ばかりにとらわれるのではなく、実際に会って話をすることで相手の本当の姿を知ることができるということを実感しました。中国人は反日感情のある人が多いという先入観がありましたが、実際に会って話した学生さんは日本に興味がある人が多かったため、この先入観は間違っているということに気づきました。もしも、今回のように中国の学生さんと交流する機会がなければこの先も中国に対してのイメージは良くないままだったと思います。イメージが完全に良くなったわけではありませんが、少なくとも訪中前よりも中国に対して穏やかに考えられるようになりました。もう一つ私の人生観を大きく変えたことがあります。それは、他大学の学生との交流です。この訪中団にはさまざまな大学が参加していましたが、もしも、この訪中団で出会わなければ一生会えなかっただろうと思う人とも知り合うことができました。同じ年代の他大学の学生との交流の中で、自分では考えつかないような視点から物事を見ている人がいたり、オリジナルの考えをしっかりと持ってい

る人がいたり、学生同士の交流がとても刺激的でした。この二つの点から今回参加した訪中団は私の人生にとって意味のある7日間だったといえます。

◆私は、8月26日から9月2日まで、日中友好大学生訪中団の一員として、初めて中国を訪問しました。このプログラムは日中国交正常化45周年を記念して開かれたもので、日本と中国の大学生が交流を通して相互理解を深め、中国の生活文化に直接触れ、より客観的に中国を理解することを目的としています。

大学でこの大学生訪中団の募集を知り、応募しようと考えたのは、友人が中国の大学に通っていた為です。この友人を通して、中国に関心を持ち、自分の目で本当の中国を見てみたい、中国は自分の考えているような国であるのかを確かめてみたいという気持ちが強くなりました。さらに、自己負担が1万円というのも魅力でした。書類選考の結果、20名が選ばれ幸運にもそのひとりになることができました。

8月26日、初めて分団のメンバー同士が顔を合わせて事前研修を行った後、成田空港近くのホテルに一泊し、8月27日の午後に最初の訪問地である北京へ向かいました。今回訪問した都市は、北京と成都でした。北京では、万里の長城、北京大学で千人交流会の参加、故宫博物院見学を行い、成都ではパンダ基地、都江堰、成都規画館や杜甫草堂などを見学しました。

北京に着いた初日から、中国独特のニオイに苦しめられ、喉がとても痛く辛かったです。その痛さも忘れられるくらいこの参加した1週間は、あっという間に過ぎてしまい、毎日が新しい発見と学びの連続で、とても密度の濃い時間でした。しかし、今回の訪中でとても印象に残っているのは同世代の大学生との交流でした。北京では、北京外国語大学の学生と北京大学の学生と英語でディスカッションを行いました。私たちは日本のアニメは中国で多く支持されてきたが、近年日本のアニメ産業は鈍化し続けていることについて、今後その業界ができることはなにか、たくさんアイデアを出し合いながら考えました。日中関係という大きなテーマについてお互いの意見を交わすことができ、とても貴重な体験をすることができ、とても嬉しかったです。

訪中前は、正直、私は中国という国に対してあまり良いイメージを持っていませんでした。日本に観光に来る中国人はマナーがとても悪いという印象しか抱かず、メディアの情報から多くの中国の人が反日的だと考えていました。

しかし、中国の大学生と交流してみると彼らも私たちと同じ趣味や悩みを抱えていて、とても身近な存在に感じました。お互いの国の人気の芸能人についてお話しした際は、とても楽しく、中国人はとてもフレンドリーで積極的な人が多いと思いました。中国の大学生との交流を通して思ったことは、メディアの力によって相手国のイメージを作り上げ、本当にその国の実像ではない姿を世論に見せてしまう昨今ですが、交流していくことでその誤解を解くことはできるし、良い関係を築いていけるのではないかと同時に思いました。

今回この訪中を通して強く思ったことは、ステレオタイプや偏見を持たずに、私たち若者が今

後日中友好のために、積極的に交流し続けることがとても大切だということです。中国は私にとって遠い国からとても身近な国に変わりました。私は今回実際にみた、本当の中国を多くの人に伝え、また、日本人の中国に対するイメージを良くする為に、現在冷え込んでいる日本人の中国旅行を盛り上げる必要があるのではないのかとも思いました。今後の日中友好のために、学生である私たちが今できることはなにか、これから深く考えていきたいと思いました。

◆私たち昭和女子大学は事前学習として、中国からの留学生の話の聞いたり、中国との近現代までの歴史を調べておいた。

中国に行く前に聞いていた話で、大学生の話題やトピックスは日本と共通だということや日本で馴染みの深いインスタグラムにLINEやTwitterが使えず、以前私が留学や修学旅行で行ったフィリピンやオーストラリアで出会った人々と繋がれたGmailにFacebookというアプリまでもが使えないことに驚いた。韓国がKakaoTalk、日本がLINE、中国はwe-chatというアプリでコミュニケーションツールが独自の国のスタイルに合わせて発達していることに、興味を持った。

だから、私は文化的背景や歴史的な視点からも現代の生活を見ていきたいと感じた。それは例えば流行りのものであったり現地での人々の日常や日々の活動から見出すことが出来るだろう。なぜならば、その流行の発端や起源を辿れば日本と違ったモノなのか、なにか似通ったモノがあるのかを発見することが出来る、さらに人々の作法には法律や政策、伝統的な文化や、中国での常識に歴史なども表れる。食事の作法一つとっても、箸の違いだったり、食事のマナーだったり、食卓に並ぶ食事も、日本とは異なるだろう。

注意点として、トイレトペーパーがなかったり、自販機がなかったり、渋滞が酷く、胃腸薬を持参しておくべきだという話を聞くことが出来て良かったと思う。なぜなら、文化の違いのギャップに現地では驚かされる前に、心構えや準備に対策ができるからだ。実際に現地での渋滞を体験することも出来たので私としては良い経験をさせてもらえたと思っている。

私は今回の中国との交流で、中国の文化や生活を見ていきたいと思って行動をした、日本の文化や生活様式についても伝えることができたらいと考えていたので積極的に現地の大学生に喋りかけるなどして日本の文化を発信することを心掛けた。私は特に昭和女子大学の生活や、大学自体のことを積極的に発信していきたいと思っていた。2019年にテンプル大学で交流を行う昭和女子大学について知ってもらうためにも、作品や大学生活について伝えていきたいという意気込みで望んだ。中国語は未習得だったが、私の所属する環境デザイン学科で作成した作品や先輩方の作品など、デザインやアートを通してコミュニケーションを取り、作品を通じてコミュニケーションを取ることができた。それは何も私が中国語でコミュニケーションを取らないと言っているわけではなく、未習得の私でも伝えたいことを伝えるツールとして自分の作品だったり、環境デザイン学科で学んだことを使えたという証拠だった。

作品の写真を見てもらう機会や日本のアニメ文化について議論する時間があつたので、私とし

ては大変有意義な時間となった。

もちろん、お土産や街並みも素晴らしいもので、たいへん楽しく時間が過ぎるのはあっという間であった。

現地での体験は事前に学習していたからこそ、私の中で実になるものとなったのだと思う。

今後も中国へ旅行でもボランティアでも留学でも、姿、形を変えても私は接していきたいと思う。こんなにも素晴らしい体験をさせていただける機会を頂き、たいへん感謝致します。また、日中友好訪中団の募集がある際は是非とも応募させていただきたいです。

◆私は元々中国に対して漠然とスケールが大きいというイメージを持っていて、特に今回訪れる北京と成都には多くの企業が集まり栄えた場所だろうというイメージと同時に大気汚染が少し気がかりでした。日本や他の国で使うようなソーシャルネットワーキングサイトへのアクセスに中国からは制限がかかると知ったせいで、中国人は国民同士でのコミュニケーションにばかり関心が向いているのだろうかとも思っていました。

現地へ行って自分の目で中国を確かめてからの印象も大きくは変わっていないのですが、街の様子や現地の人とのやりとりから中国で今どのような意識の変化が起きているのかを学びました。街を見ていたときに私は緑化を促す広告をたくさん目にしました。そのことを中国人の学生に話してみたら、中国はようやく環境問題への意識が高まってきたところだと言っていました。成都へ行って規画館の見学をした際には、都市の鉄道網の充実を計って車での交通量の多さを解消したいと計画している最中であることが分かりました。ジオラマや映像作品で解説して頂いたのですが、足元に広々と敷かれた成都のジオラマがキラキラ点灯しながら鉄道や道路の線を示す様子はスケールの大きさや未来への期待度を示すようでとても思い出深かったです。

滞在中にあったショッキングな出来事のひとつとしては、名前に「国際」と冠した北京のホテルで英語が全く通じなかったことが挙げられます。他にも売店へ行った時などにちょっと英語でコミュニケーションを図ろうとしたら困ったような迷惑げな顔をされてしまい、日本語の全く分からない中国人とはスマートフォンの翻訳アプリで打ち出した文章を用いて会話を試みました。確かに街で広告などを眺めてもほとんどアルファベット表記はなく、アルファベットそのものに困惑される方もいらしたのじゃないかと思いました。カタカナを使って外来語も積極的に取り入れ元ある自分たちの言語と並べて使う日本語とは明らかに違う性格を持った中国語にはある種の頑なさ、と言えるような他の言語が立ち入る隙のなさを感じます。その一方で北京の街で偶然話しかけた中国人の少年(恐らく 10 歳くらい)には英語が通じました。心残りなことにその時は道を尋ねることで頭がいっぱいになっていて、少年が英語をいつ学んだのかなどを聞き損なっていました。日本の英語教育がそうであるように、若い世代には少しずつ英語が浸透しつつあるのかも知れません。

また、現地の大学生が日本のどんな文化に関心があるのかも彼らと話すなかで知ることが出来

ました。大学生同士でのディスカッションのテーマはアニメ産業についてで、私も関心の高いテーマだったため積極的に参加できました。アニメ産業が発展する一方で稚拙なものであると批判的な見方があったり、オタクに対してネガティブなイメージが強かったりと人気の背景にあるマイナスイメージも日本で言われるそれと似通ったものだと感じました。ディスカッション内容の要約を示す画用紙の余白に絵を描いても良いと言われて私の大好きな「名探偵コナン」のキャラクターを描いたら思いの外 学生に喜んでもらえてとても嬉しかったです。

1週間ほど中国に滞在して日本にいただけでは知り得ないことを知って、文化的にも歴史的にも価値のある場所を多く見学できて、とても有意義な時間を過ごせました。ここで得た繋がりを無駄にせず、この経験を足掛かりにもっと隣国への理解を深めて自分の視野を広げていきたいです。

◆これから日中友好大学生訪中団に参加した感想を述べます。今回の訪中団としての参加が決まり、中国の文化や歴史について事前学習を行ってから当日を迎えました。しかしやはり日本にしながら情報を得て中国に関して勉強することも大切ですが、実際に行ってみて肌で感じることは比にならないのだという実感を持てたことがこのプログラムを通して改めて強く感じる事ができました。日中国交 45 周年を記念して中国側に招待され、一週間を自分の負担ほぼなしで過ごすことができるという普通では考えられない素敵な機会をいただけたことに感謝の気持ちを忘れず、自分の滞在の振り返りを始めます。

まず、最初に 8 月 28 日、31 日、9 月 1 日の夕食での交流についてお話しします。それぞれの夕食会で自分たちのテーブルに何名か中国人の学生さんたちが座りました。その中には日本語を専門に勉強している学生さんも多く、会話は日本語で行うことが多かったです。その学生さんたちは日本語を大学に入ってから勉強し始めたという人が多く、自分の主専攻にしているとはいえたった数年で日本語を母国語としている私たちと流ちょうに会話できることがすごいと思いました。ましてや日本語は世界中の言語の中でも難しいといわれている言語であるにも関わらず話すことができるのは中国の学生さんたちの勉強の熱心さが伝わる瞬間でした。日本語が話せない学生さんも英語は話せる人がほとんどで、日本よりも第二言語習得に力が入っているように感じられました。交流会の中で、私たち日本人学生がパフォーマンスをいくつか披露しました。私は東京大学の皆さんと一緒に SMAP の“世界に一つだけの花”を合唱しました。SMAP は中国内でも人気の歌手のためこの歌を知っている人もいるだろうと思っていましたが、多くの中国人の方が知っていて手拍子をしてくれたり手を振ってくれたり、一緒に口ずさんでくれたため日本の文化は年代や性別を問わず、浸透しているのだなと思いました。最近の中国人の日本文化についてのイメージはアニメや電化製品の爆買の印象が強くありましたが、同世代の子に聞くとジャニーズやアイドル、今日本で人気の俳優や映画の文化についてもよく知っていて日本人以上に日本について興味を持っているように感じられました。とても勉強熱心で気さくに話しかけてくれる

方ばかりで、楽しい時間でした。

次に一週間の中でいろいろな場所に訪れ、見学をした中で私が受けた中国の印象についてお話しします。私は中国の本土に行くのは今回が初めてでした。このプログラムで私は以前高校の修学旅行で台湾に行ったことあったため、本土と台湾はどのような差があるのかを見ることを一つの大きな目的にしていました。そして私が行ってみて思ったことは、どちらの国も自分が想像していたより良い国でした。今回訪れた万里の長城や故宮博物院、パンダ基地など中国を代表する場所では中国の長い歴史や文化を実際に目で見て感じることができました。特に故宮博物院は台湾でも訪れた場所で、自分の中の記憶と重ね合わせながら見学できました。千人交流大会や夕食会などでお話をする中国人の方々はみんな私たちを歓迎してくれていて丁寧に接してくれました。私は台湾のほうが親日なイメージがあり中国には普段耳にするニュースや勝手な固定観念で少し怖いイメージを持っていましたが、それは全くの間違いで、実際に会って話してみないとわからないものだと深く感じました。私はよく第一印象で人を判断してしまいましたが、自分で決めつけるのではなく近づいて相手を理解しようとするのがコミュニケーションには必要だとわかりました。

今回の滞在では日中友好協会の方々をはじめ一緒に参加した約 100 人の大学生など日本人の間でも多くの交流があり、日々交流の大切さも学びました。中国の人と交流する以前に日本人と交流ができる必要があり、団体行動をするうえでの協調性を今まで以上に鍛えられました。貴重な経験をさせていただいた為、無駄にはしないよう、自分が第二外国語として勉強している中国語をさらに磨き、今回出会った人たちの縁を大切に日中間の交流に貢献していきたいです。いつかまた自分で訪中したいと思います。ありがとうございました。

◆訪中前は、中国に対して接点がほとんど無い環境でした。私の祖父は、哈爾浜で育ったようですが、戦時下で良い思い出が無いのか、あまり多くを語ってはくれたことはありません。それどころか、中国の反日活動や異物混入のマスコミ報道の影響で、どちらかと言うと、中国に対し良い感情を持っている人は、身内の中にほとんどいませんでした。そういった環境に慣れていたからか、たいして中国人の方と話したことも無いのにもかかわらず、私も中国に対し、あまり良い印象を持てずにいました。

しかし今回の訪中を通して、私の「中国観」は変わりました。今までは「なんとなく」で良い感情を持てずにいました。しかし、はっきり文化や風土の違いを肌で感じることで、そもそも日中での常識・価値観が異なるのだと認識しました。

多くの文化の違いを感じましたが、その違いのほとんどが中国の「幼い頃からの競争文化」に通じていると私は思いました。今回の訪中では、中国の一流大学の学生と交流する機会が多ありましたが、やはり競争下で幼い頃から過ごし、苦勞したという話を何度も耳にしました。中でも印象的な話だったのが、中国の学生がアルバイトをする文化がないということです。日本では

ほとんどの学生がアルバイトをしているので、驚きました。基本的に学生は親の仕送りで、生活費や交際費を賄うようです。日本の学生が週に10~15時間程アルバイトすることを話すと、逆に中国学生に驚かれてしまいました。子供の学校生活を親が万全体制でサポートをするのには、中国では子供の出来(有名な大学や企業に勤めること)が、将来の家族の居住権に大きく関わっているからのようです。だから家族一体となって、親は子供に投資を、子供はそれにこたえる為に勉学を、という環境に耐え忍ぶことが出来るのだという話でした。とてつもないプレッシャーが競争文化の勢いを加速させているのだと思いました。またこれが、著しい中国の経済成長の理由の一つだとも思います。

そういった環境であるからこそ、中国人はどんな時も周りに流されずに自己主張をきちんとするし、日本と比較して、大雑把に見えるのだと私は考えました。実際に交流してみると、彼・彼女たちがどんな想いで生活しているのかを知り、私もより勉学や家族のために励まなければとハッとさせられました。また、学生交流やレストランスタッフの対応では、ところどころ日本と比べると無愛想に見えたのは事実ですが、実は遠くで気を利かせてくれていたのに気づき、不器用な優しさ・温かさを感じたのも事実です。

中国人の大雑把な行動、そこばかりをクローズアップしがちな報道が、多くの日本人の中での「中国人は自己中心的だ・マナーが悪い・適当だ」というような中国人像が作られているのだと思います。たしかにそのように見受けられたことも、今回の訪中ではありました。日中では常識や重ねてきた風土がまるっきり違うことなど、より根本的な価値観や背景を認識すると、中国人がただ単に自己中心的であるわけではないということが分かりました。

振り返って見ると、隣国という近い環境であること、容姿も似通っていることから、なんとなく価値観も似ているだろうと決めつけているところが、かつての私にはあったかもしれません。日本の価値観から、中国人の言動の報道を見て、悪い印象を持っていました。中国が隣国であろうと、まるっきり違う文化を学ぶ、真新しい気持ちで接することが、相互理解に近づく一手だと思いました。

私の通う大学でも中国人留学生がおり、たびたび日本文化交流の手伝いをしています。いままでは、日本の文化を一方向的に教える立場でしたが、今後は、本来の交流、相互理解の達成が少しでも叶うように、取り組みの姿勢を変えていこうと考えています。

◆訪中前は隣国とはいえ、中国のことを詳しく知りませんでした。最近経済発展が著しいという漠然としたイメージしか持っておらず、今回の訪中を通して多くのことを知ることが出来ました。

中国の大学生と交流することは、自分で旅行するだけでは体験できないことであり、良い経験となりました。大学で日本語を専門として学んでいる大学生の方や、日本に興味のある大学生の方と話すことで、より日本の魅力を感じる事が出来ました。日本語をなぜ学ぼうと思ったのか、という問いには様々な答えを貰いましたが、多くの人が日本の文化について興味があるという点

で共通していました。日本のアニメを知っている人は多く、日本はアニメ文化が発展していると再認識しました。また、各大学の発表の時に話を聞いたのですが、日本の伝統芸能にも興味がある人が多いようでした。万葉集が好きだという方もいて、日本を様々な点から見て、興味を持って貰っていることに嬉しく思いました。私は、国際化とはお互いの国のことを理解しあうことだと思っており、今回の交流で国際化の一步を踏み出せたのではないかと感じました。

多くの世界遺産や、観光スポットを回ることが出来たのも良い経験になりました。私は大学で歴史を専門に学んでいます。長い歴史を持つ中国を実際に感じ、知識を増やただけではなく、中国を身近に感じる事が出来ました。今まで本の中の知識でしかなかったものが、実際に見たことにより自分の知識になったように感じました。また、北京創業公社や青少年活動センターを見学させて頂いて、中国の経済社会や現状を少し理解することが出来ました。

今回の訪中で、自分がいかに中国について知らないのかが分かりました。中国について事前学習はしていましたが、実際に見ることが一番大切だと思いました。今回の目的である「相互理解」を少しは達成できたと感じました。中国の大学生が日本について興味を持っていること、中国の文化、中国の歴史など訪中前より知ることが出来ました。訪中前は日本と中国の関係はあまり良くないものだと思っていましたが、実際は親切にしてくださる方も多く、一概に関係はあまり良くないとは言えないのだと思いました。ぜひ、日本に興味を持っている方々に日本に来てもらいたいと考えます。実際に行かなくては分からないことも多いので、私たちが説明していただいたように、日本について知ってもらえるようなことをすれば、相互理解に近づくのではないかと思います。関係が良くないというマイナスイメージを持たずに、互いの国についてより知っていきたいと思います。この七日間で多くのことを得ることが出来、この経験をした私たちこそ日本と中国の関係良好に向けて出来ることから始めていけば良いと感じました。私はまた中国に行きたいと感じ、多くの中国人が日本に来て、日本の魅力を知ることが望みます。これからの日本と中国の関係を良好にするための架け橋になっていきたいと思いました。

◆日中友好大学生訪中団大学生大使として、今回初めて私は中国を訪れました。北京と成都で様々な文化体験をさせて頂き、現地の大学生などと交流することで、今もなお発展し続ける中国を体感した1週間でした。

私は中国に行く前は、大気汚染などの公害問題や中国共産党の弾圧、格差社会など様々なニュースを耳にしていた中国に対してあまりいいイメージはありませんでした。そんな中、ある企業のインターンで出会った中国人の友達ができたのをきっかけに、私の意識は変わりました。自分自身で見てもないのに、偏見を持つのは自分の視野を狭めていると感じ、今回の日中友好訪中団プログラムに参加しようと決意しました。

実際に今回のこのプログラムに参加してみて、私の中国に対する意識や理解が大きく変わりました。現地交流した学生はととても気さくで積極的に自分の意思を明確に持ち、発信する人が多

いと感じました。内的と言われる日本人に対し、中国の学生の積極的な姿勢は見習うべき点であると思いました。今回の訪中の中で、特に気になったことが一つあります。中国の学生と話している中で、多くの若者が日本のアニメや文化に関心寄せていてくれることを多く感じました。それと同時に、中国で日本の文化などに触れる機会やコンテンツが少ないといった声も聞きました。中国ではLINEやFacebookなどのSNSが中国政府の規制がかかり、使うことが出来ません。グローバル化が謳われる世界の中で、やや閉鎖的ともとれる中国政策について、現地の人々はどうか考えているのか話しました。出会った中国の学生はみんな明るく、こういった方法もあると試行錯誤していました。日本に対してあまり良くないイメージがあるのではなく、日本や世界の良い文化などを知る術が少ないのが一つの課題だと思いました。

私は日本からのお土産で東京タワーや上の動物園のパンダなど、日本を象徴するものを折れる折り紙をプレゼントしました。中国の学生からは中国の繊細な細工があしらわれた本のしおりや、パンダのぬいぐるみをいただきました。中国の伝統料理や生徒では視線料理をいただき、食でも中国を体験することが出来ました。

公益社団法人日本中国友好協会(以下、(公社)日中友好協会)のホームページには、この日中友好訪中団の意味を、「日本の大学生が中国の大学生と実際に交流することで相互理解を深め、中国の生活文化に直接触れ、より客観的に中国を理解することを目的とする。」とありましたが、今回私はそれを達成したと思います。日本中国友好協会副会長の宇都宮徳一郎さんのお話のなかで、「百聞は一見に如かず」という中国の古い言葉通り、中国の若者たちと触れ合って交流し、今回の訪中を家族や友人と分かち合うことを望んでいる。今後、両国の大学生が手を携えて交流し、中日友好の懸け橋となれるような一歩になれることが望ましい。」とありました。

私達のような若者がお互いに歩み寄り、偏見などを持たず、自分の経験をもって理解することが日中友好の一歩になると感じました。さらにこれからの日中関係がさらに良くなることを、強く望んでいます。ここで出会った友人たちとはこれからも交流を続け、私自信もこの経験をいかしていけるように努力したいと思います。

◆私は今回日中友好大学生訪中団に参加し、初めて中国本土へ行きました。私は大学2年時にアメリカへ留学し、その際によくチャイナタウンへ行ったり、中国系アメリカ人の友人ができたり、香港からの留学生と仲良くなったりしたことがきっかけで、中国へ関心を持つようになりました。留学するまでは、中国は日本とは全く文化の違う国であるという認識でしたが、彼らと交流していくうちに、中国の文化は日本とかなり似ているのではないかと思うようになりました。留学から帰国後も、国際交流で知り合った中国人の人とよく遊ぶようになったり、大学内の中国人留学生と交流するようになり、更に中国に対して興味を持つようになりました。彼らから中国の話を聞けば聞くほど、日本のマスコミが言っている中国とは全く違う中国像を抱くようになり、自分の目で実際の中国を見たいと思うようになりました。

実際に今回の訪中団で中国へ行った際の第一印象は、空港へ着いた瞬間から我々日本人を手厚く歓迎してくださったということです。正直、中国の人々が日本に対して良い印象を持っているとは思っていませんでしたので、空港で横断幕を持って迎えてくださったというのが衝撃でした。反日感情を持つ人が多いと思っていたので、露骨に日本人を歓迎したら周りの中国人からよく思われないのではないかと心配していましたが、一緒に記念撮影までして終始笑顔で歓迎してくださり、とても嬉しかったです。手厚い歓迎は初日だけでなく、毎日感じました。毎日、様々なレストランで食べきれないほどの豪華な食事でもてなされ、有名な観光地へ連れて行って頂き、現地の学生とも交流し、本当に充実した時間を過ごさせていただきました。自分がこんな好待遇を受けているような人間なのかと、慣れない歓迎に戸惑いを感じるほどでした。このような中国側の手厚いもてなしに、日本との関係良化への熱い思いを感じました。

現地の大学生と交流した際も、日本語専攻とはいえ、日本人と変わらないほど流暢な日本語を話す学生が多く、語学レベルの高さに驚きました。敬語も使いこなし、丁寧な日本語を話している中国人学生の姿に、むしろ私の方が正しい日本語を使わなくてはという思いに駆られました。また、語学のみならず日本文化についても詳しく、海外の学生がこんなにも日本のことを勉強しているというのが不思議な感覚でした。私は、訪中団へ参加する前に中国の歴史を調べたくらいで、中国について知らないことが多かったのもっと中国のことを知らないといけないと感じました。

日本では、テレビやインターネットで中国を批判するようなニュースばかりが報道され、実際の中国がどれだけ発展していて、どれだけの影響力があるかを知らない人が多いと思います。私自身、北京のイメージは大気汚染、成都のイメージはパンダくらいしかなかったもので、実際に行って、テレビで見ていたような大気汚染は稀であること、成都是開発が進んでいる真っ最中で高層ビルやマンションが次々と建設されていることを知りました。また、どちらも大都市というだけあり、道路や建物がちゃんと整備されていて、土地も広大なので道路も広く、東京以上に綺麗な街だと感じました。中国の発展を見れば見るほど、日本のマスコミがこのような中国の発展している部分を流さず、領土問題など批判する部分ばかりを流すことに違和感を覚えました。中国の良い部分を日本人がもっと知っていけば、中国に対する見方も必ず良くなると思います。

この訪中を終えて、私は中国への関心が更に高まりました。マスコミが流す中国とは違う本当の中国を自分の目で見ることができ、偏った見方が解けました。ただ、一つ残念だったのは、私が中国語を話せないで現地の人と中国語で話すことができなかったことです。買い物をしてもし何を聞かれているのか分からず、中国語が話せればと思う場面が多々ありました。少し中国語を勉強していましたが、今度中国へ行く際は中国語で会話ができるように、これからもっと中国語を勉強しようと思います。

◆私は5歳から習字を習っている。母親の友だちからの勧めであった。はじめたては筆をたてに持って書くことすらできないし、始筆は45度だと何度も注意をされた。ある一定の基準を越えると段級位もなかなか思うようにあがらない。それでも週に1日およそ2時間、正座をして書に向き合う時間が好きであった。今年で14年目、現在は高校生と大人の初歩的な技術まで教えることのできる高等師範を取得し“翠初”という念願の雅号も師匠から頂いた。また、習っている習字教室団体のお手本や学校で用いられる教科書にはそれぞれの作品の作者や成立年、読み方はもちろん、書風や特徴、時代背景や解説が詳しく丁寧に説明されていたため、該当ページを読むのが毎回の楽しみであった。今思うとそれが私の漢文・漢詩に対する興味の持ち始めたきっかけになり、「書道」を通じてもっと中国について勉強したい、願わくはいつしか自ら訪中をして、素晴らしい文化を生んだその土地の空気と雰囲気を感じることが夢となっていた。

大学に入学して、習字で培った力を学校教育にも反映したいと国語科に加え書道科の教職科目履修を決め、第二外国語は第一希望の中国語を無事に選択することができた。自分の思い描いていたかたちの希望が通り、満足していたうえでの日中友好大学生訪中団募集のアナウンスがかかったので、選考に合格したら日本の大学生の代表であるという自覚と責任を人一倍に持ち、現地では積極的に行動をして学べることを吸収しようという心構えでいた。訪中前には数回国際交流センターの先生方とメンバー全員とで顔合わせ、打ち合わせを行い、事前研修として理事長先生や中国人留学生のお話を伺った。東アジアの歴史や日中関係、自国の文化や歴史については図書館で本を読み、高校で世界史を選択していた友だちに教科書を借りて復習をした。いま日中友好大学生訪中団として訪中する意義や日中国交正常化45周年の軌跡、中国の現状や生活スタイルなどの基礎を予習しておいたことでモチベーションが上がり、訪中時には段階的な学習に努めることができた。

今回、日中友好大学生訪中団として生活した1週間は私の人生経験の中で思い出深い貴重な時間となり、将来にもつながる十二分の成果と成功をおさめることができた。活動内容の中で心に残ったものとして、最初に万里の長城へ登ったことがあげられる。テレビや映像で何度も見たことのあった光景がいざ目の前に映ると、思わず驚きと興奮で声が出てしまった。団体行動のため集合時間が設けられているが、せっかく来たのだからと友だちと一緒に登れるところまで登った。また、面白いことに階段は一段として同じ幅のものがない気がした。とても大きな一段も小さな一段も一つひとつ歴史を噛み締めながら登ることを意識していた。次に北京大学で行われた千人交流大会では福田元首相からのビデオメッセージをはじめとした様々な方々による日中友好のお話を伺い、双方の学生代表同士の誓いが交わされた。日中国交正常化45周年の節目をお祝いすべく、未来への架け橋ともなるよう決意を新たにすることができた。最後に、成都で見た変面は、私自身存在自体を全く知らずパフォーマンスに終始驚きを感じていた。衣装や音楽など隅々から中国の伝統がにじみ出ていた。音楽は帰国した今でも頭に残っており、誇りに満ちた歌詞と気分が上がるメロディーがとても気に入った。お面の一部に日本のアニメキャラクターが描かれており、そこにも日中友好が感じられた。

日中友好大学生訪中団の一員として学んだことは、日本の学生も中国の学生もお互いを尊重しあっていたということだ。間違いなく今後の日中関係の要となる私たちが率先して努力を重ねていけば、必ずや本当の意味での日中友好につながると考える。現地で歌った“朋友”の歌詞の意味も忘れず、今後の生活に活かしていきたい。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった北京市人民対外友好協会と公益社団法人日本中国友好協会の皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

◆今回日中友好大学生訪中団の一員として人生で初めて中国を訪問しました。日本人の中国や中国人に対するイメージを調べるとマナーが悪い、空気が汚染されている、貧富の差が大きいなどネガティブなイメージが多いように感じられます。私はアメリカ留学を経験しており、そこで各国の人々と知り合いました。その中に中国から来た方もおり、中国人や中国に対して悪いイメージを持つことはありませんでした。メディアではマナーが悪いと取り上げられることも多いですが、それは一部の人であると思います。私が出会った中国人の方々は皆さん優しく、規律をしっかりと守っている方々でした。北京大学、北京第二外国語大学、西南交通大学の皆さんと交流をしたのですが同じ大学生でありながらも中国の学生の方は目的意識が高いことが分かりました。自分が将来何をしたいのか、何のために勉強をするのかが明確であるように思います。私は彼ら彼女らと交流する中で自分が明確な目的を持たずに大学で学んでいたように感じられました。私の大学生活は残り半年ですが、卒業した後、就職してからどうなっていきたいか、どういった活躍をしていきたいかを考えた上でこの半年を過ごしていきたいと彼らの姿を見て考えるようになりました。中国を訪れ、中国の人々と関わることで、日本人の持つ中国人のイメージとは違う中国人の姿を見ることが出来ました。百聞は一見に如かずという言葉があるようにどれだけメディア等から情報を得ても実際に訪問して現地の方々と関わる以上にその国や人々を理解する方法はないと分かりました。

私は今年就職活動を経験したのですが、その中で日本の企業は中国と密接に関係していることが分かりました。日本の経済は中国があつてこそ成り立っているとさえ感じています。私は卒業後に医療関係の商社で勤務する予定です。その会社は中国とも取引があるのですが、訪中以前は英語が使えれば問題はないという考えであり、中国語を学ぶ意欲は一切ありませんでした。しかし、中国の方々と関わり、訪中の期間は毎日中国語に触れていたことで少しずつ中国語を理解し始めました。中国の学生との交流では日本語や英語を用いて会話していたのですがもっと彼らと関わっていきたいと思うようになり、中国語を学ぶ意欲が湧いてきました。中国語は早口であるため中国人は怒っているように感じる部分があると思います。実際に中国に行って何を話しているかは分からないけど怒られているのかもしれないと感じる場面がありました。しかし、中国語を学んでいた友人はそうではないと言っており、言語を学ぶ事で感情の伝わり方も違つたと分かりました。誤解が無いように関わるためにはお互いの言語の特徴を理解することも大切であると分

かりました。この訪中を通して中国語を学びたいという気持ちが生まれました。先ほどこの先の大学生活は目的を持って生活していきたいと述べました。中国語を学ぶという目的を持って、そして中国語を習得してから社会に出たいと考えるようになりました。ビジネスの場で中国とより深くかかわり、日中友好につなげていきたいです。

◆今回の訪中は、中国に関してより興味を持つようになりました。訪中前は歴史のことや政治関係のことで、日中の間には様々な問題がある。中国人の中には、日本人のことをあまり好んでいない人もいるだろうと思っていました。しかし、この訪中で私は中国に対する思いが変わりました。万里の長城で写真を撮ろうとした時、中国語がわからなかった私は英語で話しかけてみたのですが、相手に無視されてしまいました。私は中国語を話せないことにとっても心を痛みました。しかし、先ほど話しかけた人が戻って来てくれました。私たちのために、英語か日本語を話せる人を探してくれてたみたいです。その時、中国人の優しさに触れました。その後も、中国人は写真を撮ってくださったり綺麗な場所も教えてくれました。現地の人と交流できたことは私にとって、とても貴重な体験でした。北京大学、北京外国語大学そして西南交通大学の学生さんたちと交流したことで、日本に対して興味を持っていることにも気づきました。日本人の学生さんもここ最近、中国語を学ぶ人が多くなってきましたが、残念ながらほとんどの学生さんは読むことと書くことは出来ても、中国語を話せる人は少ないです。しかし、日本語を勉強されている学生さんはとても綺麗な日本語を話されていたので、私たち日本人の学生たちはとても驚きました。たとえば、日本語を専門として勉強されているのではなく、ただ日本が好きという理由で日本語を学んでいる学生さんもいました。こんなに多くの中国人の学生さんたちが日本の文化や歴史そして言語までも興味を持っていることは知りませんでした。それ以上に、日本のことを好んでいる中国人に対して、とても嬉しい気持ちと感謝の気持ちでいっぱいになりました。この訪中を機に、私はより中国の歴史や言語を学ぼうと思います。北京と成都に行ったとき、トヨタ、日産、マツダなどの多くの日本の自動車会社や日系企業がありましたので、これから仕事を通して中国とより深く関わりたいと思いました。その前に、中国語と文化をより深く知るために、再び中国に訪ねたいと思っています。昭和女子大学は中国人留学生も多いので、彼女たちと一緒に中国語と日本語を勉強していきます。正直、中国に行く前は、不安ばかりでしたが、訪中している間に中国人の優しさと中国の伝統や食に触れられたことで、訪中前の気持ちと訪中後の気持ちは変わりました。これからの日中関係はどのように変わっていくかはまだわかりませんが、今回の日中友好大学生訪中団に参加したことにより、日中友好に携われたような気がします。7日間で得られたものは、私の中で、今後の日中関係に対してより興味深いものになりました。大学で、日中関係を研究していこうと思います。日本人の意見や中国人側からの意見もしっかり取り入れて、今後の日中関係を友好にするために学んでいきたいと思っています。訪中をして、多くの日本人の学生さんたちは中国により関心になられたと思います。ここで出会えた人にも感謝しています。そして、

いつかまた一緒に訪中したいと思います。ありがとうございました。

◆「中国に行ってよかった」

そう思えたのは、実際に足を運んで、自分の目で見てきたものがあるから。

正直、私の中国に対するイメージというものは、決していいわけではなかった。それでも、中国に行こうと思ったのは、メディアを通してでは見えないものが、そこにはあると思ったから。実際に行ってみてどうだったかという、とても楽しかった。それが全体を通しての率直な私の意見だ。

事前研修を経て、派遣される全日本人大学生千人のうち、分団 99 名のメンバーと共に 27 日に日本を発った。北京に到着した次の日は、中国で最も有名と言っても過言ではない、万里の長城を訪れた。現代のように発達した機材がない時代に、あれだけ壮大な建築物を作ったというのは、人々の苦勞があつてのことだろうと、切に感じた。また、北京に滞在した 3 日間で特に心に残っているのが、北京大学の学生との交流だ。言葉や文化的バックグラウンドがまるで違う日中の学生が、みな同じ T シャツを着て、英語を介して親しく語り合う姿は、はたから見たら、どの学生が日本人で中国人であるか、区別がつかなかっただろう。それほど私たちは似ている。髪の毛の色も、瞳の色も。それなのにどうして、政治的な問題になると、互いにいがみ合っているのだろう。似ているからこそ、互いが互いに対して、こうあるはずだ、などといった固定概念を持ち、自分の意見を押し付け合ってしまうのだろうか。きっと、いつか分かり合える日が来るだろうと、英語でのディスカッションをしながら、そんなことを考えていた。その後、今回日本から中国に派遣された約千人の日本人大学生と中国人学生、そして日中両国の政治家の方々が集まる、仙人交流会にも出席した。私は昭和女子大学のリーダーとして、中国の副主席と記念撮影をしたり、北京のトップの政治家の方々の表敬訪問をしたりと、普段滅多にできない、大変貴重な経験をさせていただいた。成都では、漢文や歴史の教科書でしか見たことのなかった、三国志で有名な場所や、詩人・杜甫が生きた場所などを訪れた。その場所で実際に起きた歴史上の出来事を想像すると鳥肌が立った。長い歴史を持つ中国を築いてきたのはみな人間であり、幾多の飢饉や争いを経て、今の中国があるのだと、実感した。

私が出会った中国の人々は…「みな人間だった」。何を言いたいかという、人種は違えども、中国の人々もみな、私たち日本人と同じ人間であつて、泣いたり笑ったり、それぞれの生活がそこにはあつた。中国語がほとんどできない私は、お店ではシェイシェイ！と笑顔で返すことしかできなかったが、それでも店員さんは優しく微笑んでくれた。ペットボトルを集めて生活しているホームレスのおばあさんが、たくさんのペットボトルを待ちきれずに落としてしまい、それを拾ってあげたのだが、言っていることこそわからなかったが、私に笑顔でお礼を言ってくれているようだった。

英語を話せる人ばかりではなかったため、中国語が話せたらもっと伝えたいことを明確に伝え

られたと思う。言いたいことを言葉にできないのは背中がむず痒いような気持ちに襲われた。(これを機に中国語の勉強を始めようと、早速中国語の参考書を買ってきたところである。)

行ってみなければ、わからなかった。

夜景の綺麗さも、人々のあたたかさも。

私が見てきた中国のいいところを、中国に行ったことのない人に広めたい。私たち千人が2、3人の友人に中国ってこんなにいいところだよ！と、伝えることができれば、その2、3人もまたその友人に伝え…というように、中国に対していいイメージを持つ人が2000人、3000人、とどんどん増えていくだろう。

ステレオタイプや偏見など、そういうものすべてを取っ払って、私が見た「中国」は、広くて大きかった。

「中国に行ってよかった！」

◆この度とても素晴らしい機会を日中友好協会の皆様からいただき中国に訪問することができました。中国本土に行ったことは今までなくとても楽しみにしていました。正直な訪問以前の中国のイメージはとても良いものではありませんでした。例えば、中国の大気汚染問題や日中の政治の問題、中国製品の質の問題、日本に訪問している中国人旅行客のマナーなど色々な問題があり決して良いイメージは持っていませんでした。いつも心のどこかで日本人は基本的にとても良いイメージを持たれていて日本人は全てにおいて中国人の皆さんより優っていると心のどこかで思っていました。これは私だけでなく多くの日本人の方が心のどこかに持っていることではないでしょうか？日本は第二次世界大戦後、アメリカという世界で一番大きく力の強い国の力を借りて世界でもトップに立つ先進国へとなくなってきました。ですが、戦争で大きく敗戦する前の日本のことを私たち日本人は忘れていないのでしょうか。私は中国に行き実際に中国の方と交流し、中国の地に足を踏み入れ、中国の歴史に触れ、たくさんの素晴らしい建造物を目の前にして、もう一度日本人である自分のこと、そして日本全体のことを見直していかないと行けないと思いました。

はじめ中国について目にしたのは空港でした。本当に失礼なことですが中国の空港の綺麗さに驚きました。私のイメージは日本のように綺麗ではないと思っていました。中国について早々私の中国に対するイメージは変えられて行きました。

北京大学の生徒との交流はとても深いものとなり、私が自分たちのことを見直していかないといけないと思いついた訪問のひとつでした。私たちはグループに分かれて北京大学で経済学などグローバルな視点から学んでいる生徒たちと交流し、日本のアニメ文化の世界的観点から今後のビジネスについてディスカッションを行いました。日本のアニメ文化またそれに伴って声優文化がとても中国で受け入れられていることを身に持って感じました。こうした日本の文化が海外で、

隣人国で認められ受け入れられていることはとても素晴らしく嬉しいことだと私は思いました。

私が全体を通して思ったことは、私たち日本の学生はこれほど自国のことを真剣に考え、それを踏まえて大学に進学して学んでいるのだろうか。という疑問です。私の大学生のイメージは一部を除き大抵の人が時間に余裕を持って遊んでいるというイメージです。実際に私自身も大学には進学すべきもので、世界情勢やビジネスについて興味を持っているもののそれらの関心は後回しになり、友達との交際がメインになってしまっていたと気づき、中国の大学生が真剣に未来に目を向けて学業に取り組んでいる姿を見て自分も変わらなくてはならないと思いました。若い世代の起業を支える団体の視察でも同じことを思いました。

この訪中を通して私が一番強く思ったことは中国という国はこれからもっと大きな国へと成長し、日本はいつまでも過去の栄光に目を向けて実際の現状をあまり深く捉えて考えて成長できるような国ではないことを思いました。

国自体のことは私一人が何かできることではありませんが、少なくとも私が大学でたくさんのことを吸収してたくさんの人になにか伝えることができれば良いなと思いました。

◆今回私がこの日中友好大学生訪中団のプログラムに応募した理由は、中国を少しでも好きになれたらいいなと思ったからです。

私は色々な国に行き、現地の方と交流したりその国の建物やデザインを学んだりすることが好きなのですが、正直、中国は自分でお金を貯めて行こう、行きたいと思う国ではなかったです。むしろ避けていた国でした。また、反日の方がほとんどだと思っていたので、中国人ともなるべく関わりたくないと思っていました。

中国に対して上記の様に思うようになってしまったきっかけとして、アルバイト先での体験が挙げられます。私のアルバイト先には外国人のお客が多くいらっしゃいます。もちろん中国から来たお客もいらっしゃいます。その多くは、説明を聞いてくれなかったり大きな声で話したりと他のお客様に迷惑になる行為をされる方がほとんどで、接客するこちら側は中国人に対して悪いイメージを持つようになりました。一部の中国人の行動や態度で中国人全体に対するイメージを決めつけることは良いことではないと分かっていますが、今まで私が見てきた中国人はそのような方達だったので良いイメージを持つことは出来ませんでした。

実際に中国へ行って、現地のガイドさんや北京大学の学生さん、西南交通大学の学生さん、青少年行動センターで交流した子供達、など沢山の中国人と交流しました。彼らはみんな優しく、日本から来た私たちを笑顔で出迎えてくれました。中には日本語や日本の文化に興味を持ってくれている子も多くいて、日本人としてとても嬉しく思いました。反日の方が多いと思っていた国でしたが、私が思っているより何十倍も優しく楽しく交流することが出来、中国人に対するイメージは少し良くなりました。

中国の大人や政治家などは今回の訪中では深く関わらなかった所以日本に対してどう思っている

のかは分かりませんでした。少なくとも私たちと同じ年齢くらいの子はあまり反日ではないように感じられたので安心しました。ですが、今の日中関係のままだと、彼らや私たちが大人になりお互いの国の政治などの話をする様になった時、彼らはもう日本のことは好きではなくなっているかもしれません。友好関係どころではなくなると思います。ですので、今回のこの訪中で築いた日本と中国の友好関係を彼らと私たちが大人になるまで維持し、今とは違った日中関係をつくれたらとても良いと思います。そのために、まずは私の様に中国が好きではなくても一度は行くことが大事だと思います。きっと私のように一部の中国人の方の行動によって良いイメージを持たなくなった日本人の若者は沢山いると思います。このプログラムには観光だけでなく必ず現地の方と話す機会が設けられているため、旅行で中国に行くよりも中国人のことを今までよりは理解することができるので、この様なプログラムをもっと多くの大学生、若者に知ってもらうことが今一番やるべきことだと思います。多くの若者に知らせるということは、選考が大変になったり負担してくださっている費用が多くなったりしますが、この様なプログラムで中国に行くチャンスがあるのとならないのでは、今後の日中関係は大きく変わってくると思います。本当にこのプログラムは自分にとって、とても良い経験になりました。このような機会をいただけて本当に感謝しています。

◆私は正直中国に行く前は、中国に対してあまり良くない印象がありました。ですが、実際に北京や成都に行ってみて、現地の雰囲気を感じたり、中国人と関わり、以前よりも良い印象に変わりました。

例えば、私はボランティアの中国人の学生や、北京大学の学生、西南交通大学の学生と話してみたら、みんな勉強熱心なんだなと思いました。それは、中国語だけでなく、英語や日本語が話せる中国人の学生がいたからです。私は気になって、どのくらいの期間その言語を勉強しているのか、一部の中国人の学生に聞きました。すると、英語を話していた学生は10年間毎日勉強していると話してくれました。そして日本語を話していた学生は3年間勉強していると話していました。特に日本語を話していた学生は流暢な日本語で、WeChatで連絡を取ったときにも日本人と連絡をしているような感覚で、とても3年間だけで日本語を勉強しているようには見えず驚きました。2人とも、それぞれ英語と日本語で話してくれていたのですが、中国語をあんまり話さないのかなと思っていたら、WeChatのモーメントには中国語で文章が書かれていたので、私は驚いたと同時に、自分たちの母語である中国語にほとんど頼らないでいいぐらい第2言語が話せるのは凄いことだなと感じました。また、言語だけでなく、私(日本人)に積極的に質問をしてくる学生も多く、内容も大学で何をしているかなどを聞いていて色々なことに興味を持っているのだなと感じました。さらに、中国人の学生と夜ご飯を食べているときにも日本の過疎化についてなどディスカッションができたので良かったです。

ただ、気になったこともいくつかありました。まず、車など交通系の整備をもっとすべきだな

と感じました。その理由としては、バスに乗っているときに、窓から見て、車の横入りの仕方や車の並び方が危ないと思ったからです。さらに、中国では歩行者が優先ではなく、歩行者、車関係ないようなことを聞いて、信号が変わるのも早かったため、交通系の設備をもっとすべきだなと感じました。次に中国は教育に格差があるのではないかと感じました。中国人のバスガイドの方も言っていました、「中国人は良いところに就職するために一流の大学に行かないといけないため、受験が大変でみんな勉強を頑張っています。」というようなことを話していて、本当にそうだなと私も感じました。それはボランティアの中国人の学生や、北京大学の学生、西南交通大学の学生は先程も書いたように、言語などを勉強しているような印象だったからです。ですが、街のお店などに入ると、英語が通じなかったり、おつりを間違った金額で渡されるというようなことがあったため、私は中国に対して教育に格差があると感じました。

今後日本が中国にすべきことは、交通系では日本のノウハウを中国に教えればいいのではないかと私は考えます。たしかに、文化の違いもあり、日本のノウハウを受け入れることは難しいことかもしれませんが、車の運転の仕方によっては命を落とす危険もあるので、伝えるべきだと私は考えます。また、これは引き続きしたほうが良いと感じたことですが、日本の企業に中国人を採用することは続けたほうが良いかと私は考えます。中国人を採用することによって、日本人の考えだけでなく中国人の考えも増えるため、色々な人の意見が増え、自分の考えの参考になるのではないかと考えます。

最後に私たち日本人は中国に対して悪い印象を持っている人が多くいると感じます。ですが、実際にいってみて自分の目で確かめることによって、良くないところだけでなく、良いところがみえてくるのではないかと私は考えます。

◆私は夏の1週間を中国で過ごしましたが感じたことが何個かあります。そもそもまず訪中前の中国への印象はあまりよくはありませんでした。例えば中国語はイントネーションが強いので口調が強く喧嘩をしているようであまり好きではなかったし、中国人は列に並ばなかったり、どこか常識がないそんな印象がありました。しかし実際中国を訪れてみると、もちろん私たちを歓迎してくれていたこともあると思いますが、必ず食事のときは飲み物を注いでくれたり丁寧にトイレの場所を教えてくれたり素敵なおもてなしにずっと囲まれていた気がします。そこで感じたことがあります。日本は恵まれているし変にきっちりしていて逆に私たちが普通ではないのかもしれないということです。簡単に言えば中国が普通で日本が変にクリーンとかそのようなことに敏感なのではないかということです。日本は汚れているところがあったらすぐキレイにするし、トイレも機能がどこの国よりもいい、だからクリーンなところだけを見たら自信を持って日本が一番といえるはずです。でも日本人はおもてなしおもてなしと一時期流行りましたが、実はそうでもない気がします。例えば外人に日本人が道を聞かれたとします。日本人は笑顔でハイハイこの道はこうしてこういくのですよ、とすぐに正しい案内ができるでしょうか、そんなことはないと思

ます。たいていの人は無視してしまう気がします。また道案内できたとしても自分が焦って気持ちよく正しくできる人はなかなかいません。つまり日本はちゃんとしていてクリーンでという印象があるからそうになっているだけで実はそんなこともないということです。またこれは訪中時友達と話したことでありますが日本の学生はさぼりがちだということでもあります。今回の訪中では名門北京大学を含め何個かの大学に行く機会がありました。どの大学生も自分の専攻している学びを大切にしているという印象でした。一番わかりやすい例でいえば私です。中国で日本語を専攻している大学生は大学1年生の子でももう、日本語がペラペラの人もいました。ということは日本語をたくさん勉強してるということだと思います。逆にわたしは英語を専攻しますがちょっとした英語しか話せません。勉強するのが大変なのはきっと英語より日本語のはずです。確かに私たち日本人も大学に入るまでは浪人したりする人もいたたくさん勉強していたと思います、しかし入ってからはどうでしょうか、きっと大学生活を楽しむため勉強は二の次だと思います。しかし今後の未来は私たち若者にかかっています。そう考えると日本はいつか衰退していく日が見えてる気がしました。いい意味でとても中国に学生には刺激を受けました。このような中国のいい所や刺激になったこと私も行ってみなくてはわからなかったことがたくさんありました。きっとまだ中国に対していい印象がない人は日本にいると思います。その人に誤解やもっと中国のいい所を伝えられるように今後の日中関係のためにも訪中した私たちの声が届く場所を増やしたり、今回私がした経験をもっといろんな人ができるような環境が必要だとも思います。私自身もまた機会があればまた訪中したいし自分が今回した経験をいろんなところで発信できればいいなと思います。今回このような経験をいろいろなことを感じられて本当に良かったと思います。今後の日中関係に期待し私もできることがあれば積極的に参加したいです。

◆今回、私は人生で2回目の訪中でした。初めての中国は上海に訪れ、とても近代的で日本より発展しているのではないかと感じる印象でした。今回の日中友好大学生訪中団の団員として北京と成都を訪問し、現地の歴史を感じたり学生と交流できたりしことに感謝しています。私は父方が中国系ということもあってか、中国に対してネガティブなイメージはありませんでした。だからと言ってほとんど訪れたことがない中国に対して、又ニュースなどを通して知る中国に対して特別な好印象を感じてもいませんでした。

この訪中でとても印象に残っていることが2点あります。1点目は中国の歴史に触れることができた点、2点目は中国の学生と交流できた点です。万里の長城、故宮博物院、都江堰や武侯祠を訪れ、歴史を感じたことである。それぞれ、見ているだけでは素晴らしい建造物であるという感想が残るのみであろうが、中国の歴史や時代背景を知っているだけでその場所が何十倍も興味深く感じられ、人物の偉大さや、その当時の権力の大きさなど、建物などを見ることによってより偉大に感じました。特に万里の長城は広大な中国の領土を守るためには必要なもので、当時の人々の努力がとても感じられる場でした。次に私がこの訪中で一番印象に残っていることは北京

大学や西南交通大学の学生と交流できたことです。通常、中国に行ったからといって現地の学生と意見交換や会話をするのは難しいので交流できたことでとても中国の学生に対して身近に感じました。日本にはたくさんの中国人観光客が来るが、日本で過ごしていると中国では反日教育をしていると聞いたこともあり中国の学生に歓迎されないのではないかと不安になっていました。基本的にどの大学生も優しく接してくれ、嫌悪感をあらわにされず安心しました。北京大学の学生の印象としてはクールな人が多いなと感じました。一生懸命英語で話しかけても一言、二言で会話が終わってしまい仲良くなるのが難しかったです。それに比べて西南交通大学の人は日本語を話せ、日本にとっても興味を持ってくれているからとてもフレンドリーでたくさん話し合えました。今回、たくさんの中国の人と触れ合っただけで感じたことは誰も日本に対して嫌悪感を持っていないことです。また、私が考えていた以上に日本のアニメが深く浸透していたり日本旅行をしたりする人が多いことからこのようなことが感じ取れました。日本と中国は歴史問題や領土問題などが問題になっているが、個人同士で付き合う場合、何も問題がないと感じました。また、中国の学生と交流し、生の中国に触れる経験ができたことで中国という国をとっても身近に感じることができました。そして新しい中国観を持ちました。この日中友好大学生訪中団に参加したすべての学生がお互いのことを家族や友人と分かち合うことで今後、より一層両国関係が改善され、手を取り合うような関係になることを願っています。

最後になりますが、この日中友好大学生訪中団に参加し、中国で経験は私の宝となる程有意義なものとなりました。このような体験を家族や友人に伝えることで私たちが社会を担う頃にはより良い日中関係になっていることを期待しています。日中友好大学生訪中団で訪中という機会をいただき感謝申し上げます。

◆“If you're proactive, you don't have to wait for circumstances or other people to create perspective expanding experiences. You can consciously create your own.”

- Stephen Covey

人生において積極的であることの重要性は、スティーブン・コビーの言葉からも一目瞭然である。より積極的であるほうが、より消極的であるよりも、挑戦と失敗を繰り返すことで学び、成功のチャンスをつかみ取る可能性が高い。日本人の消極性についてはすでに多くの人が問題視しているが、日本ではよく耳にする、「積極的に参加しましょう。」という言葉は私たち大学生に向けて事務局員の方々が何度も口にしたことの意味を、今回の訪中を通して改めて理解することができた。対して中国の大学生は圧倒的な積極性を持っていた。北京大学の学生とのディスカッションや西南交通大学の学生との交流の場においてもそれは確認でき、より交流を深めるためにも改善すべき点であると考えます。

北京大学の学生とのディスカッションが始まってすぐ、日本の学生の消極性がみえた。3つのトピックのうち1つを選ぶために、進行役の北京大学の学生が日本の学生に対し、「3つのうちど

のトピックでディスカッションをしたいか」と聞いた時、誰一人意見を発することなくその場は沈黙した。選択肢を与えられているにすぎないにも関わらず、意見を発さない学生が多かった。ディスカッション自体は、北京大学の学生がみな積極的に意見を発し、進行してくれていたことでなんとか意見はまとまったが、もし日本の学生が積極的に意見を発していれば、より充実したディスカッションになったのではないのかと私は思う。

北京大学の学生とのディスカッションでの中国人の積極性も素晴らしいものであったが、私は特に西南交通大学の学生との交流の際、彼らのみせた積極性に驚いた。日本の学生が北京大学の学生とのディスカッションで消極性をみせてしまったのは、英語という不慣れな言語を使っただけのディスカッションであったことも要因のひとつとして考えられる。インターナショナルスクールに通った経験を持つ私は、入学したての際、英語を話すことができなかつたため、その気持ちは痛いほどわかる。しかし、西南交通大学の学生はより強い積極性をみせた。私が交流した学生は、日本語も英語も会話ができるほどは話せない学生だった。こちら側にもその時中国語を話す学生がいなかつたため、交流を図る言語がなかつた。しかし彼らは積極的に語りかけてきた。翻訳機を使って単語を出したり、漢字を紙に書いて伝えようとしたりなどの方法を用いて、話す努力を積極的に行っていた。そのおかげで、彼らの好きなアニメーションの話やお互いの苗字について、交流会の際に行ったパフォーマンス、食事についてなどたくさんの情報を得ることができた。話す言語がない状況でも話す努力をするこの積極性を、私も含め日本の学生は見習うべきなのではないかと考える。

積極的であることは、人生において成功のチャンスを得るために必要なことである。しかし、日本人は積極性を欠いているものが多く、彼らは得ることのできたチャンスを逃している。より積極的であれば、北京大学の学生や西南交通大学の学生ともより充実した交流を図ることができたであろう。今後そういった機会を得られたときのためにも、私たち日本の学生は中国の学生を見習って、積極性を養っていく必要があると私は考える。

◆この度、日中友好大学生訪中団での約1週間の訪中により自分自身多くの気づきを得ることが出来ました。一つ一つ挙げればきりが無いのですが、思ったことを書きたいと思います。

まず、中国はものすごい勢いで発展していて、日本はもはや追いつくことが出来ないだろうと感じました。そう思った理由は中国がとても活気があって向上心も高く、野心を持って未来に進もうという貪欲さが随所に見られたというところにあります。8/28に訪れた北京創業公社では、宇宙、医療、化学などに関する高度で最先端の機器が展示されていました。そのどれもが未だ日本では見たこともないものでした。そして若手ベンチャー企業が創業公社という場所を借り、資金援助とベンチャー同士の情報交換を得て非常に速いスピードで会社としても技術としても世界に通用するレベルに成長しているということがひしひしと伝わりました。創業公社という会社自体も2013年度に設立され、今は全中国に広く分布し多大な売り上げとベンチャーに対する資金

援助、場所提供という面では群を抜いています。大変素晴らしいと思いました。日本にもベンチャー企業はありますが、特に目立って国から資金が下りているようには見えず、都心に企業を置く場所も多くはないため、日本のベンチャー業界は中国に比べると成長速度が遅い仕組みになっているのではないかと感じました。つまり人材、資金、市場の規模が莫大である中国はその素材だけでも日本に優越しているのに、政府からの資金援助や人々の意欲、ベンチャーの育成施設にジムやコンビニ、寮まで用意して快適さを実現するアイデアを加えるのならば中国の急成長は当然であり、これから中国の時代が来るのは必至だと思いました。ホアウェイやハイアールなどの中国企業が日本に進出しているとはいえ、粗悪品の代名詞であるメイドインチャイナの言葉は未だに日本では効力を持っています。そのため訪中前は中国の製品は壊れやすく偽物が多いという悪いイメージを持っていました。だからこそ、訪中時に目にしたありとあらゆる製品はその価格の高さ低さを問わずしっかりしていて、良い印象しか受けませんでした。そのことに後で気づいて驚いたぐらいでした。これからは日本が率先して中国を見習わないといよいよマズいということに日本の政財界また経済界の偉い方々に早く気付いてほしいと思いました。

技術面のみならず教育面でも私は中国に一目置きました。8/29では千人交流大会のために北京大学を訪れました。私はディスカッションBグループでしたので9:00から大学生と難しい内容でディスカッションを行いました。私のグループには流暢に英語を話す北京大学の学生が3人いました。日本側にも英語が出来る東大の子と中大の子が一人ずついたので、意思の疎通を図ることまではできましたが、ほとんどが北京大学の学生の話で終わってしまいました。もちろん、人口13億人の中国の最高峰の大学の学生ともなれば英語はペラペラであろうという見当はついていましたが、正直悔しかったです。もっと英語を話せたらよかったのにと思いましたし、中国人の大学生は進んでいると感じました。北京大学の構内見学で理科系の研究棟に入ったとき、魚の形をしたロボットや牛流を一気に-190℃ほどに冷却してアイスクリームを作る機械を見せてもらいました。今の中国はここまで進んでいるのかという驚きと3Dプリンターなどの高額な機械がそろっているという点で国からの支援がしっかり下りていて大学と政府がしっかり連携しているという印象を受けました。私が知らないだけで日本の大学はそういう研究が進んでいないという訳ではありませんが、北京大学の圧倒的な技術力や資金力、そして自発的に研究を進める大学生の意欲や鋭い眼光は中国人大学生のほうが上なのではと思いました。

また成都の青少年センターに行ったとき、小学生未満の児童が書道やダンス、太極拳などの習い事をしていました。青少年センターは市役所のような施設だと聞いていたのに子供が習い事をする事ができるスペースがあったり、ご老人が健康のために健康遊具を使い、また大人数で太極拳をして体を動かすスペースがあったりと市民に親しみやすい施設であるということがわかりました。それだけではなく、心に障害を持った人へのケアをサポートする部屋やDVを受けた人が相談できる部屋など、それぞれ何か複雑な事情を抱えた人が駆けつけることができる部屋が細かくいくつもありました。そこは日本の市役所とは違う中国側の良い点でした。

今回書いたのは中国の良いところばかりでした。しかし中国を本当に知るために大事なことは

何度も訪れて良いところと悪いところの両方をしっかり見て、物事を多角的に見ることにあります。

他にも気付いたことや書きたいことはたくさんありますがここで終わりにします。今回私たちに快適な訪中をサポートして下さった公益社団法人日中友好協会の方々には本当に感謝いたします。私は今回の訪中が初めての中国入国でしたが、今年中にもう一度中国へ行く計画をしているところです。今度は清華大学へ行く予定です。中国へまた行きたいと思うようになったのは、このような中国での素晴らしい経験を与えて下さった事務局の方々のおかげです。ありがとうございました。

◆1. はじめに

私がこの訪中団に参加した目的は大きく二つある。一つ目は、中国の大学生との交流を通して、中国人の持つ日本に対する意識や感情を知ることであり、もう一つは、今後中国語圏への留学を考えていることから、まずは中国本土の社会事情に触れておきたかったという点である。今回の訪中を通して、これらの目的についてはある程度達成することが出来た。また、中国に対する新たな見方もプラスとマイナスの両点において得ることが出来、非常に実りのある訪中の機会となった。以下にそれぞれについて詳しく述べることにしたい。

2. 日本に対する意識と感情

大学生交流の際にある学生は、日本語を学び始めたきっかけについて、「日本がアジアにおける先進国だから」と話してくれた。近年は中国も経済成長が著しく GDP では日本を抜いたとされるが、明治以降西欧諸国と肩を並べてきた日本からはまだまだ学ぶべき点があると考えているようであった。また、別の学生は同様の質問に、アニメやドラマといった日本のサブカルチャーに興味を持ったことがきっかけだと話していた。北京大学でのディスカッションにおいても「アニメ産業」がテーマになる等、サブカルチャーをきっかけに日本に興味を持つ若者が中国にも一定数いることが改めて理解できた。

全体として、中国の大学生は日本に対して、必ずしも悪い感情一辺倒ではないということが見受けられた。もっとも、これらは今回の「友好」訪中団のイベントに参加してくれた学生の見解に過ぎない。彼らは「友好」の行事に参加していることから、憧れや興味など、日本に対しては少なくとも悪い印象よりも良い印象の方が強い中国人であったはずだ。今後中国と日本とのより良い関係性を築いていくなれば、より幅広い集団の中国人と接し、その考えを聞いていかなければならないだろう。

3. 中国本土の社会事情

私は現在満州に関する研究を行っており、大学院進学後は中国語圏への留学も視野に入れている。

台湾には既に数回行ったことがあったものの中国本土への渡航経験がなかったため、まずは中国の社会事情に触れ、今後の進路選択の参考にしようと考えていた。結論から述べると、中国語の取得といった点から考えるならば、あまり中国への留学に対しては良い印象を受けなかったというのが率直なところである。

その理由として最も大きな点が、Google や Facebook といったサービスが使えないことである。現地では百度や Yahoo!、微信といったサービスで代用したが、やはりそれらの水準は前者には及ばず、例えば検索のヒット数だけで見ても前者の方が明らかに優れていた。もっとも他の点、例えば物価や交通といった点では特に不便を感じなかったし、ヒトの数も多く、電子決済などについては非常に先進的だという印象を受けた。したがって、これらのインターネットサービスについて代用できる手段が見つかれば、研究テーマとの関係性からも中国への留学をぜひ検討してみたいと思う。

4. おわりに

前述の通り、私は満州移民をゼミの研究テーマにしていることもあり、元々中国に対して悪い印象を持っていた訳ではなかった。今回実際に中国を訪れて、よく整備された街路や電子決済の普及状態など日本より優れた点をいくつも見かけた。また現地の大学生の中には、もしかしたら日本人よりも詳しいのではというレベルで日本文学に対する知識がある人もいるなど、中国人全員の対日感情が悪いわけではないのだと再認識できた。

近年は歴史認識や領土問題などで日中間の関係は必ずしも良いとは言えないが、私自身としては今後歴史を研究していく中で、多少なりとも日中関係の発展に貢献できればと思っている。今回の訪中で交流した日中双方の学生のうち、何人かとは微信で連絡先を交換することも出来た。今後も、研究を進めたりあるいは留学したりした際に、今回の訪中の経験を有効に活用していきたい。

◆この訪中経験は私にとって様々なものを与えてくれた。

1つ目は中国の同年代の友人である。このプログラムにおいて私は様々な中国人と交流することができた。彼らは私たちと同年代であり、日本になんらかの興味を持つ者であった。ゆえに彼らは私たちに対して非常に親和的であり、お互いにより理解を深めることができた。このことから、中国にも日本に親和的に思ってくれる人は少なからずおり、その人たちとの協力により現在の日中関係をより良いものにすることができるよう感じた。

もっとも私はこの訪中において日本に全く興味のない、また日本を好きではない人との交流がなかったことを残念に思っている。日中の親交を深めるイベントに日本に興味のないものが来ることは現実的にあり得ることではないが、将来の日中関係のためにそのようなものがどのような考えを持ち、これからの日中関係をどのようにしたいか考えていることまで知ることが出来

たらよりお互いに歩み寄っていけないのではないのだろうか。

2つ目は中国に関心を持った日本各地から集まった訪中団の仲間である。私はこの訪中団に参加するまでは他大学他学部の学生と交流する機会がほとんどなかった。しかし、この訪中団の中で学部大学の垣根を超えた交流をすることが出来た。彼らと一緒に活動することを通し、自分と違うものの見方、考え方を学び、より自分の見識を広げることが出来たように思う。彼らは私とは全く違うグラウンドを持ち、各々が中国に対して様々な思いを抱いている。法学部であり、第二外国語もドイツ語で純ジャパニーズである私にとって、何かしら中国と関わりのある彼らとの交流は私の中国観を成長させるものであった。訪中が終わった後も彼らとの交流は続いており、一生の友を得たように思える。

もっとも今回の訪中は七大学のみで構成されていたものであり、最初の頃は大学で固まってしまような風潮があった。普段の訪中団のように様々なところから様々な学生を集めることがより多くの価値観にふれることができたのではないかと思う。

3つ目は中国という国の様々な部分を目で見て肌で感じる事が出来たことである。現地での食事は毎回その土地の有名な料理であった。一口に中華料理といっても様々なものがあり、その土地の特徴を料理から感じる事が出来た。また様々な観光地へ行くことが出来たこともとても良い経験であった。行った場所はどこも中国の長い歴史を感じることが出来る場所ばかりであり、今の中国がどのようなことが起こったがゆえに成り立っているのか、何が中国の礎となっているのかを知ることが出来た。もう一度世界史を紐解き、中国について再度理解を深めていきたいと感じた。また中国で現在注目されている分野や会社の見学も今の中国を知るのに非常に助かるものであった。

もっとも、自由時間が少なく外国人用に飾られた中国しか見ることが出来なかったことに対しては疑問を感じた。より中国を理解するために中国の現状がどのようなになっているのか、見たくはないし目を背けてしまうとこに目をそらさず紹介することも必要なのではないのでしょうか。

以上のようなことを私は中国へ行き、そして感じた。感じたものはしっかり還元し、より日中関係の良き発展のため、活動して行きたいと思う。

◆私は今回、大学生訪中団として訪中できたことが、本当に良い機会であったと感じています。旅行では経験することのできない学生交流や視察を通し、中国に対する興味や関心、自分自身のモチベーションをかなり高めることができたからです。

私にとって今回の訪中は3度目であり、特に中国に対して悪いイメージなどはなく、初めて訪れる北京と成都にとっても期待していました。それぞれの都市に3日程度しか滞在できなかったため、見る事ができたのは一部でしかありませんが、それでも各都市に対するイメージが変わりました。特に成都市の規模の大きさには驚きました。訪れる前は、日本の地方都市のようなところだと思っていましたが、実際に街を見ると成都市だけでも東京都のような規模や機能があるよ

うに見え、中国の規模の大きさを感じました。一方、北京で滞在した場所は、東京都の大手町のような印象を受けました。あまり生活感は無く、中国を代表するような大きな会社ビルが多く、ここで中国の政治や経済が回っていると思うととても興味深かったです。道もきれいで車のクラクションなども気になりませんでした。しかし、それは北京の一部であり、北京の西部に行けばまた違った北京の様子が見られると伺い、是非見てみたいと思いました。2都市を訪問し、それぞれ違った印象を受けたり、料理を食べたりした経験から、これからは更に多くの中国の各都市を周ってみたいと思いました。

学生との交流で一番印象深かったことは、中国人の大学生も日本の大学生とあまり変わらないという印象を受けたことです。これまでに中国以外の国や日本国内で、多くの中国人留学生と接してきましたが、中国国内にいる中国人学生はどのような生活をしているのか、日本に対し何か特別な感情は持っているのか、気になっていました。今回、国際関係や政治について直接聞くことはできませんでしたが、彼らとの交流を通して、好きなドラマがあること、化粧品に興味があること、勉強が大変なこと、留学したいという夢や卒業後の夢がそれぞれあることを知り、学生としての本質は私たち日本人学生と変わらないのではないかと感じました。日本語学科の学生は日本語が流暢で、日々日本語能力を上げるために努力していることが感じられました。私も中国語を勉強しているため、彼らに負けないように頑張ろうというモチベーションが交流を通して上がりました。

交流宴会や千人交流会で、多くの要人の方のお話を聞き、日中関係は私たち学生、若者に託されているというメッセージがひしひしと伝わってきました。私自身も若者同士の交流や文化を通しての草の根交流が、より良い国際関係を築くことに大きく貢献していると考えています。今回のお話でもそれをたくさん聞き、間違いのないと思いました。そして、私自身が小さな力でも日中関係に貢献していきたいと改めて強く感じさせられました。これまで、学生として多くの中国人留学生と交流をしてきましたが、来年度からは就職し働き始めるため、これまでとは別の形でも日中関係にアプローチができると考えます。具体的には、中国駐在員を目指し、日中をビジネスで繋ぎ、日中関係に貢献していきたいと考えています。ニュースなどでは、日中関係に関する問題が大きく取り上げられていますが、今回の訪問を通して日中相互に関心のある方たちと触れ合い、日中の多くの人々が友好を望んでいるのではないかと感じました。しかし、今回の訪問では滞在日数が1週間でしかなかったため、まだ中国の一部しか見ていません。中国について更に知るために、留学し今回交流した学生たちと共に学んでみたいという気持ち、創業支援会社の見学を通して、これからビジネスパーソンとして日中をビジネスで繋ぎたいという思いが強くなりました。今回の訪問を通して感じた思いを忘れず、中国語の勉強に励み、必ず日中の友好関係を深める一人となります。

◆日中関係を改善させるにはどうすればよいか。この問いは、私が高校生のときに「日中小大使」として北京を訪れて以降、常に考えてきたものであり、大学生となった現在でも、私のなかで大きなテーマとしてあり続けている。今回の訪中を終えて感じたのは、今後どのような情勢になると、日中間の草の根の交流は続けていくべきだし、私自身がどのような仕事に就こうとも、そのような活動に携わっていきたい、ということである。

今回このように考えたのには、自分のこれまでの経験が大きく関係している。前述の「日中小大使」としての訪中は、尖閣諸島国有化による中国での反日デモが日本国内で大きく報じられた2012年のことであった。反日デモの影響で訪中は3か月後に延期となり、その3か月間、私は、友好交流さえ政治的な関係悪化によって中断されてしまうような、外交の影響力の大きさを思い知った。そして、当時16歳の私は、中国の人々が日本人を嫌っているのではないかと、訪中への強い不安を抱いていたのを今でもよく覚えている。しかし、実際に訪中することで、日本における報道とは異なる事実や、私たちを温かく迎えてくれた中国の人々との交流をして以来、日中関係改善のために仕事がしたい、と考えるようになったのである。以降、大学では国際政治や中国政治を学び、さらに1か月間中国で留学し、中国語や中国の政治・歴史観について勉強するなど、中国を理解しようと努めてきた。

日中関係改善には何が有効か。「日中小大使」の経験以降、日本人と中国人が少しでも多く交流し、相手を「〇〇人」と見るのではなく、実際の友人の顔が浮かぶようになる人が増えれば、しだいに両国関係は改善するはずだと考えてきた。ただ、大学入学以降、中国への理解は深まっていくのに、関係改善へのアプローチについては高校生の時の思考から何も発展していないことに気づいた。特に、大学1年生の時に上海で日本企業の方にお話を伺った際、政治・歴史の問題と経済・民間の交流を別々に考える、というアプローチをとっているばかりでは、両国関係が真に改善することはないのではないかと、という意見をいただいた。

以上のような経験から、私は、大学3年生になった今、中国の学生と交流し、日中関係にもう一度向き合い、自分の考えを新たにしたい、という思いで、今回の大学生訪中団に参加させていただくことになったのである。

1週間の訪中を通じ、日中間の草の根交流のような活動を、コツコツと続けていくことに大きな価値がある、と実感した。実際に日本の学生が中国に行かなければわからないことが多数あり、実際に訪中することで中国に対する誤解やイメージを変えることができるからである。私は何度も中国に行ったことがあったが、それでも新たな発見は多かった。まず、内陸部にある成都が思った以上に都会だったこと。それに関連し、成都市の戦略に「一带一路」が大きく組み込まれており、中央の意思が全国に波及するスピードと、中央の決定を速く、一元的に履行する国家体制に改めて驚いた。また、北京・成都市の人民対外友好協会の方々や、北京大学での千人交流大会でスピーチされた中国政府の方々が対日関係に前向きな発言をされていたことも印象に残った。さらに、大学や企業の訪問を通じ、将来はますます経済的な相互依存が進んでいくであろうし、それは我が国の将来にとって重要であると改めて感じた。そして何より、一緒に訪中した仲間と

共に中国を体感し、中国についていろいろと考えることができた。このような学び、経験は実際に両国の人々が交流しなければできないものであり、首脳同士の関係などに比べれば影響力は極めて小さいかもしれないが、小さな交流が次第に相手国のイメージを変えるきっかけになる意義深いものであると、確信した。今回のプログラムのような交流は、今後も日中両国の将来にとって必要なものであり続けるであろう。将来はこの考えが社会全体に広がり、日中間の様々な交流が進むことを望むし、私自身もそれに携わって行けたらと考えている。

◆大学では中国言語文化を専攻しているため、中国には以前から興味があり映画やドラマ、バラエティを見たり、日本に留学している中国人の友人と遊んだりと自分なりに色々なところに関わりを持つようとしています。しかし、私の中国に対する知識はまだまだで今回初めての訪中を通して小さなことも含め自分の目で実際に今の中国を知ることができたと思います。事前研修で事務局の方もおっしゃっていたように、私たちは中国というものを実感を持って捉えていないという言葉にとっても共感し、その通りだと思いました。これはよく言われていることだと思いますが、私たち日本人は中国の昔の歴史や文化はある程度学校で知識をつけ知っていることも多くあると思います。また政治や経済面に関しては日本メディアは中国のその部分を多く出しているのだから少なからず何かしらの知識やイメージ、考えを持っている人は多いと思います。しかし、今の中国の他の面、例えば若者文化など。中国の友人にはよく言われます。日本では今〇〇が流行っているよね。どんなもの？と。しかし逆の立場になってみると中国でいま流行っているものってなんだろう。見当が付きません。それはある程度メディアが影響しているのではないかと思います。だから私は youtube や sns を通じて今の中国を知りたいと思うようになりました。

中国を訪れてまず思ったことは、かなり栄えているところが多く、街並みもよく整備されていて、空気もあまり汚くありませんでした。今回訪れた場所が都会ということももちろん関係しているとは思いますが、想像よりもとても綺麗な街でした。以前、台湾を観光で訪れた際は観光地の比較的都会と思われる場所を歩きましたが、ゴミが落ちていたり、道端に座っている人や、物売りの人が多くいました。また交通に関しては、自転車の普及率がとても高いと思いました。日本にはまだ少ない自転車専用の道や、大通りでの自転車専用トンネルが整備されており、驚きました。そして自転車のレンタルが主流で、1時間1元程度で借りることができ、乗り終わったらどこに置いてもいいということを現地の学生から聞いてさらに驚きました。バイクはガソリンよりも電気で動くものが多いことにも日本との差を感じました。

1番印象に残ったことはやはり、北京大学と西南交通大学の学生さんたちとの交流です。中国語を学んでいたためなるべく中国語で会話をしたいと思い、準備して来たことを聞いたり話したりしました。台湾に行った時にはあまり役に立たなかった標準語がきちんと使えて通じて、楽しく会話をできたことがとても嬉しかったです。西南交通大学で出会った同い年の学生さんは日本への留学を考えているようで、今も wechat を通じて連絡を取っています。ぜひ試験に合格して

日本で再会できることを願っています。

北京大学での千人交流会では中国副総理からのお言葉がありましたが、人生の楽しみは心が通じ合うことにある、というお話でした。

訪中では色々な方とお話をする機会が多かったのですが、やはりお互いの言っていること、言いたいことがわかったり考えを共有できたその瞬間が楽しくて、心が通うのを肌で感じました。日本にいただけではわからない今の中国をこの目で見て感じる事ができた経験はこれからの自分の進路やキャリアに於いて必ず何かに活かしていけることだと思いました。これからも知りたいという気持ちを持ち続けて、積極的に自分から関わっていこうと思います。

この度はこの様な貴重な機会に参加させていただき、ありがとうございました。

◆2017年8月27日から9月2日の訪中を終えて、私は本当にたくさんのものを得ることができました。この7日間、どの日をとっても学ぶことが多く、刺激的で充実した毎日を過ごすことができ、一日一日があっという間に過ぎてしまったように感じます。

日中友好大学生訪中団は本来、中国へ行ったことのない大学生が対象でしたが、本年が日中国交正常化45周年という節目の年であるということで、今回の日中友好大学生訪中団は例外的に中国へ行ったことのある学生も参加することが可能でした。このことは中国へ行ったことのある私にとってはとても有難いチャンスでした。そして、訪中経験のない他の学生とは違った視点から中国を捉え、理解しようという意志を持って参加しました。その結果、多くの良い刺激を受けることができたと感じます。また、日中国交正常化45周年を記念して行われた日中大学生千人交流大会という貴重な場に立ち会えたことは本当に幸運であったと感じます。

訪中団の目的は、中国の学生と交流し、地方都市を回り、直接生活文化に触れることにより、相互理解を深め、より客観的で偏向のない視点で中国を理解するということでした。この目的を踏まえた上で、私は自分の中で3つの目的を持って今回訪中しました。

一つは、訪れたことのある中国の都市と今回訪れる都市とを比較することでした。私が訪れたことのある福建省の厦門と、今回訪れた北京と四川の成都を比較して感じたことは、成都や厦門といった地方都市は首都である北京に劣らないほど著しい発展を遂げているということです。今回訪れた都市の至る所でレンタルバイクを目にすることができたことや街中のごみ箱に分別マークが描かれていたこと、またどの都市でも水回りが弱いことから、中国の都市における生活水準などの差は私が想像していたよりも小さいと感じ、中国の目覚ましい発展に感嘆しました。

二つ目の目的は、中国の学生と交流することを通して、今後の日中関係において私たちに何ができるかを考えることでした。私は日本人学生として中国を理解するつもりで中国を訪れましたが、中国の学生は中国のことを伝えようとすると同時に日本のことも理解しようとしてくれるように感じ、感銘を受けました。私の周りの大学生は、中国に無関心であったり、あまり良い印象を持っていなかったりする学生が多いです。しかし中には、今回の訪中団のように、自らの

意志で中国を訪れ、直接中国の学生と交流することや生活文化に触れることを通して、中国への理解を深めようとする学生もいます。それは中国側の学生も同じなのではないかと感じました。今回交流させていただいた学生の方々は、もともと日本に関心がある学生が大半であったと思いますが、日中両国の学生の一部であったとしても、お互いに関心を持ち尊重し合い、直接交流することができたということに意義があったと感じます。今回の訪中で出来た日中の大学生の繋がりが今は小さなものであったとしても、今後日中関係に大きな良い影響を与える可能性を秘めていると感じています。この繋がりを絶やさないことが今の私たちができることであると考えました。

そして三つ目の目的は、中国の優れている点を学ぶことでした。私が印象に残ったのは、北京創業公社投資発展公司与青少年行動中心・青少年宮を見学したことです。ベンチャー企業へ様々な支援を行う北京創業公社投資発展公司は、中国の複数の都市にプラットフォームを設け、中国において起業を身近なものにし、延いては中国の発展に大きく貢献していると感じました。また、成都の青少年行動中心・青少年宮は地域の人々への様々な支援や活動の場を提供することで、市民の生活を豊かにしていると感じました。特に青少年行動中心・青少年宮では、DV被害女性や居場所のない子どもたちなどの社会的弱者を受け入れる体制や精神医療が日本より進んでいることに感嘆しました。このような中国の優れている点を日本人に伝えることは、日本人の中国に対する無関心や良くない印象を払拭することにつながるのではないかと考えました。

今回の訪中全体を通して私が感じたことは、日中関係は私たちが思っているよりも悪くなく、日中両国の相互理解がより深まり、友好的な関係が発展する日はそう遠くないのではないかと思います。日中大学生千人交流大会で横井裕駐中国日本大使がおっしゃったように、日中両国の親近感から生じる過度な期待によって互いの違いを否定するのではなく、違いがあることを理解し合い、その違いを尊重し合うことが今後の日中友好にとって必要であると感じました。

日中国交正常化 45 周という節目の年を迎え、隣国隣人同士である日本と中国の関係がますます重要になっている今、日中友好大学生訪中団の一員として訪中できたことは私にとってとても良い経験となりました。この経験を今後に生かしていきたいと感じたと同時に、以前から持っていたけれど諦めかけていた中国へ留学してみたいという思いが強くなりました。留学を実現できるか今はわかりませんが、日中関係の当事者としての意識はこれからも大事にしていきたいと感じました。

◆私は今まで中国を訪れたことはなく、今回の日中友好大学生訪中団の一員としての訪中が初めての中国への訪問であった。今回私がこの訪中団に参加を希望したのには、第一に中国を自分の目で見てみたいという思いがあった。私は大学では法学部政治学科の国際政治コースに所属しており、国際政治に関する勉強が大学生活における学習の軸となっている。そこでの学習を通して、今現在中国が国際的な影響力を着々と拡大させていることを実感した。パクス・アメリカーナに

代わるパクス・シニカの時代の到来というような議論も何度か講義で登場してきた。しかし、目覚ましい成長の一方で中国には依然として多くの問題点が存在しており、パクス・シニカの時代の到来のようなことは考えられないという意見も多いようだ。テレビや新聞などのマスメディアによる中国関連の報道を見ていると中国に対して否定的な視点に立ったものが多いように感じるし、私自身もどちらかと言えば中国に対してマイナスイメージを持つようになっていた。しかし、冒頭で述べたように、私自身が中国を訪れたことはなく、自分の目で中国の現状を見たわけではない。こうした中で、他者の捉える中国像をそのまま受け入れるのではなく、自分なりの中国に対する考えを持つきっかけとするために今回の訪中団への参加を希望したわけである。

また、今回の訪中団の活動には中国の大学生との交流が比較的大きな割合を占めていた。私は、母が韓国人ということもあり、外国の人々との交流を通してお互いの国のことを学び、良いイメージを共有することの重要性を人一倍理解しているつもりだ。中国の大学生と交流を通して良好な関係を築き、極めて微力ではあるだろうが、少しでも日中友好の力になればという思いもあった。

以上のような期待を込めて、私は今回の日中友好大学生訪中団の活動に参加させていただいた。私の力不足もあり、思い通りに全てをかなえることができたとは言い難いが、それでも多くの点でためになる訪中となったとは言えるだろう。

まず第一に、自分自身の足で中国の地に立ち、現地の様子を自分の目で見る事が出来た。中国の面積は非常に広く、人口も多い。今回の約一週間の訪中では当然のことながら見る事のできなかった面がほとんどだ。中国に一か月程度留学した経験があり、今回訪れた地域以外にも行ったことのある友人によれば、今回は主に中国のきれいで先進的な地域が視察の対象となっていて、発展途上の地域との格差は甚大なものであるということであった。そうした点では、中国の現状を十分に見れたとは言い難いかもしれない。しかしながら、北京はもちろん、あまり発展している印象のなかった成都でも、日本と遜色のないどころか日本の地方都市よりも発展していると言えるような様子を見れたことは大きな収穫であった。トイレや風呂などの水回りの設備は、普段日本の優れた環境に慣れ親しんでいる私にとってはやはり劣っているように感じられたものの、日本の水回りの環境がいかに優れているのかを再確認するきっかけとなったし、中国の更なる成長の伸びしろを感じるきっかけともなった。また、個人的に興味深かったのは、持ち物検査の厳しさである。飛行機に持ち込むものはもちろんだが、地下鉄を利用する際にも持ち物検査が行われることは衝撃的であった。しかし、テロ等が多発する現在ではそのような厳重な検査が日本でも必要なのかもしれない。

中国の大学生と交流について言えば、特に印象に残っているのは西南交通大学日本語学科のある学生との会話だ。日本語学科とはいえ、正直そこまで高いレベルの日本語力はないだろうと考えていたが、予想していたよりも遥かに流暢に日本語を話し、また日本文学に対する知識も並大抵の日本人以上のものであった。一番好きな物語は源氏物語と言い、源氏物語について熱く語り始めた際には自分自身の日本文学に対する知識の浅はかさを恥じたほどである。中国の大学生の

学習量の多さ、知識の豊富さには驚くことが多かった。そのほかにも、大学生との交流を通して中国のことを知ったり、もっと知りたいと思えたりしたことは大きな意義のあることであっただろう。これからも、機会があれば再び訪中するとともに、継続的に中国のことを調べ、より中国に対する理解を深めていきたい。

◆私は今回の訪中体験を通して中国に対して感じたことが主に2つあります。

1つ目に、中国は思っていたよりも遥かに日本に対して友好的であるということです。訪中前、私は歴史の見解から日本をあまりよく思っていない中国人が国民の大半なのではないかと思っていました。しかし今回実際に現地の人と接してみたら、中国語が話せない私とも一生懸命に意志疎通を図ろうとしてくれる優しくて親切な人ばかりでした。中には、ネームカードを見て私が日本の学生だと知ると興味を持ってむこうから話かけてくれる人もいました。約1週間の訪中で北京大学、西南交通大学で出会った学生たちのみならず、ホテルのロビーで出会ったおばさん、ホテルで朝食を作ってくれたコックさん、飛行機で席が隣だったおじさんとも連絡先を交換するほどに親睦を深めることができました。私が今回出会った人がいい人ばかりであったのも事実であると思いますが、訪中で出会った素晴らしい中国人たちの影響で私も中国に対して前よりも有効的な気持ちで接するようになれました。私1人の感情では政治に影響を及ぼすことはできませんが、私のように中国を有効的な気持ちを抱く日本人、日本に有効的な気持ちを抱く中国人が増えれば、やがてそれは民意となり両国の政治にも関与すると思います。だから、訪中団のような日本人と中国人が交流し、互いを理解し、認め合う場を作っていくことが、日中両国の外交的な友好関係につながるのではないかと思います。

2つ目に、日本のソフトパワーが中国の若者が日本に対して持つ印象に対して大きく貢献していることです。私が親しくなった中国の学生5人は5人とも日本で有名な映画、アイドル、歌、アニメといったポップカルチャーに関心を持っていて、日本語を学ぼうと考えた動機がそこにあったと言っていた子もいました。私もそういった話題に興味があり、彼らと日本のポップカルチャーについて話すととても盛り上がりました。中国の学生のほうが私よりも詳しい分野もあり、驚かされました。私は外国人とも日本文化を話題に盛り上げられることを非常にうれしく思いました。また、言語の壁にとらわれずに他国の文化に関心を持ち、積極的に日本文化を楽しんでいる彼らの姿勢を見習い、私ももっと中国の面白いドラマや、良い音楽などを知りたいと思うようになりました。そこで早速北京から成都と行く飛行機で中国の映画そこで、北京から生徒に行く飛行機では中国の映画を鑑賞しました。すると、外国語であっても、自分の知っている俳優・女優

が出ていなくてもとても楽しめました。今後は今回であった友人から聞いたおすすめ音楽、映画を試していく予定です。日本のソフトパワーとして有力だと感じたものはポップカルチャー以外にも2つあります。第一に日本文学です。私は川端康成の「雪国」という作品において表現される“もののあわれ”という日本独自のニュアンスに魅了され、日本語を専攻すると決めた学生に出会いました。日本の文学的な表現には日本人の感覚でないと理解しにくいものも多くありますが、その独特な表現に関心を持つ中国人も多いようです。実際、北京で行った本屋の店頭には日本人作家の小説が中国語訳されたものが並んでいました。第二に日本が持つ最先端技術です。西南交通大学には日本の青函トンネルの技術を学ぶために日本語を学んでいるという学生がいました。彼は土木学科であるのにも関わらず、自主的に日本語を勉強していて流暢な日本語で私に話しかけてくれました。日本のポップカルチャーではなく、技術に興味を持つ学生とは初めて出会ったのでとても新鮮でした。中国は未だ発展途上国ではあるけれども、これ以上他から支援を受けなくても自国の国力だけで未来を切り開いて行くパワーがあると思います。広い国土と大きい人口を強みとして中国は今後さらなる発展を遂げるでしょう。そんな中国に対して日本はいずれ軍事力、経済力といったハードパワーではたちうちできなくなるでしょう。現在、そして今後も訪中で改めて感じた中国における日本の偉大なソフトパワーは日中友好の重要な柱としてあり続けると思います。

◆私は訪中前、正直中国人に対してあまり良い印象を抱いていませんでした。中国人旅行者のマナーの悪さや、領土問題を始めた外交問題での中国の横暴な姿勢、中国製品の質の悪さなど、私たちが中国として触れる情報には何かしら悪いイメージが含まれがちです。私たちが中国人もしくは中国について語る際には、何かしら不満が含まれることも多いです。私の祖父や大家さんなど高齢者の中には中国人を露骨に嫌う人も多くいます。しかしながら今回訪中をして気づいたのは、私たちがいかにそのようなマスメディアの作るイメージに流されていて、本当の中国人の姿を無視してきたかということでした。私たちが人を嫌いになるとき、大抵その人の悪いイメージだけを見てその人を全て理解した気になっています。そして彼らが何か良いことをしたとしてもそれをすぐに忘れるか無視するかして自分たちの昔からの中国人に対する悪い評価を維持しようとしています。しかし、私たちはその悪いと思っていた一面も実は良い一面の裏返しであることを知ると私たちはその人を別の見方で観ることができます。故スティーブ・ジョブズは、人の長所は短所の裏返しで逆もまたしかりだと言いましたが、中国人についてもまさにそうだと思います。今回の訪中で、中国人は私たちと全く同じ人間で、優しくフレンドリーな素晴らしい人々なのだということがよく分かりました。そして何より私が中国人の特徴だと思うのはその合理的

なところですが。別の言葉で言えば、小さいことは気にしないということです。彼らは小さいこともとことん気にする（良い言葉で言えば配慮する）日本人とは逆で、中国人は彼らにとって重要で無いこと、気にする必要のないことは遠慮なく無視できます。これが日本人からしたら配慮の無さと受け取られて中国人の悪いイメージを作っているのだと思います。しかしあくまで個人的に、礼儀を時折過度に重んじる堅苦しさよりも小さいことは気にしない大らかさの方が私には合っていました。それゆえ私は中国人のその特質に早くから慣れ、またそれを好きになることができました。もちろん全ての中国人がこうであるとは思いません。特に今回の訪中で出会った大学生はその一例でしょう。中国の大学生との交流は印象的でした。彼らは私たちと同じ大学生で、将来のこと、勉強のこと、好きなアニメなど巨考え方や意見に共通点がたくさんありました。私はこれまでにないほど中国人に親近感を感じるようになりました。私たち日本人と中国人は今も昔もそしてこれからも隣人として付き合ってきましたし、これからもそうであるはずで、尊敬する宇都宮先生がおっしゃっていたように双方の国民感情は決して良いと言えるものではなく、相互の信頼醸成が今以上に必要であった時は無いでしょう。ましてや相互の不信感は戦争につながる重大な要素であります。歴史問題や領土問題で対立が目立つ日中関係ですが、私たちはそれらの政治的対立に問われることなく、民間での友好をさらに促進し、本当の友情を育まなければならないと思います。

◆このたびの訪中は、私が考えていたよりもずっと有意義なものになりました。一週間の北京・成都での滞在を通して、中国そのものや中国人に対して抱いていた疑問を、解消することが出来ました。

訪中前の私には中国人の知人がおらず、中国について知る手段は、ニュースと一部のテレビ番組のみでした。つまり、私の得られる情報は全て他人によって選ばれたものであり、果たして自分の見ているのは本当の中国の姿なのか、不安を感じずにはいられませんでした。例えば、中国人の対日感情については、実際の所いいのか悪いのか全く分かりませんでした。

しかし訪中を通して、私の中のこのような思いは変化しました。依然として国同士の間には様々な問題があるかもしれませんが、それでも、人と人とは分かり合えると感じられました。中国の学生たちとの交流はとても楽しいもので、日本語学科の方々がとても上手に日本語を話していることには驚かされました。もちろん、私たち日本の大学生に『良い顔』を見せようとしていることも考えられますが、彼女たちの性格まで疑うことはできません。

中国から帰国し、これから私自身はどのように中国と関わっていくのか。正直なところ、まだ決めかねています。私たちが普段ニュースで聞いている、領土問題を含む外交問題を、政治家の

立場から取り組むのか。それとも、一人ひとりに焦点を当てて、交流やマスメディアの立場から友好を深められるよう働きかけるのか。

政治家として日中両国間に横たわる諸問題に取り組むことは、両国の友好には欠かせないものであるかもしれません。しかし、政治的・外交的問題の解決が国民同士の交流に結びつかなければ、それは本当に『友好化』したと言えるのでしょうか。表面上は仲が良くても、心が通っていなければ、それは不十分だと感じられます。逆に、草の根交流が盛んになり、人々の仲が良くなったとしても、それだけでは政治的問題は解決しないでしょう。交流した人々が解決の為に立ち上がって、初めて国同士も友好関係を築くことが出来ます。どちらも長所と短所の両方をもち、互いを補い合う関係にあります。自分がどちら側として働いていくのかは、大学で中国について学ぶ中で決めていきたいと考えています。

宇都宮会長がおっしゃっていたように、現在の日中関係は良好とは言えないように感じます。私は、少しでもその関係改善に携わる仕事をしたいと考えています。まだまだ知識が足りず、日本が隣国としての中国とどのように接するべきか分かりません。これもまた、大学での学びを通して考えていきます。

今は東京外国語大学の特性を生かして、自分の専攻言語である中国語を学び続けていくこと、それと同時に、中国人に限らず多くの留学生と関わっていくことが、私にとって必要であると感じています。そうすることで自分が大学卒業後に、どのように日中関係に携わっていくのかを、広い視点を持って考えることが出来ると思います。

最後に、中国の文化や人々に接して、中国について考える素晴らしい機会を頂き、日中友好協会の皆様と訪れた大学の関係者皆様に心からの感謝をお伝えします。他大学の友人や中国の学生との出会いは、今後も続いていくものになるだろうと感じています。冒頭でも述べた通り、この度の訪中は私にとって、将来について考える大変良い刺激になりました。次は留学生として、また更なる知識と中国語運用力を備えて中国を訪れたいです。

◆私は、東京外国語大学で中国語を専攻していますが、今まで特に中国に行ったことも現代中国に対して何かしら興味を持ったこともありませんでした。そもそも中国語を専攻した理由は、漢文や中国史に興味を強く持っていたからで、今回の訪中も成都と北京という2つの歴史都市が訪問先であったため、実際に史跡を訪れてみたいというのが応募の動機でした。しかしながら、中国を実際に訪問したことで、現代中国の様々な側面を実際に見ることができたのが貴重な体験で

あったと思います。

北京市は東京とは異なった整然とした区画の中に立派な建物が聳え立ち、大通りには多くの車やバスが忙しく行き交っていて、急速な経済発展を遂げて大国となった中国の首都の独特な雰囲気を感じることができました。また北京大学での交流では、現地学生との交流を通して親交を深め、日中大学生千人交流大会においては、両国要人をはじめとした方々の日中友好への思いを知ることとなりました。特に印象深かったのは(確か)駐日大使のお言葉で、「同じ面積の丸と四角形はどのように重ねても必ず重ならない部分が出てくるが、その重ならない部分を殊更に取り上げて互いを批判し合うのではなく、重なってる部分をお互い尊重し合うべきである」というような内容のことをおっしゃっていました。この言葉は全くその通りだと思い、日本と中国は確かに政治的に異なることも多いかもしれないが、文化面をはじめとして地理的近接性も相まって古くから多くの影響を与え合っているゆえに、共通項もかなり多いはずです。日中関係において最も重要な課題は、両国国民が互いの共通性を深く理解することであり、そうすることによって国民感情が長期的に安定して日中関係の安定につながるのではないかと考えるようになりました。加えて私は東京外語班の代表として、北京市副主席景俊海氏への表敬訪問に同行したり中華人民共和国副総理劉延東氏との記念撮影に参加したりとまたとない機会を頂くことができました。このような交流を通して多くの人の意見を聞いたことによって、日中友好に関する考えを多く吸収することができ、自ら考え直す材料となりました。

古くからの歴史都市である成都市には、日本の京都のように趣のある建物が街中に多く存在し、厳かな雰囲気の都市でした。四川省パンダ基地では中国の対外友好政策の一環を成すパンダ達をみて回りました。特に 1970 年代は日中友好の象徴としてもはやされていたパンダですが、こういったところから対中意識を良くしていくのも一つの良い手段であると思いました。西南交通大学でも学生との交流及び成都市総工会東郊群衆惠民サービスセンターでの小学生との交流も楽しく終えることができました。武侯祠や飛沙堰は歴史好きにとっては印象深い場所でした。

総括して、日中国交正常化から 45 年を経た今でも、政治的文脈における日中関係は依然として厳しいままですが、こういった民間レベルでの交流を推進することによって、互いの友好を深めていくことが大切であると強く感じました。友好的な国民感情が両国に浸透すれば政治レベルでの友好も比較的容易に達成できるはずです。世界第 3 位の経済大国である日本と第 2 位の中国がこの東アジアに隣接して存在していることの意味は非常に大きいと思います。両国の友好は東アジアの発展のみならず世界経済を牽引するために不可欠な要素であり、今回の訪中で微力ながらもその一端を担えたことを嬉しく思いました。

◆今回、初めて中国に行き、自分の目で見て、耳で聞き、全身で中国を感じました。この体験は、私の中国に対するイメージを一新するとともに、中国に対する興味を一層掻き立てるものとなりました。

もともと私は中国に対し悪いイメージをあまり抱いていませんでしたが、何となく中国の人は気が強くて意地っ張りの人が多いのかなと思っていました。しかし、それはただの私の偏見であったことに気づかされました。今回の訪中で出会った中国の人々は、みな思いやりのある本当に優しい人ばかりでした。ここで、彼らの優しさに触れた二つの体験を紹介します。

一つ目は、北京に着いた翌日に起きたことです。私は同室の子と二人で朝食を食べ終えた後、エレベーターで自分達の部屋へ戻ろうとしていました。その時私たち二人はエレベーターの使い方をまだよくわかっておらず、行きたい階のボタンを押しても全く反応しなかったため困っていました。そこへ一人の中国人の男性が乗り込んで来て、その人は私たちが困っている様子を目に留めると、ボタンを押す前には部屋のカードキーをかざす必要があることをジェスチャーで伝えてくれました。全く面識もなく、言葉の通じない中、身振り手振りで教え下さり、笑顔で去っていった彼に、私は感動し鳥肌が立ちました。

二つ目は、西南交通大学での絞り染め体験の時のことです。私はペアの子と二人で絞り染め体験を行うことになり、準備をしていました。絞り染めの模様をうまく作るには紐できつく縛ることが重要なのですが、それには意外と力が必要でした。そんな時近くにいたある中国人の男子学生が、手を貸してくれたり、染料で染めている時も時々様子を見に来てくれたり、染色後の水洗いも、自分から進んで丁寧に洗ってくれたりしてくれました。そんな彼の至れり尽くせりに私は驚き、嬉しいと思うと同時に、水洗いは面倒くさいなと思っていた自分が恥ずかしくなりました。

その他にも、少しでも私たちに興味を持たせようと一生懸命に案内してくれたガイドさんや、私たちを快く出迎えてくれた中国の大学生の優しさの溢れた姿を多く目にしました。また、中国の学生と交流する中で、万里の長城では急な階段を互いに励まし合いながら登り、一緒においしいご飯を食べたり、他愛のないおしゃべりをしたりすると、まったく私たち日本人と変わらないなど感じました。言葉や文化、考え方は異なっても、思いやりや優しさ、共感する心など、日本人と中国人に違いはないところもあるのだと実感しました。

また、今回の訪中を通して、中国の学生はこんなに日本に興味を持っているんだと気づかされました。そして、私ももっと中国のことを知りたい、中国語をもっと話せるようになりたい、そして再び中国に行きたいという気持ちが強くなりました。私は将来どんな形であれ、日本と中国を繋ぐ架け橋になる存在になりたいと思い、そのためには今後語学やその他の勉強に一層の努力

が必要だなと感じました。

最後に、どんな国にも長所と短所のどちらもあります。しかし、日本人はどちらかという中国の短所に目がいつてる人が多いと感じます。そして、そうなる要因の一つはメディアだと思います。日本人はメディアが報じる内容をそのまま鵜呑みにするのではなく、それは中国の断片でしかないんだと気づくことが大切だと思います。そして、中国にも良いところがあるんだという気持ちを持つことが、今後の日中の友好関係をさらに発展させるために重要だと感じました。

◆私は、今回日中友好大学生訪中団の一員として、参加させていただき、多くのことを学んだ。今まで一度も海外に行ったことのなかった私は、海外に関する情報を日本で報道されるニュースから受け取ることがメインの生活を送っていた。特に、中国に関しては、歩行者優先でない社会であり、車がクラクションを鳴らしながら道を通っている映像をよく見かけていたため、少し怖いイメージを持っていた。しかし、実際に中国を訪れ、生の中国を見ることで、今までの中国に対する認識が間違っていたことに気付いた。中国の方々は、私たちに道を教えてくださったり、日本人であることが分かると、興味をもって話しかけてくれたりした。中国の方々の優しさや温かさに直接接触したことで、今まで実際に出会ったことがないのにも関わらず、勝手なイメージで少し怖いと決めつけてしまっていたことが、どれだけもったいないことなのか分かった。

また、私の友人で、中国の方が親戚にいる人がいた。その友人から、中国の方の中には、日本人を信頼していない人も一定数いるということを知っていた。私が今回この訪中団に参加した一番の目的は、このように日本にあまり良い印象を持っていない中国の方と接することで、日本の良さを少しでも知ってもらおうことであった。しかし、実際に中国を訪れたことで、日本に悪い印象を持っていらっしゃる方ばかりではないということに気付いた。実際、今回訪中団と関わってくださった方々は、日本の文化や日本人、日本語に興味を持ってきており、日本人が勝手に日本は嫌われていると思込んでいた所があったのだろうと感じた。確かに、今回出会わなかった方で、日本に対してあまり良い印象を持っていない方は間違いなくいらっしゃると思う。だが、今回日本に興味を持ってくださっている方に出会ったことで、ニュースなどで、一部の偏った意見だけを鵜呑みにするのではなく、実際に中国を訪れてみたり、中国人の方と接したりすることで、見えてくる部分が必ずあるのだと思った。

私は、上で述べたような訪中団の経験を通して、せつかく日本と中国は隣人の関係にあるのに、お互いに誤解してしまっている部分が多いように感じた。だから私は、まずは先入観で相手を見るのではなく、実際に相手と接することを心掛けることで、誤解を解くことができるのではないかと思う。特に私たち若い世代は、これから日本と中国をつなぐ架け橋になっていくと思う。そのときに、実際お互いの国について知りたいという思いを持たなければ、日中情勢もうまくいなくなってしまうと感じる。日中関係だけに関わらず、国際情勢全般にいえることであると思う。

が、相手の文化を尊重することも大切だと改めて感じた。特に、日本と中国は、近い関係であるが故に、自国との文化差からうまく関係が築けない部分があるのではないだろうか。今回生の中国を見たことで、話し方や食生活、文化など様々なことが日本と中国で異なっていることを感じた。しかし、色々な面で差異はあるものの、話せば分かり合えることも多く、たとえ文化が異なっているとしても、自国の文化が絶対ではなく、他国の文化を尊重する気持ちが大切なのだと感じた。

これらの経験から、わたしはこの7日間で、自国の人以外と関わることで、自分の世界が広がるのだということを感じることができた。今まで、私は日本から出ることがなかった上、おそらく今回のような機会がなければ、自分から海外に行こうとは思わなかったのではないかと思う。しかし今回訪中団に参加したことで、今までの世界観がどれだけ狭くもったいなかったのか気づくことができた。この経験は、自分の人生の幅を広げてくれたものだと思う。今回このような機会をいただけたおかげで、海外の方と関わる機会をより増やしたいと思うようになった。この私の中での心の変化を忘れずに、残りの大学生活を有意義に過ごしていきたいと思う。

◆今回の訪中は私の中国に対するイメージを大きく変えた。この訪問は私の人生において間違いなく有意義な経験であった。はじめに、このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に感謝の意を表明したい。

さて、私がこの日中友好大学生訪中団に参加しようと思ったきっかけは非常に単純で、私が国際関係を専攻しているからだ。現代の国際関係を学ぶにあたって、中国の政治経済は決して無視できない存在である。それを、自分の肌で感じるチャンスが目の前にあったので、掴まない手はないと訪中団への参加を強く希望した。近年の日本では、中国人観光客のマナーの悪さや、中国産製品の品質の問題、政府による通信規制、また、環境汚染などの話題がニュースなどで多く取り上げられ、日本人の中国に対するイメージが芳しくない。私も偏見は持ちたくないが、あまり良いイメージは持っていなかった。家族には「なぜ、わざわざLINEで連絡も取れないようなところへ行くのか。」と言われてしまった。私の家族の発言には日本人の本音を感じた。

しかし、実際に訪れた中国は私の持っていた印象とはかなり違った。確かに、貧富の差やそれに伴う学力の格差があり、街で全く英語が通じなかったことや、露店やトイレの衛生面などに課題を感じたが、それをはるかに上回る魅力にあふれた国であったというのが正直な感想である。中国の魅力について最も印象に残っている三点を以下で述べる。

まず、「支付宝（アリペイ）」と呼ばれるスマートフォンを使ったオンライン決済サービスの普及率に驚かされた。かなり小さな店でも、あらゆるところでこのサービスを利用して決済ができ、非常に効率的であると感じた。街のいたるところに置かれているシェア自転車を使うにも、バーコードをスキャンしてこのアリペイで支払いができるので気軽に利用することができる。日本でこのようなサービスを始めても、便利ではあるが、ここまで普及させるのは難しいのではないかと考える。中国の国民は変化に対して柔軟であると感じた。

次に、北京青年創業公社で目の当たりにした若者の起業支援の手厚さである。ここでは、低価格でテナントを貸し出すだけでなく、資金や経営の援助などを手厚く行い、若者の起業を促進している。実際に覗いた企業では若者がマックブックを片手に打ち合わせをしており、まるでアメリカの起業家に関する映画のワンシーンのようであった。また、机一つからでも貸し出しをしており、同じように援助が受けられるというのだから驚きであった。展示されている発明品はどれも斬新かつ革新的で、おもしろいものばかりであった。北京大学や、西南交通大学で見学した研究施設もまた同様にかなり高度な技術開発がなされていた。このように研究や開発に打ち込める環境が整っているのも若者の意識が高く、大きな活力を感じた。中国の経済成長が伸び続けているのにも納得である。このままでは日本はどんどん中国に置いていかれてしまうのではないかという危機感すら覚えた。

最後に、中国の街並みについて述べる。北京、成都の二都市を観光して気づいたことは、高度に近代化した建物と長い歴史を持った壮大な遺産を見事に融合させた街であるということだ。古きよきものを残しつつも、かなり近代化された街という、ここまで大きなコントラストは見たことがなかったので非常に関心を持った。ガイドの方の話によれば、取り壊されてしまった城壁があり、後悔しているとのことで、残念ではあるが、日本の慎重な姿勢に比べて、中国の、進化を恐れない積極的な姿勢は長所であると感じた。

この訪中のおかげで自分の目で見て、肌で感じることでできた中国は電子マネーにせよ、産業にせよ、都市開発にせよ、国が、国民が伝統を大切にしつつも、昔ながらのやり方に固執せず、新しいものをどんどん受け入れていく柔軟性と進化や変化を恐れない積極的な姿勢を感じた。それが日本も見習うべき中国の強みであろう。また、交流の中で多くの人々の温かさに触れ、伝統に触れ、美味しい料理を食べることができた今、私は中国にすっかり魅了されている。この素晴らしいさと日本が中国に見習うべきことを少しでも多くの日本人に伝えることがこの訪中団に参加させていただいた私の使命だと思う。日本と中国がより友好を深めていけることを願いたい。

◆今回、「日中友好大学生訪中団」の一員として参加出来たことは、本当に素晴らしい体験だった。初めての中国で不安だらけだったが、実際に自分の目で見て、生の中国を知りたいと思い参加を決めたのがきっかけである。漢字が好きで中国に興味を持ち、大学に入ってから中国語を学び始めた。最初は、覚えることが多くて苦戦したが、知らなかったことが分かる喜びを通して、もったときちんと知りたいと思うようになった。しかし、日本で報道されているニュースを見ると、公害や反日など、負の部分が目立って多く取り上げられているのが気になっていた。そのため、中国に対して親近感を持つ人より、むしろ嫌悪感を抱いている日本人が多くいるというのを新聞やTVで見かける度に、それは一方的な見方しか出来ていないからだと思い、複雑な感情でいた。物事の一部しか見ていなければ、全体を把握することなど出来ない。ましてや、批判するだけで称賛すべき点を見落としていては、溝が深まるだけで相互理解など出来ない。「日中友好」のた

めには、まずは知ることから始めないといけない。しかし、それは偏った見方ではなく、様々な角度からのものでなければいけない。出発日までは心配であったが、現地に着くと一気に吹き飛んで、何もかもが新鮮で感動した。

まず、バスで一緒になった中国の学生は勉強熱心で、日本語をととても流暢に話し、日本文化にも精通しているのには驚いた。そのおかげで、すぐに打ち解けて会話も弾んだ。また、基本的には人懐っこいが、きちんと自分の意見を持ち芯の強い人が多いのも印象的だった。強い意見には中々反論が出来ず、愛想笑いでごまかしてしまうことがある私にとっては、羨ましく思うと同時に、こうなりたいなという目標が出来た。また、せっかく中国に来たのに日本語で話してばかりではいけないと思い、簡単なものでも良いから少しずつ中国語を使うようにしてみた。そうしたら中国の学生が、とても喜んでくれ、もっと現地の言葉で話せるようになりたいと思った。日本でずっと中国語の勉強をしていて、文法や単語をたくさん詰め込んでも、実際に現地に行って使う機会が無ければもったいない。今回、訪中団の一員として中国に行けることで、拙いながらも自分の知っている言葉を駆使して意見を伝える大切さを知った。また、自国について知らないことが多々あったので、中国を知る前に日本のことをよく知らなければ、自分の意見を述べること、異文化交流など不可能である。それは、日本にいたら中々意識出来ず、気づきにくいものであり、自分の勉強不足を痛感した。逆に、今までは意識しなかったが、日本の方が中国よりも優れている点、劣っている点などに気づけたのは、現地に行ってみないと分からないことだった。

また、中国の学生だけでなく、今回の訪中団で一緒になった同世代の日本の学生からも良い刺激を受けた。素晴らしい機会に参加出来た上に、人にも恵まれたのは、本当に幸せなことである。中国語を頑張って留学をしようとしている人、日本と中国の架け橋になろうと努力している人など、そういう素敵な人に出会えたことで、広い世界を意識出来るようになった。誠意を尽くし、常に人のことを考えて行動する姿勢に、朗らかな人柄。心温まるおもてなしで歓迎してくれたことなど、滞在する内にどんどんと中国が好きになっていた。最初、中国に行くことに対し期待もある一方で、どうしても負の部分のイメージが強かったため不安だったが、実際に自分の目で現地を見ることで、こんなにも素敵な場所だったのかと気づけたことが嬉しい。向こうで「朋友」を歌った時に、全員の心が一つになるのを感じた。今はまだお互いに正の部分よりも、負の部分を見がちかもしれないが、きっと日本と中国は分かり合える。そんなことを「朋友」を歌っている時に感じた。だからこそ、私たちはこれからもお互いの良いところも悪いところも含めて総括的に知っていかなければならないと思った。「日中友好」は幻想ではなく、いつの日か現実のものになると信じている。

◆一般的に隣国や同人種、似ている者同士は歴史上対立する事が多いと言われている。ギリシャ留学の際も、私はギリシャ側そしてトルコ側の双方から彼らの長い衝突の歴史を伺った。日本と中国には切っても切れない程の深い関係があり、両国は長い歴史の中である時にはプラスの影響

や刺激を与え合い、他方ではネガティブな相互関係を有している。私の場合アメリカ滞在中にできた中国人の友人が多かった為、中国に対して特に悪いイメージは持っていなかったが、やはり日本におけるメディアの報じ方や教育内容に問題があるのか、我々の潜在的な中国へのインプレッションは良くない事が多い。今回日中友好大学生訪中団へ応募したきっかけというのは、多くの人を持つ中国に対してのこのステレオタイプやバイアスを少しでも削減し、今後の将来を担う我々が一使者として、出来る限り日中友好を育めるよう努めたいという思いからであった。私たち学生は背景に背負っているものや結びついているものが無く、学びや気づきをありのまま吸収できる。また発言する際にも利益や不利益等を考慮せず、ある意味で純粹無垢であると言えよう。学生同士が交流する事の意味はここにもあるのかもしれない。

まず北京訪問時に感じた事、それは人口の多さというのはやはり国の繁栄に必要な不可欠であり、若者には中国社会全体を引っ張っていくという強いパッションがあるという事実だ。それは、夢を夢で終わらせず追いつけるというある種「人間らしい」生き方であった。例えそれが小さいアイデアだとしてもただ単に否定するのではなく、一度挑戦させ後押しするという社会が如何に彼ら自身の、そして中国経済の成長を促すかを肌で感じた。日本社会は年功序列がいまだに根付いており、どうしても年齢とともに社会的地位を確立するという風潮が残っているように思う。また島国という性質が影響しているのか、現状に満足しがちで隣国と切磋琢磨する事が難しい。中国や韓国等へ反感感情を持つのではなく、互いに良い所を認め尊敬し合い、そして直すべき点を指摘し合い高め合うというあり方を我々は本来目指すべきではなかろうか。メディアでの報じ方を見てみると西欧諸国に対しては肯定的イメージを、そしてアジア諸国に対しては否定的或いはマイナスな報道も多いように私は思う。しかし、隣国を愛し、友好関係構築に力を入れるからこそ他の国や地域ともより良い交流や関係を築ける。中国のこの「上へ上へと目指す向上の社会」を自身の目で見て感じる事は多々あった。パーフェクトな国は無いが、互いに良い側面は尊重し取り入れるべきだと思う。次世代を担う我々大学生が、今回中国社会に身を置き、気づきを得た事に感謝するばかりである。今回の貴重な機会が無ければ知らなかった事であるので、我々が日中友好のアンバサダーとして如何に行動に移すかが今後の責任であると強く思う。

成都では自然と人間との交わり、共存がどれだけ重要かを痛感した。沢山の川によってかつては水害も多かったもののそれを逆手に取り、人々は水と共に繁栄し感謝してきた歴史がある。成都是料理、劇、動物、偉人、お酒等様々な特徴的な歴史や風土を持ち、他の都市や地域とは異なり非常に興味深かった。ある国の首都やメインの観光地に行く満足する人も多いが、その国の中にも多様性や差異が存在しているので、今回成都を訪問する事ができ更に中国への理解を深められたように思う。ここでも中国という国の力やスケールの大きさ、規模の違いを何度も痛感した。成都規画館や環球中心、西南交通大学はその例である。現在どの国でも都市に人口集中過多となる傾向が見られ、中国では沿岸部の繁栄が際立っている今日、私は成都に来てこの自然と人との素晴らしいコンビネーションに驚いたのが正直なところである。馬恵麗さんは何度も私に「希和さん、顔に『帰りたくない』の文字が書いてありますよ」とおっしゃったが、その通りで私は

本当に成都に残りたいと心から思った。それは恐らく西南交通大学や青年センターでの中国人との交流があったからだ。

千人交流大会の際に中国國務院副総理が「国の交わりは民の交わり。民の親しみは心の信頼である。青春は美しく、友人無くして青春は語れない。つまり青春の中での1番の花は友人であるのだ」というお言葉を下さった。また、横井大使も「若者の力が次の社会や経済を動かす。丸と四角は重なり合う所もあればそうでないところもある。共通点は喜び合い、差異は尊重し合い違いを楽しむという理解が大切」と述べていた。まさに今回日中友好大学訪中団の目的はこれであると思う。メディアでどのように報じられようが、自国において周囲が何を言おうが、結局人は人によって動かされる。1週間中国を訪問する中で皆さん沢山の愛を持って接して下さり、また自身の足で歴史と現状を知り、私は中国という国に対して感謝の心を抱いた。同時に日本における、中国における、双方の勘違いやステレオタイプ、偏見をなくしていきたいと心から願った。この貴重な経験を終えた今こそ行動に移していく時であり、この中国に対しての感謝の想いは永遠と燃やし続けようと誓った。今後はもっとコスモポリタンに近づけるよう、あらゆる国や地域を訪問し現地の方々と触れ合い、多面的に物事や外交関係を考えつつ日本と中国、そして日本と世界を繋げる架け橋になれるよう夢を追い続けます。本当にありがとうございました。謝謝！

◆初めての中国訪問では驚きの連続でした。万里の頂上や、都江堰・パンダ基地など1週間を通して訪れた観光地は非常に魅力的な場所ばかりでした。さらに、その周囲・背後にある、中国の街並みや観光地に到着するまでの交通システム、観光地の周囲にある“富国強兵”“富強・民主・文明・和諧”“思想道德教育”などと書かれた看板やパネル、街の人々の様子などを見て、日本との差異を発見することも私にとって非常に新鮮でした。中国で過ごす中での、自動車優先の道路や地下鉄を利用するためには荷物検査が必要であることなどの中国の交通システム、水回りなどのインフラシステム、食事や、ものの共有方法（中国ではシェアブームとなっており、シェアハウスはもちろんのこと、自転車・バスケットボール・ベンチなど様々なものをシェアする文化がある）など様々なことが、日本で私が当たり前だと思っていたこととは異なっており、中国の生活様式に触れた1週間は新しいこととの出会いばかりでした。

訪中のプログラムの中で特に印象に残っていることがあります。それは北京大学での日中の学生交流です。私が交流した北京大学の学生はどんな話をするにも必ず意見を持ち、相手に伝えることができていました。大学見学やランチタイム、千人交流会では多くの北京大学の学生と話す機会がありました。交流中には「北京大学の印象はどう？」「この施設の感想は？」「日本の大学との違いは何？」など質問を受けました。私が感想を伝えられずにいると、「建物・人・施設、何かしらあるでしょう？」と、聞き返されることもありました。また、私自身の感想を伝え、私から質問をすると必ず北京大学の学生からは質問に対する答えと意見が返ってきました。私は分からないことを相手に聞くことや、相手の気持ちを推測して対応することにはあまり抵抗はありま

せんが、自分が感じていること、考えたことを相手に素直に伝えることが苦手です。交流を通して、彼らのように的確に自らの意見を伝える姿勢を学びたいと思いました。

新しい発見が多くあった分、中国訪問を経て、中国に対するイメージが全てポジティブになったわけではありません。実際に現地を歩き人と接する中で、中国の素敵な部分だけでなく、ネガティブな側面にも出会いました。しかし、この1週間を通して中国に対するものの見方が大きく変化しました。中国を訪れるまでは、何かあれば「中国だからしょうがない」「中国人はね」と、ニュースや大学での勉強から得た中国に対する知識と印象のみで判断していました。しかし、実際に中国を訪れて、現地の人との交流を経て、テレビや書物で見えている部分だけが中国ではないと実感しました。「中国人は〇〇だ」「中国は〇〇だ」と決めつけるのではなく、1人1人、個々を見ることが大切であると感じています。今回のプログラムを通して、中国についてもっと知りたい、もっと交流したいという思いが強くなりました。訪中団の1週間のみで終わらせるのではなく今後も中国・中国語の勉強を継続させて理解を深めていきたいです。また、今回のプログラムで出会った日本と中国の仲間達との友好も繋げていきたいと強く思います。

◆私は中高生の時から中国人の反日デモの様子や中国人のマナー問題のニュースを見ていて、どうしてお互いにお互いの国を良く思っていない人が多くいるのだろうかと思っていた。またそのような報道や話のみを聞いて中国という国を判断してはいけなさと考えていた。そのため今回、訪中団が派遣されると聞いてこの機会を利用して、実際に中国の同年代の学生たちと触れ合ってどのような人たちなのか、日本をどのように思っているのかを聞きたいと思い参加することにした。

そして今回の訪中では中国側の学生と触れ合う機会が多くあった。我々が訪れたのは北京大学と西南交通大学である。二つの大学の学生さんが共に日本語や日本にとっても興味を持っていて、日本の学生よりも外国語を学ぶ意欲が高いように感じた。北京大学では、日本語専攻の学生さんとアニメやドラマの話をする事ができた。この北京大学の訪問で、言語とはコミュニケーションを取るための手段であり、言語を学ぶことによってその国への理解をより深めることに繋がるのだということを感じた。今は中国の学生と日本語で連絡を取っているが、私もこれから中国語を勉強して中国という国について文化について勉強したいと思った。

私たちは、欧米の人たちとの文化の違いは比較的受け入れられる。なぜなら肌の色や顔が明確に違うからである。しかし、中国や韓国といったアジアの国々に対しては、同じアジア系として同じ価値観を持っていることを期待しすぎてしまうのかもしれない。同じアジアでも文化はそれぞれの国で全く異なり、それを理解しあうことがとても重要であると考え。その第一段階としてこれからの世の中を担う私たち大学生が交流を深めることがとても大切であると考えようになった。実際に中国の人と会って優しさに触れて、改めて人から聞いたことや他の人の偏見のある意見などに惑わされるのではなく、自分の目で見て自分で考えたことを信じていこうと思った。

また、中国を訪れて日本と違う文化も体験することができた。私が気になったのは、下水システム、トイレ、道路、地下鉄、円卓である。下水システムやトイレは中国ではあまり発達しておらず不便であった。日本の技術を取り入れて改善することは不可能なのだろうか。一方、道路や地下鉄では日本より整備が進んでいた。道路には柵で仕切られた自転車バイク専用道路があった。また北京では、交通渋滞を避けるため車のナンバーによって走れる日を分けていたり、シェア自転車が道中にあつたりと日本では見られない光景が広がっていた。これらは、排気ガス削減にもなり日本でも取り入れられると考えた。地下鉄では、改札に入る前に荷物検査とセキュリティーチェックがあった。テロがいつ起きてもおかしくなく、東京オリンピックも近づいている今このシステムを日本に取り入れるべきであるとも考えた。そして中国滞在中円卓で食事をしてみて、日本の四角いテーブルと違ってみんなが平等でみんなの顔を見て話すことができることにとても魅力を感じた。日本と中国それぞれに良いところがあり、両国がそれを参考に更なる発展を遂げられるよう努力することが、お互いを尊重し理解することにも繋がると考える。

今回の訪中で今まで日本に閉じこもっていたは知ることのできなかった中国を知ることができた。そして、中高生の頃から興味を持っていた日中の友好関係をきちんと考える機会をいただけた。このことを無駄にせず、これからの大学生活において日中の懸け橋となれるよう様々なことに挑戦していきたいと考える。

このような機会をいただいた身として、今後中国と日本の懸け橋となれるように出来ることをしっかりとこなせるように頑張りたいです。

◆今回、中国を訪問してさまざまなことを経験し、多くのことを吸収することができた有意義な夏休みとなりました。また、中国に対する気持ちや考えなど、訪中する前と後で多くのことが変化しました

まず、中国と中国の人々に対する気持ちや考えの変化についてです。中国へ行く前は、中国に対していいイメージを持っていませんでした。例えば、声が大きくてうるさい、マナー違反をする、空気や街が汚いなどです。しかし、訪中してみると中国のいいところがたくさんありました。特に、驚いたことが4つあります。1つ目は、男性がレディーファーストであることです。北京大学を訪れた際、男子学生と一緒に話しながら歩いているとき、バイクや車が多く通るところでサッと車道側に来て歩いてくれたり、休憩しているときに、お茶を注いでくれたり、自分は座らないで席を譲ってくれました。中国人男性はスマートだと感じました。2つ目は、男女が対等なことです。千人交流会や、夕食時のあいさつなど女性が目立っているように感じられました。日本では、地位のある人は男性が多く、男性があいさつをして、女性はサポートをする傾向が多いが、中国は男尊女卑などなく女性も男性も対等だと思いました。これから就職活動が始まり、対等に仕事をしたいと考えているわたしには、働きやすい場所のように感じられました。3つ目はとても便利な国であるということです。技術や質、利便性は日本が圧倒的によいと思っていた

が、中国のすごさに驚きました。アリペイや We chat での支払いはとても小さなお店から送金までなんでもでき、モバイクは普通につかわれていて便利でとても驚きました。日本もこんなに便利になればいいのにと中国で思うとは想像もしませんでした。4 つ目は、優しくて日本のことを好きな人が多いことです。中国の人に対しては、気が強くて、怖いイメージがあった。また、歴史的背景から、日本人のことを好ましく思う人があまりいないイメージもありました。しかし、現地で交流した学生の人たちや役員の方々はもちろん、街の人たちも優しい人が多かったです。地下鉄に乗っているとき、おじさんが「日本人(ri ben ren)」と話しかけてくれたり、ほほえんでくれたり、自分が想像していた冷たくて怖いイメージとは正反対でした。実際に現地へ行って、見て体験して、想像通りのところもあったが想像とは全く異なる中国を感じることができました。また、いままでわたしが持っていた中国や中国の人々イメージは、メディアによってつくられたものであると気づきました。

つぎに、これから自分は隣国隣人としてどのように中国と付き合いしていくべきかについてです。まずは、積極的に中国の人と交流していきたいです。日本人の中国に対するイメージを変えたいからです。いままでは「中国人だから」といってどこか避けていた部分がありました。しかし、今回訪中してみて、もっと中国のことを知りたいと思うようになりました。まずは周りの人から、自分が中国で体験したことを話して中国の良さを伝えたいです。また、歴史を知ることも付き合いしていく中で大切だと考えられます。千人交流会で「戦争から逃げないで理解することが重要」とおっしゃっていた言葉が印象的でした。日中の相互理解のためには、いいことはもちろん悪いことも含めお互いの歴史を知ることが大切だと考えられます。そのためには、過去のことを風化させないで、語りついでいくことが大事だと思います。

最後に、今回の訪中で自分自身への影響についてです。まずは、これから英語と中国語をもっと勉強しようと思います。違う国、言語の友達に言いたいことを伝えることはほんとに難しくもどかしかったけれど、うまく伝わらなくても一緒に話すことはとても楽しかったです。また、中国の学生はとても勉強熱心で、わたしも語学を勉強したはずなのに、どうしてこんなに喋れるのだろうと驚きました。中国語や英語をもっと話すことができれば、さらにコミュニケーションをとるのが楽しくなると思います。さらに、実際に目で見て、体験することが大切だと実感しました。自分自身で感じることによって、いままでのイメージはメディアに作り上げられたものにすぎず、メディアでは取り上げられない多くのことを感じることができました。

今回参加して、貴重な経験ができ視野が広がりました。中国の学生はもちろん日本の学生とも共に過ごし、互いによい刺激になりました。この経験をいかして日中の架け橋に少しでもなれるように頑張っていきたいです。

◆私には夢があります。それは、「日中間のイメージの齟齬をなくし、平和な 2 国間関係を作る」ということです。今回の訪中を通し、このような社会を作るにあたり草の根の活動というものが

非常に意義のあることであり、また自分が人生を通して関わっていきたくて強く思いました。

なぜこのような考えに至ったのか。理由は2つあります。1つ目は、今回の訪中を通して感じた日本人学生の心境の変化です。私自身は今回が3度目の訪中となりました。これまでの訪中で出会った日本人はみな、初めから中国に対して大きな関心とプラスイメージを抱いている人たちばかりでした。今回の訪中では初めて「これまで訪中したことはない」という日本人とともに中国に渡りました。学生の多くは始め正直マイナスのイメージを持っていたものの、中国の方のおもてなし、おいしい食事、悠久の歴史に触れていくうちに、彼らの中の「中国イメージ」が明らかにプラスに代わっているということを実感しました。最終日に多くの学生が「また中国を訪れたい」と言っていました。

2点目は、日中間の平和を作り出す土台が両国にあるということを知ることができたということです。今回の訪中の中で多くの中国の要人の方にお会いし、その度に日中友好を支持するといったお話をいただきました。そして、この訪中に同行して下さった日中友好協会の方が日中友好のために活動されている姿を目にし、強く希望を感じました。このように、日中両国にはお互いの関係をさらに促進させるための土台がしっかりとあるということを知ることができました。

これら2つを踏まえ、日中2か国の間で最も重要なことは、「直接的な交流」であると強く思います。実際にお互いに対話をすることで、自分たちと変わらず、特別なことは何もないということに気づきます。また、交流を通してお互い、またその関係を尊重するようになります。そこで重要となるのは、草の根の交流です。日中両国には草の根の交流を支える土台がしっかりと存在し、多くの方がその活動を支えています。時間はかかりますが、草の根からこの小さな連鎖が続くことで、将来日中両国にきっと大きな変化がもたらされると確信しました。

日本人の中国に対する好感度調査というものがよく行われていますが、一向に改善する兆しは見えません。しかしこれは中国側も同様で、日本への好感度はなかなか向上しません。時間は決して過去へは進まず、未来に進んでいきます。でも私たちがこれから進んでいく未来は、様々な過去があったからこそ実現する、明るい未来だと私は考えます。これまで確執や偏見があったことは紛れもない事実ですが、引きずってばかりいてもそこからは何も生まれません。さらに、今後日本は人口や市場が縮小し、これまでよりもっと他国と関係を密にしていかななくてはなりません。お互いを理解し、受け入れ、尊重し合うような関係づくりというものがこれまでよりいっそう重要となってきます。

今回の訪中で、今後の日中関係の要となるのは私たち若者世代であるという大きな使命を受けました。今の自分にできることは微々たることかもしれませんが、しかし、今回の経験で感じたことを常に心に留め、「これから自分は何をすべきなのか」を自分に問い続けながら、今後社会人となってからもこのような活動を支えていきたいと考えています。

◆この一週間は思いがけず新鮮で、なにか新しい数学の概念を自分の頭が苦勞しながら理解しよ

うとするときにいつも感じる感覚に似た、興奮と苦痛が同居していました。そして、そんな一週を終え、東京の狭く暑い部屋に帰ったいま、微妙な切なさを感じます。

ふと選んでみた第二外国語としての「中国」語、ふと見つけた訪「中」団の募集。訪中団には迷わず応募しました。しかし、それらが「中国」である必要はまるでありませんでした。正直、ほかの国でもよかったのです。だからといって中国に興味があれば中国が目に入るはずがないですから、興味はありました。興味はあるけど中国のことなど何も知らなかったのです。もちろん雑学的、地理的な教科書で教えてくれるような事実は多少なりあったのですが、とても生きたものではありませんでした。そういう意味で今回の経験は特別なものです。前には色がなく中身が空っぽだった「中国」という言葉が、今では少しだけ色づいてなにか重さのあるものが入った言葉にかわったのですから。

成都に着いて二日目、四川省人民対外友好協会の方に催していただいた宴会が終わりホテルへ戻ったあと、僕を含め三人で春熙路という近くの繁華街へ向かいました。しかしかなり序盤で道に迷い困っていました。すると前を歩いていた七、八人の現地大学生の男女グループの一人が話しかけてきました。こちらに中国語が達者なものもおらず、英語や簡単な中国語、翻訳機、身振り手振りで会話を少ししてみると、どうやら彼女は日本に興味があって僕らのうちの一人に話しかけたらしいのです。そしてちょうど迷っていたので春熙路までの道を聞くと、彼女たちもそこへ行くということで後について行こうとしました。しかし、しばらくして僕ら四人の前を歩いていた残りのその集団の人たちがこちらに向かって何やら中国語で叫び始め、彼女はつれもどされてしまい、「俺らについてくるな！」という感じで違う道を指さされ、その集団とは別れました。そのあと、「指示された道はきっと嘘で彼らは日本人が嫌いだからそうしたんだ」とか「こっち向いて叫んでいたのは悪口だったんだ」とか、三人で言いながらとぼとぼ歩きました。しかし、その道を辿っていくと結局ちゃんと春熙路に着いたのです。着いたときはもう夜も遅く繁華街はほとんど閉まっていたが。

僕ら三人の内の一人が、その日本に興味があると言った女性と前の晩、集団と別れるまでに微信を交換していて、ホテルに帰ったあとチャットをしたらしく、次の日事情を説明してくれたことで誤解は解けました。つまり、その現地大学生の集団は日本人嫌いではなかったのです。ただ、僕ら三人が「外国人」の「男」で、夜も遅かったために、グループの他のひとは彼女がナンパされたと思い、彼女を案じ守ろうとしていたのです。それを聞いた時は嬉しかったです。すぐ後には、怖いなとも思いました。もし彼女とこちらの一人が微信を交換していなかったらどうだったでしょう。この誤解は一生解けず、「暴言」で傷ついた僕たちの心は彼らへの怒りに変わって、次第に中国のネガティブイメージとして頭に染みこんでいくかもしれませんでした。あるいはもし僕が中国語を十分に使えれば、こんな小事件はあったでしょうか。

政治的なことはわかりません。日中の歴史のこともあまり詳しくありません。もちろんそれでいいとは思っていません。しかし今回の時点では少なくともそれが事実でした。そこで今回は橋本副会長が事前研修で仰った様に「ポリティカルな問題にはフフフ」と、それならば「自分

の目を見て、自分の頭で考えて、自分で判断する」を金言とし臨みました。この一週間は言葉の真意が伝わりにくかった分、中国人の動作、表情から多くを受け取りました。中国人はシャイでした。彼らは自分の国に誇りを持っていました。彼らは大雑把な性格でした。彼らの笑顔は素敵でした。こういった表現は安直で無責任でしょうか。そうかもしれないですがしょうがないです。いまのぼくにはそう感じるより他にないのです。

ぼくには友達があります。彼らは友達ですからぼくは彼らのことが好きです。彼らに嫌なところがあってもです。それは多分、僕自身に嫌なところをもっと沢山あるのに友達は友達でいてくれるからです。日中がそんな仲になれたら素晴らしいと思います。この発展・拡大一辺倒の世界では難しいのかもしれませんが。しかし、「朋友」の歌詞を思い出すと、難しい問題は多くあるかもしれないけど、もっと単純にもっと大きな器で以って、利害関係や過去に囚われ過ぎず考えれば日中はもっと良い二国になっていける気が、素人考えではありますが、します。そうすると、これから僕に何ができるでしょうか。僕の中の中国はまだ色づき始めたばかりだし中身もまだ少ないです。0 から 1 になったばかりです。僕はもっと中国を知りたいです。そして自分の専門としてはサイエンスを学んでいって、それが何か日中の間にプラスになるような使い方がふとした時に現れてどこかで結びつくことを期待しています。その時自分にできることが今より増えていけばいいと思います。だから今は肩ひじ張らず、目の前のことに集中し、ときにこの経験を思い起こし、やる気をだし前に進んでいきたいです。

◆二度目の訪中。今回この日中友好訪中団に参加したのには二つの目的があった。

一つ目は、以前中国を訪問した時と比べて変化したこと、あるいは変わらないことは何かを知り、より深く中国を理解したいと考えたからだ。五年前、私は高校の研修プログラムで北京を訪れ、一週間ほど現地の家庭にホームステイした。その頃はちょうど尖閣諸島問題で日中の緊張が高まりつつあり、北京でも反日デモが起きたばかりの状況だったが、私が会った中国の人たちはとても温かくて親しみやすく、その人情味溢れる様子に中国の印象が大きく上がったのを覚えている。そのような状況でも研修への参加を決めたのには、政治的問題と民間、つまり人と人の繋がりは別だという考えがあり、テレビのニュースなどから受ける中国のイメージを取り払った、生の中国を知り、人々と実際に接してみたいという思いがあった。そして良い意味でその通りだった。

その印象はこの度の訪中でも変わらず、むしろ確信へと変化した。とりわけ今回は、訪中団とは関係のない一般の地元の人々との交流の中でその温かい親切心に触れる場面が多々あり、特に心に残った。

しかし一方で衝撃的だったのは、相手の国民に悪い印象を持っている人が思った以上に多いと気付いたことだ。他の団員の中にも「中国人には悪いイメージばかり持っていたけれど印象が変わった」と話している人を多く見かけた。この状況を変えるのは、やはり人と人の関わりだと思

う。まずは実際に中国を訪れた私たちが、中国と日本の架け橋となり、中国がどんな国でどんな人がいるのかを発信していくことが重要だと強く感じた。

二つ目の理由は、自分の語学力を本場で試したいと思ったからだ。ホームステイで知り合った中国の友人たちとその後にも交流するうちに、自分も中国語を話せるようになりたいと考えるようになり、大学の第二外国語では中国語を選択しこれまで勉強を続けてきた。しかし、授業以外で中国人のネイティブスピーカーと話す機会がほとんどなく、そのため実際に中国の地を訪れて現地の人々の生の会話を聞き、また自分の中国語が本当に通じるかどうかチャレンジしてみたいと考えたのだ。

自分にとって一番印象に残ったのは、西南交通大学での晩餐会だ。実際のところ、北京外国語学院の学生も西南交通大学の日本語学科の学生も日本語で会話することができたので、中国語で簡単な会話を試みる時も、わからなければ日本語で通じ合えるという安心感があつた。北京大学の学生との交流でも、英語というコミュニケーション手段があつた。しかし、西南交通大学の晩餐会で隣に座った中国人学生は、日本語にはもちろんまったく触れたことがなく、英語も苦手だと話していた。この時ほど中国語を学んでいて良かったと感じた経験はなかった。片言の中国語で話しかけ、会話が続き仲良くなった感動は一生忘れないと思う。初めて会った二人が言葉を知っていることで心の距離をぐんと縮めることができる、これこそ言葉の真価だと痛感した出来事だった。

一週間、いろいろなものを見て、聞いて、感じ、考え、すべての経験が自分の「身」となったと思う。しかし今回の訪中で得た一番の財産は、日本の、そして中国の友人たちだ。中国という縁あつて集まり、一緒に時間を過ごした仲間たちはかけがえのない宝物だ。これからも交流を続け、そしてそれがいつか中国と日本を結ぶ大きな架け橋となれば良いと思う。

◆今回の7日間で感じたのは中国の未来に対する溢れる希望と自信。しかしされど7日間だ。中国に対しどのように気持ちが変わったのか、中国に対してどのように感じるかなどは簡単にはまとめられない。これは中国の一部の側面にしか過ぎないと思う。

私が中国を訪れたのはこれが二回目だ。1回目は南京を訪れた。これは大学の授業で、7日間フィールドワークをするものだった。練り歩きながら自分たちで決めて取材していく。歩く地域は大通りから小道に入ったところにある決して裕福とは言えない住宅街がほとんどで、取材する人の生活も厳しいものが多かった。そんな中でも人とのつながりを大切にしている人々と出会い、最終日には何か琴線に触れるような感覚が残った。

今回訪れたのは北京と成都。前回と違う都市だったので、何か新しい観点から中国を見つめられるのではないかという興味を抱いて参加した。印象は全く異なるものだった。我々は「未来を担う日本の大学生」として中国側に招待され、そこで感じたのは中国の未来に対する希望と自信。立ち並ぶ高層ビルの中をバスで移動していき、ベンチャー企業運営をサポートするイノベーション

ンセンターや、成都の都市計画について学べる施設を訪れた。車窓から見るビルはどれも洗練されたデザイン性のあるものばかりで、規模は日本と比べものにならないほど大きい。未来に期待し投資するスケールが金銭的にも面積的にも桁違いだった。施設に着いて見学しても感じることは同じだった。最新技術の賜の数々が展示され、どのようにこれから発展していく計画なのかをプロモーションビデオで拝見した。北京大学の学生とディスカッションする時間もあり、そこで設けられていたテーマは中日の経済補完協力や日本の停滞するアニメ経済、発展を続ける中国のインターネット経済、とどれも要求されるレベルは高く、日本とのこれからの関連性も含めたものになっていた。7日間の節々に日本にはない、中国の活気を私は感じた。

しかし私は南京で感じたことを思い出し、同時に考えた。今見せられているものが中国の全てではない、と。この7日間で見たものは中国の一部の局面に過ぎないのだと。中国の未来の一翼を担う人々がいる一方で、その輝く光の影にはきっとまた別の人々の暮らしが広がっているのだと考えた。だから簡単に「中国はこういうところだ」と捉えてはいけない。南京で見たものも中国。今回北京と成都で見たものも中国。まだ見ていない私の知らない部分も中国。中国に限った話ではないが、いろんな側面があつての国である。

だから私の結論はこうだ。今回の訪中で考えたことを簡単にまとめるなんてできない、ということだ。きれいごとでまとめることはできない。これこそが私が今回の訪中で考えたことだ。これは今回の訪中で、前回と違った局面を見なければ得られなかった考えである。そしてまだまだ私が見ていない局面がたくさんあるだろう。ぜひともまた中国を訪れて、また違った局面をみて新たな印象を得たい。

◆今回初めて中国を訪れる機会をもらい、中国へ行きました。最初は北京に行くことになっていたのですが、北京の空港に着いたのですが、日本の空港と同じくらいに大きく立派なもので感動しました。また、ホテルまでの移動の間、バスの窓から中国の景色をみながら中国が思ってた以上に発展しており日本の風景と変わらない部分も大きなと思いました。

また、今回は中国の伝統的な料理を食べる機会が多かったのですが、料理に関しては日本とは違うなと思う機会が多かったです。日本でも食の文化が多様化しており、また中国にもたくさんコンビニ等があつて軽く食事を済ませる人も多くなっているという話を聞くので、むしろ食のあり方は近づいているのかもしれませんが、それでも日本で食べる機会の少ないものや、また食べたことがないものをみたときには、食においても日本と中国はそれぞれ違った文化を発展させてきており、また食事から歴史を感じたりするなど感動する機会が多かったです。

食事にSpriteやコーラが毎回出てくるときは、最初は違和感を感じていましたが、後半の方は慣れてきており、文化の違いを知るだけでなく、実際にその地で過ごすことを通じて慣れていくという体験をしたという意味でも貴重な体験であったと思います。

2日目以降は、スケジュールが非常に詰まっており、濃厚な日々を過ごすことができました。

万里の長城へいったときは、教科書や資料集の写真でよく目にしていたのとは違う印象を受けました。もちろん写真のとられた場所と行った場所が違うというのはあるかもしれませんが、観光客が多くそれも白人、黒人をはじめ色んな人が来ている光景を目にすると、単に世界で一番長い壁という事実にとどまらず、世界の色んな人から注目を集めている場所が中国に多くあるのだな印象を強く持ちました。

また、万里の長城に行っている時もそうですが、中国の学生と交流を持つことができたのも非常に良い機会になりました。特に日本語が話せる学生や日本語を学ぼうとしている学生に会うたび、日本語を学ぶ動機はそれぞれであっても、日本のことを少しでも知る機会を自分からもとうとしてくれている姿に感動したことを覚えています。北京大学では日本文化と中国文化について話す機会もあり、文化の違いを乗り越えるために頑張らなくてはいけないときもあることも理解していますが、それでもまず個人として相手の国の文化を知ろうとする、わかろうとする姿勢が大きな影響を相手にも与えるのだということを気づかされた点で非常に良い機会となりました。

5日目には四川省へ行き、昔の偉人のお墓や由緒ある場所を見ました。そこには多くの観光客がいながらも、中国の人もたくさん来ており、偉大な歴史を大事にしている姿や、また大自然の中にも悠々と建てられている建物に強く胸打たれるものがありました。

今回、中国をいく機会を頂き中国に対するイメージはいく前と変わりとても変わりました。これからも、もっと中国のことを知り、また中国の人と交流を深めていけるよう、自分も努力し成長していきたいと思いました。

◆小学生の時に近所のおばさんに尋ねられたことがある。近所と言っても日本国内ではない。私が小学生の頃、半年ほど暮らしていた中国の町での質問であった。

「どっちも好きです」

両親から教えられた通りの模範回答をした記憶がある。あれから10年近くが経ち、その間世界情勢がめまぐるしい変化を遂げている中で日本も中国も絶えずその姿を変えてきた。このような中、私自身の中国への関心は途絶えることはなく、時には夏休みの宿題で日中友好についての作文を書き、中国語の勉強にも励んできた。中国語の勉強は小さい頃に住んでいたこともあるからできて当たり前だという気持ちが強く、その分一倍時間を費やすことも苦に感じず楽しんでやってこれた。しかし、語学をいくら頑張っても実際に日中友好の役に立つことができるのかどうか正直自信がなかった。中学生の時に書いた作文では、「日本人が中国のことを知る機会を、そして中国人が日本のことを知る機会を増やしたい」という思いをたくさん綴っていた。日中両国の良いところも悪いところも自分の身を持って見たことがあった分、ニュースでの報道や同級生たちが相手国に抱く感情には敏感になっていたと思う。

そんな私にとって今回のプログラムは相手国を知る機会を存分に提供してくださるものだった。日中国交正常化45周年を記念とする日中大学生千人交流大会を中心に北京と成都を私たち訪中

団は訪れた。日中大学生交流では、中国の若者がいかに日本文化を好きでいてくれるのかがわかり、世界遺産の観光では中国の歴史に対する自分の知識不足を痛感した。毎日おいしいものを味わい、みんなで意見を交わし合った日々は本当にかげがえのないものとなった。

私自身、北京は以前に何度か訪れていたが、大学生の皆さんと共に観光し学生交流することは新鮮であった。訪中団の中には中国語を堪能に話す方もいらっしゃれば、中国に関して全く初めての方もいらっしゃった。様々なバックグラウンドを持つメンバーが一堂に会したことも今回のプログラム成功へ貢献したと思う。私は全く初めて中国にいらした学生さんたちをはじめ、みなさんが一生懸命中国の学生と会話をし、文化や歴史に興味を持ち理解しようとしている姿を自分の目で見る事ができて本当に嬉しかった。実際に交流の場を提供することが大切だと信じてきた私にとって、日中友好に向けて自分にもできることもあるはずだと自信を持てるようになった。そしてまた、自分と同じように日中の友好に向けて役に立ちたいという信念を持つ仲間たちの存在も見いだすことができた。

今回のプログラムでは本当にたくさんの方々にお世話になった。一週間とは到底考えられないほど充実した日々を過ごした。日中友好協会の皆様、中国現地で支えてくださった方々、そして共に過ごした仲間たちには感謝の気持ちでいっぱいである。百聞は一見に如かずということわざの意味を改めて実感したこの一週間を胸に、これからも中国と日本のことを学び続けたい。そして日中の架け橋となることを近い将来、実現させようと思う。

あの幼い頃に問いかけられた質問に対し、今の私は自信を持って答えられる。

「どちらも大好きです！」と。

◆とても濃密で充実した一週間であった。色々な場所に行き、人と交流し、おいしい食事を食べ、まさに「至れり尽くせり」と言うべき訪中であった。日本とは違う文化や風土に触れ、様々な感想を抱いた。そして考え方にも幾つか変化が出てきた。

この訪中団によって、何よりもまず、私にとって中国がより身近な存在になった。そして、中国という巨大な国への興味が何倍にも膨れ上がった。

訪中前、「中国人」と聞くと、自分たちとは異なる考え方を持つ人々のことを連想していた。正直に言って、「中国」という国は遠い異国のように感じていた。もちろん、漢文や中国の歴史は知っていたし、ニュースで「中国」のことはよく耳にしていた。しかし、どこかしら「自分とは関係のない国」のように感じていた。ところが、この一週間を通じてそのような思いは全くなくなった。訪中を終えた今、本や新聞で「中国」という文字に、以前よりよく目が止まるようになった。訪中団で様々な場所に行き、文化を体験し、大学生や地元の人々との交流したことで、リアルな「中国」を感じる事が出来たからだと思う。実感を以て、私にとって中国が「人ごと」ではなくなったと言える。ビルが立ち並び発展する熱気、「創業」への熱意、巨大な建物、日本と違う料理、そしてたくさんの人、交通量の多さ等々、印象に残っているものは挙げればきりが無い。

本格的な訪中が初めての私にとって、何もかもが新鮮であり、中国のダイナミズム・スケールの大きさに圧倒された。「なるほど、これが中国という国か。」ため息と驚きと興奮とが入り混じった感情を何度か抱いた。「中国すごいな。」という感嘆と「これと比べたら日本は小さいな。」という落胆が混ざった感情とも言えるかもしれない。

もちろん今回感じたものが「中国」の全てとは思っていない。今回の訪中はツアーも交流も食事も、何もかもが十分すぎるほどの「おもてなし」を感じるものであった。それゆえ、何不自由なく「中国」を満喫できた。その一方で、バスの車窓からふと見えた開発途上の土地やゴミの山、街の人々の様子など、ツアーや交流で感じた部分とは異なる「中国」も少し感じる事が出来た。都心の高層ビル的一方で、まだまだ「発展途上」という言葉を連想させる部分も多いのが、私が見た「中国」である。おそらく次回訪中するときは、今回とは違う発見があると思う。今回、氷山の一角をじっくり見たことで、自分の好奇心は何十倍にも膨れ上がった。現在の率直な思いは、もっと中国語を学び、より深くより長期的に中国について学びたいという思いである。発見に溢れた一週間であったが、何かを「学ぶ」のには少し時間が短かった。

中国の人口の多さ、ダイナミズムを実際に目にした今、中国の「隣人」としての日本の立ち位置に関して考えが変わった。日本で生活していると、正直に言って中国の存在感を感じる機会は少ない。もちろん、中国人観光客は多いし「爆買い」という言葉も記憶に新しい。「グローバル化」という言葉は誰もが口にするが、まだ国内では「日本は日本でやっつけられる」というような考えがある気がしてならない。かくいう訪中前の自分は、「日本の高い技術力」「クールジャパン」に代表される響きの良いスローガンを信奉していた。中国を含む他国の発展の著しさを述べるニュースを見ても、結局は日本の未来を楽観視していた。しかし、天安門広場前の巨大な道路や西南交通大学の新幹線研究施設を見て、自分の「日本の将来図」は崩壊した。日本の新幹線も確かに高い技術力を有しているかもしれないが、競争は厳しい。地球を一つの「村」と捉えてみれば、確かに地理的には日本と中国は隣人ではある。しかし最近の「地球村」では隣人さんの方が、比較的注目を集めている。だからこそ、我が家「日本」の存続と隣人との友好関係を両立するには、より一層互いを知る努力が必要だ。また「日本の常識」もお互いを知る過程で変わっていく必要があると思う。

とは言え、訪中団を終えた現在、中国人も日本人も同じ人間であり、究極的には分かり合えるはずだという希望を感じている。政治や経済の単位である国としての性質は異なるが、草の根レベル、最終的な人と人との関係において、共通する部分は大きいと感じた。更なる日中の友好が進み、お互いが幸せになれるように願っている。また私自身、その架け橋の一助になりたいと訪中を終えて切に感じている。

◆今回の訪中は、中国に対する自身の姿勢を見直すという意味で、私の人生において一つの大きなターニング・ポイントとなった。

訪中前の私は、中国の政治や社会に関心を抱いてはいたものの、中国との今後の関係について自分の意見を持つとする姿勢が欠如していた。しかし今回の訪中で、書籍や報道を通してではなく自身の五感で現地の人々や街、すなわち「生身の中国」に触れたことで、これまでどこか他人事のように感じてしまっていた日中関係を自身の問題として落とし込むことができた。日中関係に対し第三者的視点を脱し当事者意識を得ることができたのは、滞在中様々な場面で「中国人の視点」に触れ、そのたびに「日本人である自身の視点」が自然と強く意識されたからだと思う。

この一週間、現地の人々と交流する機会は多くあったが、私にとって最も印象的だったのは北京大学生とのディスカッションである。テーマは「中国において衰退しつつある日本のアニメ産業を今後どうしていくべきか」という一見話しやすそうなものだったが、いざディスカッションを始めてみると一つ重大な問題が生じた。それは、私達日本人学生が日本のアニメ産業について知らなすぎるということだった。日本のアニメ産業について自国民的視点を提供することができず、北京大学生側の知見にのっとなって議論を進めるしかなかったのは非常に恥ずかしいことであった。また、アニメ産業に限らず彼らは日本の政治や日中問題についても質問をしてくれたが、私は知識不足からそれに満足に答えることのできない場面が何度かあった。彼らの日本に対する関心の深さと同時に自身の意識の浅さを実感し問題意識が芽生えた。日本のことや日中問題について、日頃からもっと高い意識を持って学ばなくてはならないと感じた。

今回の訪中でもう一つ印象に残っていることを挙げるとすれば、それは成都規格館の訪問だ。ここでは成都という都市の歴史と現在の姿、今後の開発計画について興味深い学びを得た。成都について名前くらいしか知らなかった私は、その発展ぶりには到着時にすでに驚かされていたが、成都規格館で開発計画のこれまでと今後についての映像を見て、このまちが持つエネルギーと無限の可能性を感じた。成都是三国時代からの長い歴史の名残りや現代の最先端の開発とが併存する特殊な空間で、知れば知るほどその魅力に惹きつけられた。

訪中を終えた今、私の胸の中にあるのは、中国についてもっともっと知りたいという思いだ。まさに「百聞は一見に如かず」の通り、今回実際に中国を訪れ様々なものに触れたことで、今まで抱いてきた印象が大きく塗り替えられたり、全く新しい視点や気づきを得たりすることができた。しかし、私達が今回見たものはこの国のほんの一側面にすぎないこともまた、中国の時空間両面の壮大さに身を置くなかではっきりと実感したことだ。自国のことについてはもちろんのこと、中国語や中国についての教養を深めて上で、この国を再び訪れようと思う。

◆私は今回の北京・成都への訪問と現地学生との交流を通じて、当プログラムの大きな目的の一つである中国への理解に加えて、現地の学生との交流を通じて日本という国を客観的に捉え直すことができたと感じている。また、高校の地理等で学習した事象は、頭では分かっているつもりでも実際に現地に足を運び、現地の人々の暮らしを間近で観察してみなければ、リアルな事象として語ることはできない。今回の訪中はそのような、「紙の上の知識として知っていた」ことが「自

分の体験レベルでの実感」として立ち現れたという点で非常に印象深いものであった。

私が気づいた点の1つが、中国国内における格差の問題である。大学受験の知識として「経済発展が進んでいる沿岸部と、開発が遅れ貧しい内陸部」という構造が指摘されることがある。しかし、今回私が感じたのは沿岸部と内陸部の経済格差ではなく、都市部の国民の間に生じている教育格差であった。北京大学や西南交通大学では交流相手に日本語を話せる学生が多く、英語で話す機会はあまりなかった（せっかく両国とも国際語としての英語を学ばせているのだから、日本語を解さない現地の学生と英語で交流する機会があってもよかったと思う）が、殆どの場合彼らは流暢な英語を話せる状態であった。しかし、街に出てコンビニや土産店の店員と英語でコミュニケーションをとろうと試みてみると、不思議と英語が殆ど通じないことに驚いた。日本では何十年も前から、多くの人が中学～高校にかけて少なくとも6年間英語を学ぶ環境に置かれており、町中で外国人に話しかけられても片言の英語でなんとか対応できそうではあるまいか。これに対し、私が北京や成都で話しかけた現地の人々は、「右」や「左」といった非常に簡単な単語すら英語で話そうとしなかった。外国人とのコミュニケーションもスマートフォンの翻訳機能があればそれで何とかになってしまうのかもしれないが、北京大学や西南交通大学の学生が流暢な英語を話していたのとは対照的な光景であった。私達が交流した北京大学や西南交通大学は中国の中でもエリート大学であり、そこに通う学生は幼い頃から手厚い教育を受けてきたものと推察される。

プログラム中に耳に挟んだが、中国では殆どの学生は学業と平行してアルバイトをしないのだという。すると街のコンビニや土産店等の店員はその多くが学生のアルバイトではなく、それを本業として生活している人であると考えられる。調べてみたところ中国の高校進学率は90%、大学進学率は40%程度だという。大学に進学した人はホワイトカラーの仕事に就くことが多いであろうから、街の店員の多くが大学に進学していないとしても、高校にまで進学してごく簡単な英語を解さないというのも不自然な話である。英語教育に重点が置かれていないのか、ごく最近まで中国人がこのような教育水準に置かれていなかったのかは定かでないが、とにかく事実として中国人の英語力に相当な格差が存在するようであった。

またもう一つ私が気づいた点として、北京第二外国語学院や北京大学、西南交通大学で日本語を学習している中国人学生に日本語を学び始めた理由を訊いてみると、殆どの学生がアニメ・漫画等の日本のサブカルチャーが好きだったから、またその他親戚が日本にいるから、日本語が美しいと思ったから等の理由を答えてくれた。日本のサブカルチャーが海外で人気を博しているのは結構なことなのだが、私が危惧したのは「将来的に日本で働きたい、日本語を仕事で使いたい」という学生に殆ど出会うことができなかった（1人だけいた）という点である。私が就職活動をしていたときには、日本企業あるいは外資系企業の東京オフィスの選考を受けていた中国人留学生に何人か出会ったため、中国人学生にとって、日本の労働市場は依然として魅力的なのではないかと思いついでいた。そのため、仕事で日本市場をターゲットにしたいという中国人学生が殆どいなかったことは予想外であった。恐らくは、多くのエリート学生は中国ないし米国の企業を

就職先として選択するということなのだろう。

少し前に HUAWEI が日本で初任給 40/43 万円で求人を出したことが話題になっていたが、もはや中国のエリートが高い給料とよい仕事を求めて日本の労働市場に参入する時代は終わったのかもしれない。ここ数年、日本人学生が若いときから高い給料をもらえること等を理由に国内の大企業に就職せず、外資系企業に就職したいと考える傾向は顕著であるが、そのような外資系企業の中に中国系の企業が名を連ね始める日もそう遠くないのではないだろうか。

以上に述べた中国と日本の英語教育と労働市場に関する考察は、奇しくも昨今のグローバル化の話題と密接に関係している。日々、膨大な量の経済ニュース等をただ概観するだけでなく、今回の訪中で現地の人々・中国人学生と話した経験や、そこで得たナマの知識を自分自身の糧として、それらの情報を批判的に読む姿勢を大切にしたいと改めて感じた。

◆今回日中友好大学生訪中団に参加して最も印象的だったのは北京大学での学生交流である。北京大学の学生とディスカッションを通じて意見を交換するだけでなく、学内の創業センターを見学して現在の中国で産学連携が進んでいることが分かった。日本では大学発のベンチャー企業はあまり一般的でないため、特に大学制度に関して日本との違いが多く感じられ、新技術を用いたビジネスを研究するという気風は興味深かった。また、国交正常化 45 周年という節目の年に訪中したことで千人交流会に参加することができた。日中両国の選りすぐりの芸術に触れることができたのは非常に貴重な体験であり、若い世代の交流がより大規模になって欲しいと感じた。

中国の風景や伝統文化を実際に見て、学生たちと自分の言葉で交流する。これは日本には決して得ることのできない経験である。この経験をしたいというのは私がこのプログラムへの参加を決めた理由の一つでもあった。最終日が近づくにつれてもっと中国に滞在したいという思いが募り、帰国してからも訪問した各地で見た景色や感じたことは心に深く残っている。自分の五感を駆使して得た知見は教養という将来の自分にとって必ず有益なものとして残るだろう。大学生としてこのような機会をいただけたことに感謝したい。

訪中して分かったのは、中国の都市では先進国化している部分が思っていたよりも多いということである。創業公社や環球中心など先進的な制度や建物を体感することが、前回私が訪中した時と比べて多かった。特に成都については全く知識がなかったが都市部は非常に先進的な街づくりが行われており、建築物にも驚いた。さらに、今後は特に都市間のインフラを整備してさらに便利な街になるとの説明を受け、中国全体としての先進国化は一層進むだろう。ただ一方で道路交通や下水道の整備など改善の余地がある箇所も見られたので、こうした部分に対して今後日本も技術開発などの援助をしたりノウハウを伝えたりすることができるはずだと考えた。そして、創業支援や産学官連携といった制度の面においては日本も中国から学ぶべき点があるだろうと強く感じた。

また、訪中した仲間との交流も非常に有意義であった。これまで話したことのない人たちと共

に一週間過ごし会話する中で、互いの専攻や学年、地域が違っても皆中国に興味を持っており現地の人との交流を深めたいという思いは共通しているということが分かった。これからの日本の未来、そして日中関係を支えていく世代として一緒に中国を体感できたということは大きな意味を持つだろう。このつながりを大切にして、またこのメンバーで中国を訪れたり中国の方々と交流したりしたい。日中は様々な問題を抱えてはいるものの、隣国であるので互いに与える影響は非常に大きい。また、現状抱えている問題は国家同士のマクロ的なものであり、人と人のミクロな関係は決して悪くないと学生交流を通じて実感した。むしろ同じ学生として共感できることも多く、中国が非常に身近に感じられた。だからこそ私たちが率先して交流を続けていくことが大切なのだろう。

留意しておくべきこととしては、今回の訪中では中国側から招待されて交流や観光を行ったということである。これはいわゆる「与えられた機会」である。今回の経験で満足するのではなく将来にわたって継続的に交流を行う必要があるだろう。ではこれから自分に何ができるのだろうか。現時点で考えていることとして例えば中国の大学に留学したり今回出会った現地の方々と再び会ったりすることは大切な交流である。また、社会に出てビジネスを考える際に中国という市場を視野に入れることや今回の経験を人に語るることによっても友好の輪は広がっていくのではないだろうか。このように今回の訪中は、これから私が少しずつでも中国に関わっていきたいということを考えるきっかけになったという意味でも将来に非常に大きな影響を与える経験であった。

◆私は数年前、中国に旅行で行ったことが数回ありますが、以前北京に旅行に行ったときとは違ったイメージを中国に持つようになりました。また、中国人学生や中国に留学経験のある日本人学生と話すことで、知識では知っていても現実で実感したことがないことを実感する契機にもなりました。主にイメージが変わった点は2つあります。

- 1, 一般の中国人でも、出身や人によってかなり違いがある。
- 2, 中国の産業は現在過渡期として急速に成長しつつある。

1 点目に関して、私には中国人の友人がおり、彼ら/彼女らは非常に礼儀正しく性格も良いため、メディアで報道されている中国人のイメージがすべてではないということは実感していました。そのため、個々を捨象して「一般的な中国人」という比較的ネガティブなイメージで全体的に語られていることに対して、もどかしさを覚えていました。また、それは日本だけではなく他の国でもそのような中国人のイメージがあることを残念にも思っていました。私の友人は大体大学生なので、普通の街中にいる中国人はまた違うかもしれないと思っていました。しかし、訪中団の活動の際、夜に友人と飲食店に行ったとき、言葉が通じないのに非常に丁寧に根気強く店のシステムや料理について教えてくれた店員さんもいたことから、とても好印象を持ちました。

一方で、街中で道を聞いたときに「日本人には関わるな」と中国語で言って冷たくされたという経験もあったという訪中団のメンバーもいたことから、やはり人によって異なるとも感じました。

2 点目に関して、普段観光で訪れることの少ない創業支援をしている施設を訪れることができ勉強になりました。中国の産業といえば、工業や製造業が中心だと思っていましたが、クリエイティブ産業や起業にも力を入れていることが伝わってきました。これは北京大学の見学をしたときも研究開発に力を入れていることを知り、中国も過渡期にあり、進化を続けていると感じました。また、成都規画館を訪問した際も成都の都市計画は非常に興味深かったです。経済や工業だけではなく、文化的視点や自然との共生も重要事項に入っていることが印象的でした。北京や成都を訪問した際も、たくさん高層ビルが立ち並んでいて、私が北京を旅行で訪れた 2007 年次とは全く都市の印象が異なり、非常に驚きました。ものすごい勢いで都市が成長を進めていて、その原動力の大きさをひしひしと感じました。一方で、昔ながらの小さな商店やレストランが並ぶ通りもあり、都市開発を進める過程でどのようにこれらの昔ながらの風景を残していくのかを考えるのも課題だと感じました。

今回の訪中団では、中国の人、都市、産業に関して様々な発見があり、実りのある訪問になりました。

中国は広大で都市によっても様子が全く異なるので、また機会があったら中国の他の都市にも訪れてみたいと考えています。

◆私にとって中国訪問は今回の訪中団が初めてでした。この感想文では、首都北京・四川省の省都成都を訪れ、現地の大学生との交流等を通して感じた日本と中国との差異や、この経験をどのように今後活かしていくかについて記したいと思います。

まず生活・文化面についてです。近年凄まじいスピードで発展し続けている国だけに、経済の中心である首都北京が栄えていることは予想していましたが、成都も高層ビルが立ち並んでいたことには驚きました。自動車の数が多く交通渋滞も目立っていましたが、電動自転車の普及率が非常に高く自転車専用レーンがほとんどの道路で整備されている点は日本も見習うべきではないかと感じます。比較的安価なシェアバイク（レンタル自転車）も普及しており、東京名古屋大阪といった大都市を中心に日本でも是非発展してほしいところです。（シェアバイク大手の Mobike は今夏日本に上陸し札幌で試験営業を開始したようです。）また、起業しやすい仕組みが整えられている「北京青年創業公社」の視察は非常に印象に残りました。日本にはあのように形としてはっきり見える施設がありませんので、是非整備してほしいと思います。

性格面では私の当初のイメージ通り、我が強い人が多いように感じました。謙虚と言われる日本人とは正反対の性格ですが、この自分の意見を前面に押し出していく中国人の性格、近年のビ

ビジネス面での発展の一因を担っているのではないかと感じました。個人的には日本人の一步引く姿勢も素晴らしいと思いますが、今後中国をはじめとした世界各国と経済面で対等に渡り合うためには、時にはこのようなガツガツした一面も必要なのではと考えます。

次に（大学での）学業についてです。北京大学や西南交通大学等の生徒との交流を通し、非常に優秀な学生が多いと感じました。北京大学の生徒はほぼ全員が流暢な英語を使うことができ、日本の大学生との差を痛感しました。私を含め日本の大学生は英語の読み書きはある程度のレベルにあるでしょう。しかし聴く・話す力、特に話す力が圧倒的に不足しています。社会に出てからより重視されるのは後者の聴く・話す力です。現在の日本の教育システムではこの後者の英語力が十分に鍛えられないのではないのでしょうか。大学受験でも話す力が試される場面は皆無です。speaking の授業を増やす、入試で speaking 試験を課すなど、教育機関側の変化も必要であると考えます。もちろん、英語を身につけるための自発的な努力もまだまだ足りない、とひしひしと感じられました。来年から社会人となりますが、世界で活躍できる人材となるべく、鍛錬していきたいです。最後になりますが、今回このような素晴らしい機会を与えてくださった日中友好協会をはじめとする関係機関の皆様にご心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

◆1. はじめに

私は中国本土を訪れたことがなく、今回の訪中まであまり中国との関わりはありませんでした。そんな私は 2017 年 8 月 27 日～9 月 2 日まで、日中友好大学生訪中団として北京・成都を訪問させていただき、今まで持っていた中国に対するイメージの多くがステレオタイプの先入観であることに気がつきました。この感想文では、以前のイメージと、それがどのように変化したかについて書いていきます。

2. 訪中前の中国に対するイメージ

訪中前の中国のイメージは、一言で言うと「人の熱気に溢れた発展途上国」というものでした。

産業に関しては、広大な国土を持ちながら工業化の進んだ海岸沿いと農村社会の残る内陸部で大きな格差が存在し、都市はそれほど綺麗ではなく人手溢れて賑やかである。GDP が日本を超えたと言っても先端技術分野では遅れており、製品の品質は劣っている。国民性としてはかなり自我が強く、共産党一党独裁の中で自由を制限されている。しかし歴史的な観点では、長く世界の覇権を握り、三国志時代から清帝国まで、長い戦いと栄華の魅力的な歴史を持つ。こういったイメージは全て、ニュースや教科書から得た先入観であり、どちらかというとマイナスの印象を抱いていたと言えるでしょう。

3. 訪中における中国の印象

では訪中を終えてどのようにその印象が変わったか、北京と成都で印象的だった訪問を振り返りつつ書いていきます。

まず、最も印象的だったのは、中国のイノベーション開発と起業家育成、バランスの取れた国際都市開発に注ぐ情熱です。北京での創業公社や北京大学でのイノベーションセンター訪問、成都での成都規格館、青少年育成センター訪問を通して、中国が国をあげて国力増進の方策として、中小スタートアップの政策・場所・人材など総合的な支援を行っていることを知りました。日本は法規制などが理由で起業がしにくいと言われますが、第四次産業革命を迎えると言われる今後の世界で競争力を持つためにはイノベーションが不可欠であり、それを中国は見据えているのだと思い、感心するとともに日本の遅れを感じました。しかし同時に、北京大学の学生が「起業は未だにリスクのある選択だ」と言っていたことを考えると、輝かしいだけの方針ではないのだとも実感しました。都市計画については、両都市や大学の広々とした土地割、緑が溢れ自転車の多い町並み、デザイン性がありつつ統一的な印象を与えるビル群は、まさに近代都市そのものでした。日本の土地の少なさに起因する渋谷や新宿などの喧騒を思い浮かべると、住みやすさの違いは歴然としており、成都での交通・産業・公的サービスのバランスの取れた都市開発には感動するばかりでした。

次に、万里の長城・都江堰・錦里など、中国の連綿と続く歴史について、もちろん中国の歴史知識は持っていましたが、実際に目にしてみるとその雄大さとスケールは想像以上でした。

最後に、北京大学の千人交流会、西南交通大学訪問や晚餐会を通しての現地学生との交流を通して、国籍が異なっていようと同じ若者であり、お互いを知ろうという思いさえあれば言語の壁を超えて理解しあえることを実感しました。同時に言語習得に対する熱心さや勤勉さ、両国に対するイメージなど、異なる部分も多く、これは環境により形成された文化の違いに加え、冒頭に自分が述べたように先入観も理由であると感じ、こういった草の根の人的交流を通じて先入観を壊していくことがいかに重要であるか気づきました。また、中国の学生と一口で言っても語学力や興味分野においても多様であり、日本についても言えることであるのに、ここでもステレオタイプで友人をくくろうとしていたことに気付かされました。

4. 終わりに

ここまで徒然と書いてきましたが、訪中によって、先入観と違う近代的で多様性にあふれる、洗練された中国の姿が見えてきました。もちろん、今回見えなかった国内格差など、問題も多く抱えているはずですが、それも含めて発展していこうというパワーを感じました。これは日本が大きく発展した時代に共通するものなのではと思うとともに、日本も今の地位に安住しては、瞬時に国際化に遅れてしまう、そういった危機感で薄いのが現状であると思わされました。日本国内に留まっていたら、「日本の方が中国より優位に立っている」という思いを抱きがちですが、これからは両者が協力しつつ、日本は中国の積極性に見習うという謙虚な姿勢を持つことがアジア、世界の持続的な発展に必要でしょう。

プログラムに参加し、歴史・産業・教育など総合的な現代中国を概観させていただく機会をいただいたことを、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

◆1. はじめに

今回日中大学生訪中団に参加し北京と成都を1週間で訪れ様々なものに触れ色々考えることができたのでそれを記したい。

2. 考えたこと

以下で考えたことを箇条書きにして書いていきたい。

・ 中国での技術の発展が著しいこと

中国では近年技術の発達著しく、WeChatでのお会計や都市開発、電車のスピードなど多岐に渡る。その中でも最も印象に残ったのはWeChatでの支払いに関してだ。WeChatは日本で言うLINEのようなもので基本的なサービスとしてはメッセージのやりとりにあるが、決定的な違いはWeChatを使うことで支払いができることだ。その結果近年では、財布を持たなくなったらしい。さらに送金も可能で、財布を忘れた人が見知らぬ人にWeChatのアカウントを聞き助け合う光景に実際に遭遇した。見知らぬ人にお金をあげることに僕自身抵抗を感じるのだから驚くべきことであり、中国における技術の発展と適応力は学ぶべきところがあると感じた。

・ 起業へのサポート

今回北京での滞在中、起業をする人のサポートを行う「創業創新公社」を訪れた。最も面白かったのはどんな温度の水を入れても55度になる水筒だ。様々な技術を取り入れビジネスにしようという動きは日本にもあるが、数段進んでいる印象を受け、言葉の壁を考えずに起業するならば中国のほうが容易そうであった。

・ 中国での日本のイメージ

今回プログラムで関わった中国の方々は何かしら日本に接点を持つ人々が多かったので偏った意見かもしれないがここに記したい。日本のイメージや日本で優れてる点はなんですかという質問に「きれい」「サービスが良い」「秩序が正しい」といった回答があげられた。確かに日本に比べるとホテルが汚かったり、搭乗手続きの効率が悪かったり、地下鉄には我先にと乗る場面を見るとそれらは正しいと感じた。しかし、その他の面(技術の著しい進歩や都市開発の規模等)様々な面を見ると日本よりも進んでる面も多いと感じた。中国の悪い印象を持たせるニュースばかり報道する日本のテレビの影響か、発展途上国のイメージがあったが今回見た北京や成都を見るとむしろ日本と並ぶ、もしくは日本を抜かしている先進国のように感じた。もし仮に上述した日本の特徴を中国が持つようになったら日本の良さや特徴は何もなくなってしまうのではないかと思ひ怖くなった。中国に負けない日本で誇れる何かをこれから探す必要性を感じると同時に、中国

人に負けない人材になれるよう努力せねばいけないと感じた。

- ・中国人の語学力

今回交流して感じたのは英語のレベルが思っていたよりもそれほど高くなく、中国語しかできない人も多かったことだ。北京大学の学生でも英語を話せない人も多かったのでとても意外であった。中国語しか出来ない方とはこちらも中国語を使って頑張って話そうとしたが、やはりこちらの勉強不足であり通じなかったのがとても悔しかったので卒業までに最低限中国語を話せるようになりたいと思った。

- ・訪中団に参加した学生に関して

北京や成都で共に過ごした大学生との会話がとても楽しくこれも印象に残った。特に海外留学や海外への興味が強い人が多く、3ヶ国語以上できる人もたくさん参加しておりそういった人と話し議論できたことは貴重な経験になった。また自分は理系の学生であるが、今回のプログラムに参加していた学生のうち理系は1割未満であったことから普段接しない文系の学生と話すことができ、とても刺激をもらった。この1週間だけでなくこれからも関係性が将来も続いていく仲間が得られたことにとっても感謝している。

3. 終わりに

今回1週間北京と成都で貴重な経験をさせていただいてお世話になった方々、特に日中友好協会事務局の方々、中国で関わった全ての方々に感謝申し上げます。自分一人では経験できない一夏の思い出になりました。この経験を踏まえ将来に役立てていきたいと思います。

◆「中国は発展途上国ですから。」初めての中国に到着してすぐに、バスガイドさんがおっしゃったこの言葉にすごく驚いたのを僕は覚えている。なぜなら今や中国はGDPでは日本を抜いて世界二位となった超大国で、もうすでに先進国の一員であるということに、僕は何の疑いも持っていなかったからだ。

しかし、今回この訪中団の一員として、北京と成都を見て回るうちに、ガイドさんの言葉が飲み込めたような気がした。もちろん、中国は先進国ではないということではない。学問、経済、技術、様々な分野における中国の人の向上心の高さに、この国はまだまだ発展の道のりの中にあるな。ということを実感させられたからだ。

今回の訪問でとりわけそう思われたのが、両都市での大学生との交流である。

北京では北京第二外国語大学の学生と交流する機会があったのだが、彼らの日本語の能力の高さと日本語の学習に対する真摯な姿勢には大変心動かされた。見ず知らずの日本人に積極的に日本語で話しかけてくれ、わからない言葉があればすぐに調べて受け応えする。という姿勢は、単

に日本語を専攻している。という以上に、本当に日本語が上手になりたいのだな。と思わせるようなもので、分野は違えど、学問を修める同じ大学生として、頭がさがる思いだった。

北京の次に訪れた成都で訪問した西南交通大学では、その研究環境と内容に大いに興味を持った。大学の方に引率されて見学した研究施設は最初、お世辞にも整っていて最新だとは言い難いものだと感じたが、引率の方からこの施設が目指す研究内容や国から投じられる予算の額を聞き、そして自分たちの研究成果や目標を誇らしげに語る学生の姿を見ると、この施設で研究ができる学生のことを羨ましく思うようになった。特に、中国は自国の科学技術に対する投資への積極性が非常に高いように思われ、予算の削減が続く日本の研究事情とは対照的であるように感じた。中国の成長はここで研究を行っているような人々に裏付けられているのだとの印象を持った。

大学訪問の他にも、中国の発展への意欲の高さを感じたこととして、北京での創業公社の見学と、成都での企画館の見学があげられる。創業公社でベンチャー企業の人々が働く様子や、企画館での成都のこれからについての展示は、少しリアリティーが伴わない、SF小説の出来事のような印象を受けたが、それでも自分たちが描いた未来が実現できることに疑いなく、自信を持って話す人たちを見て、中国は発展途上国という言葉の意味を実感できた。

帰国して中国での七日間を振り返ると、初めて訪れた中国の地で、日中の同年代の大学生と交流することができたことは、本当に有意義だったと思う。この訪中団で交流した学生は、皆訪中団の活動に参加しているというだけで、他に何の接点もない人がほとんどだったが、だからこそ自分がいるコミュニティの外に目を向け、大学や日本の中ではできない経験ができたと思う。この七日間は中国についての知識や理解だけでなく、大学生としてこれから過ごしていく上で、大きな示唆を与えてくれた気がする。

◆日本と中国。それぞれの国号に物語がある。日の本と、世界の中心。国号も然りだが、この二国は過去も現在も、そしてきっと未来も、相互の存在に関して共依存。だが私は、そしておそらく私のほかの多くの人も、その共依存状態への認識が不十分だ。

どれほど日本での私たちの日常生活が中国に支えられているのか。どれほど日本の文化が中国に影響を与えているのか。それぞれ、逆もまた然り。おそらく、それは私たちの想像以上だ。このように書いたところで、上記を疑う人も多くはないのも事実のはずだ。不思議だ。なぜ上記が腑に落ちるだけの理解でありながら同時に相互に嫌悪感を抱くのか。渡航中の団長のお言葉に拠れば、一部の調査では8割以上の方が日中関係において相手国を良く思っていないそうではないか。不思議だ。だがここで包み隠さず記そう、私も、8割だった。

領土問題、領海侵犯、模造品、観光マナー、治安。あまりいい印象はなかった。それでも私は中国の地に足を踏み入れることに決めた。隣国を知りたかったから。地理的にも、民俗学的にも、歴史的にも、そして今のこの世界で国際的にも、中国は隣国だから。本当の姿を知っておくことに越したことはない、と。結果として私は、この過去の自分の決断を高く評価している。どうし

たって経時的に日々薄れてしまう記憶が新鮮な今のうちに、彼と握手を交わしておきたいものだ。

8月27日。空の旅を経て、私たちの訪中は本番に入った。万里の長城に始まり、都江堰や杜甫草堂など、訪れた名所を数えれば枚挙にいとまがない。中国四千年の歴史は伊達じゃない（余談だがこの「中国四千年の歴史」という聞きなれたフレーズは何がモトなのだろうか、誰か教えてほしい）。

そういった中国の歴史と土地を肌で感じたことはもちろん貴重な経験となった。だが、今回の訪中の中で何が最もこれからの私が形成される上での糧になったかと尋ねられれば、即答する。「人」。

中国の彼らと会い、話し、笑ったこと。誰だって笑うし、誰だって泣くし、誰だって恋をする。なんて、そういう普遍的なことをキザに言いたいのもあるが、何より感銘を受けたのは彼らの日本に対する興味とそこから生まれた向学心。学習年数からは信じられないほど流暢な日本語を話してくれた。「自分は下手だ」などと彼らは謙遜したが、生半可な努力ではあの日本語は話せない。今回かかわった全ての中国学生が日本語を学んでいる訳ではなかったが、彼らの笑顔の裏に見られた自分の専門を追求する姿勢は、恥ずかしながら自分は遠く及ばないものだった。そんな彼らとの交流を通じ、私は自分の偏見を客観視することとなった。言い方をかえれば、真の中国の姿を垣間見た。真の中国の姿を理解したとはまだとてもおこがましくて言えないが、この0と1の差は大きい。0と1、いや無と有、というべきだろう。

中国には、私たちと同じように笑いたいと願っている優秀で努力家な同世代がいる。その彼らが、日本と繋がりたいと思ってきている。そして今、それは私も、きっとほかの団員たちも同じだ。世間一般に、ましてや両国内に、互いの国をよく思わない人が多かろうと、この二国の関係は絶てないものであり絶ってはいけないものだ。良好な関係の構築は、そこに国益があるから、という理由だけではない。そこに「人益」があるからだ。国と国を繋ぐ最も小さく同時に最も強力な結び目は間違いなく「人」だ。近い将来、時代を築く私たちが偏見を解き、誤解を解き、この膠着したすれ違いを解く。それは「人」を通さなければできないこと。時間はかかる。手間もかかる。一人ひとりの力には限界がある。それでも、時代はいつだって変わってきた。そして、人なしで変わった時代はない。私たちが、変えるのだ。

追記としての呟き：

今この文章を書く私の中には何があり、それは数週間前、中国に渡航する前の私の中にあったものと何が違うのか。そして今この文章を書く自分をまた時を経た自分はどう思うだろうか。

◆中国の訪問は今回が2回目。1回目は5年前、高校1年生だったときの「中日サイエンスキャンプ」。日中国交正常化40周年を記念して行われたものだった。本訪問が45周年を記念して行われたものであることを考えると、50周年を迎える5年後に再び中国に行くことになるかもしれない。

い。いや、また行きたい。

5年前は尖閣問題の影響から治安・情勢を心配して訪中した。ただ、実際には、日本人だという理由でデモのような危険な目に遭うことは無く、むしろ中国の高校生は我々を歓迎してくれた。日本のメディアがしばしば行う反中国的な報道は、必ずしも合っていないと心から感じた。そして、中国や中国人に対して持っていた、「なんとなく」嫌なイメージが完全に無くなった。

さて、9月1日の西南交通大学でのスピーチで述べた通り、私の今回の訪中の第一の目的は中国語を話すこと、第二の目的は中国に直接触れることにあった。今回、これらの目的は、予想以上に達成できた。

まず、第一の目的について。5年前に中国に来たときには全く中国語がわからなかったが、大学で1年半学んだことで少しは話せるようになった。大学の中国語の先生が発音に厳しかったおかげで、私の発音は（自分で言うのもなんだが）良い方だと思っている。実際のところ、中国語を話すと、現地の方々に「うまいね」とよく言われたので、とても嬉しかった。最後の日の夜に、中日両言語でスピーチをする機会を頂けるとは思ってもおらず、光栄だった。さらに、大学生だけではなく、レストランやホテルのスタッフ、タクシーの運転手などとも会話することができ、楽しかった。中国語を話すことで、中国語を話せない場合よりも大いに楽しむことができたと思う。中国に限らず、海外へ行くときには現地語を話すことを心掛けたいと改めて思ったと同時に、私自身が中国との友好関係のかけ橋になれるように、中国語のレベルを向上させたいと感じた。

次に、第二の目的について。中国に直接触れること、具体的には中国の人々と直接話して情報を得ることも十分に達成できた。北京第二外国語学院の学生は日本語が非常に上手で、感心した。ボランティアで来てくれた大学生や院生が女性ばかりだったので、学校の男女比について学生に直接質問をすると、やはり、日本語学科の学生は女性ばかりだそう。あるクラスは47:3で女性が多いという話も聞いた。男性は理科系に進む人が多いそうである。この傾向は西南交通大学の日本語学科でも共通のようだ。また、北京大学光華管理学院の学生との討論の過程で、日本の大学生はほとんど皆がアニメを見ると思っていた学生に出会った。その場にいた日本人で、「そんなことはない、私はほとんど見ない」と伝えると、非常に驚いていた。彼がそう思うに至ったのには、何か、中国の社会が作った理由（おそらくメディアの報道の仕方）があるのだろう。さらに、各観光地では、ガイドの方々に助けていただき、大いに学んだ。日本語の説明が展示されている観光地もあったものの、ほとんどの観光地では中国語と英語のみの説明にとどまっていた。そのようなときに、ガイドの方々が日本語で説明してくれたり、時に質問に答えてくれたりして、勉強になった。やはり、現地の方々と話すことで得られるものは大きい。中国を知るには中国へ行って中国人と話すのが最善だ。

最後に、今後自分が中国とどのように関わることが全くわからないということを述べたい。この夏で大学の中国語の授業が終わる。秋からは薬学部で学ぶことになり、物理・化学・生物の授業ばかりである。将来は研究者として、薬の開発か病理の研究、あるいは薬剤師として勤めたいと考えている。研究者としてやっていくなら、自分の分野に関する深い知識と、科学論文を読む英

語力が必要になるだろうが、中国語力が必要となることはほとんどないだろう。あるいは、薬剤師として勤めるとしても、中国に関わることはそれほど多くはないと思われる。もちろん、中国出身・中国語母語話者の方と関わる機会はあるだろうが、それは仕事上関わる人の中の一部に過ぎない。だから、自分が将来中国とどう関わるか、そもそも関わる機会があるかどうかもわからない。しかし、私は中国に関わる機会があれば積極的に中国に関わりたいと思っている。自分が中国と関わりとしたら、「中国語が話せる日本人薬学研究者」とか「中国人の友達がたくさんいる薬剤師」といった、only one の存在になると思う。そんなことを夢見つつ、これからの大学での学習や、各種活動に励んでいきたい。

◆訪中を終えた今、この一週間を振り返ってみると数え切れないほどたくさんのかんことを経験し学ぶことができたと思う。台湾には旅行で行ったことがあったものの、その時は単なる観光として訪れただけであった。初めてユーラシア大陸に降り立った瞬間の、なんとも言えない感動は心に焼き付いている。

最も心に残っているのは、中国の大学生との交流である。北京では北京第二外国語大学と北京大学の学生たちと交流し、成都では西南交通大学の学生たちと交流させていただいた。

まず、日本語学科の学生は皆とても日本語が流暢で、数年もしくはたった一年勉強しただけでそれほど話せるようになるのかと驚かされることが度々あった。どうしてそんなに上手に話せるのか尋ねると、決まって「そんなことないよ」という謙遜と「日本語が好きだから」という率直な答えが返ってきた。まさに、好きこそ物の上手なれだと感じた。日本語を好きで勉強している学生がとても多いことを知ってとても嬉しくなった。中国語で交流したり、多少なりとも中国語を話している日本の学生を見て、すごいなと感心するだけでなく、自分も中国語を勉強し直して次に会うときには中国語で話してみたいと思うようになった。そのような話をしていると、いい勉強教材になるからと、中国のドラマやバラエティ番組を見られるアプリをお勧めしてもらえた。実際、中国の学生も日本のバラエティ番組などをよく見るらしく、日本の男性アイドルが好きで日本語を専攻することに決めたという学生も何人もいた。日本だと、将来の役に立ちそうだから、こういう国で働きたいから、この国の文学が好きだから、等の理由で語学を勉強することが多いように思うが、案外もっと単純な理由で勉強するのもいいのかもしれないなと思われた。

次に、特に北京大学の学生たちはとても流暢に英語を話していた。小学生から英語を学び始め、現在は授業の全てを英語で受けているらしく、話せて当然なのかもしれないが、正直驚かされた。将来研究者を志望している自分にとって、英語は必須であろう。しかし、彼らとディスカッションをして、自分の未熟さを痛感した。軽い英会話などではなく、ディスカッションをこなせるようになるにはまだまだであった。そして、グローバル化が進む現代においてそれだけでは駄目なのだと実感した。いわゆる第二、第三外国語の勉強の重要性に身を持って気づくことができた。まずは中国語から始めてみようと思う。そして、一週間の中で最も強く感じたことの一つに、な

んでも楽しく取り組むことの重要性がある。面倒だと思っただけは何事もはかどらないし、それならいっそ楽しんでしまおう、そしてそれこそが向上の一番の近道なのかもしれない。

最後に、この短期間ではあったが仲のいい友人が日中間わらずできたことを心から嬉しく思っている。SNS を通じてではあるが、現在も何人かの中国の学生と交流を続けているし、日本の学生たちともずっと続いていくような縁ができたと思う。日中関係を良好なものにしていくには、国民同士の交流が大事だと改めて実感した。このような機会を設けていただいた日中両政府だけでなく、このプログラムに携わっていただいた方全てに感謝の思いでいっぱいである。今後も日中友好に関わっていききたいし、今回訪れることのできなかった様々な地域にも近いうちに足を運んでみたい。

◆今回の中国訪問を経て、私は、自身の中国理解の度合いの小ささを痛感しました。報道等で感じられる日本と中国との隔たりというものは、それほど大きく、深いものではないのだろうかという意識も芽生えました。しかし、一番衝撃を受けたのは、日本が現在の停滞的な状況を抜け出すための効率的な方法というのは、中国から学ぶことだと確信を持ったことです。友好、と言った観点からは少しずれてしまいますかもしれませんが、一番深く感じいったのはそれでしたので、以下に、それについて考えたことを書いていこうと思います。

きっかけは、中国における成長へのエネルギーの強大さを感じたことです。これは、いまの日本に最も足りていないものと言っても過言ではないでしょう。格差社会の存在や社会保障制度の欠落、政治経済の制限といったさまざまな矛盾をはらみつつも、それを飲み込み発展、成長へと向かわせる溢れるエネルギーは、おそらくかつての日本、高度経済成長期と言われた頃には存在していたものと同種なのではないでしょうか。このエネルギーは、国家規模の事業はもちろん、地元の市場、ひいては個人に対してまでプラスの効果をもたらしていると思われまます。例えば、訪問した王府井の商店街。ああいった活気溢れる、雑多な雰囲気のある商店街というのは、日本からどんどん姿を消していつの間にかなくなっています。共産党が国を握っているわけですから、ともすれば計画経済であってもおかしくない状況の中、市場開放を行い、経済の自由化を上から行った故の産物でしょう。また、北京大学、北京第二外国語大学、西南交通大学、といった各大学の学生からも、学習に対する強い意欲を感じました。彼らと話す中で驚いたのが、ほとんどの学生は毎日11時ごろまで図書館にこもり、学習や研究に明け暮れているということです。私が、『毎日そうするのは大変ではないか』といった旨の質問をすると、彼らは決まって『好きなことをしているし、自身の研究が成果を生んで行くのが楽しい』と答えました。まさに、『好きこそ物の上手なれ』を地でいく姿勢です。しかし、本当にそれだけで気力は続くのだろうか、と疑問に思い、帰国後、いくらか調べたところ、中国では研究に対する投資や援助といった面ではるかに日本より先にいるということがわかりました。日本では高名な教授でさえ、研究費が十分には賄われていません。iPS細胞研究で目覚ましい成果を遂げた山中教授が一般からの研究費の寄付の募集を開始したのは

記憶に新しいところです。それに対し、中国では誰にでもとは言わないまでも、実用化の余地のあるもの、基礎研究として重要だと思われるものに対する研究費の支出は日本よりはるかに多くなっています。この整った環境こそが、彼らのモチベーションの源流になっていることはおそらく間違いありません。つまり、中国では、少なくとも教育、経済面においては、非常によくできた正のサイクルができていているということです。経済面においては自由化を促進し、成長を生みその成長が動力となりさらなる成長を生む。教育面においても経済成長による豊富な資金を背景に研究に力を入れ、その研究成果をもとにさらなる成果を生む。そしてそれが新たな資金源となる。こういった流れが確立されています。これから考えると、現在の日本における閉塞感というもの、こういったサイクルが破綻、もしくは機能不十分であるところからきているのではないのでしょうか。経済はもちろん自由化しているものの、成熟傾向にあり成長は少なく、その少ない成長から生まれる小さな動力からはさらに少ない成長しか生まれず、結果的に停滞を抜け出すことができません。そして経済的な余裕がない中ではもちろん研究に十分な資金提供もできず、結果成果も生みません。この負のサイクルを日本はどう断ち切れれば良いのでしょうか。経済はある程度成熟の段階に入っている以上、おそらくそれは、研究への莫大な投資でしょう。当初は反対も根強いでしょう。しかし、研究での成果が上がれば、研究への理解も増え、さらに多くを研究に投資でき、またその成果が経済成長を促し、という正のサイクルを構築することができるはずです。そうして日本が再びかつての勢いを取り戻すことができるよう、私自身、精進していこうと思います。この度は貴重な機会をありがとうございました。